
Gジェネレーション The Creatures 本編

erugon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Gジェネレーション The Creatures 本編

【Nコード】

N6511V

【作者名】

erugon

【あらすじ】

世界はジェネレーションシステムによって管理されていた。ひとつの歪みが全次元に戦いを齎す。

幾多のガンダムが交錯する異次元。新たなるGジェネが始動する。

テレビシリーズの最終回のその後の主人公達の新たなる戦い。

作品 テレビシリーズ＋クロスボーン＋UC カップリング一様本編沿い（のはず）。オリキャラ数人あり。オリ主になっているわけではありません

プロローグ「歪みの始まり」（前書き）

素人作です。 G ジェネワールドのジェネレーションシステムとは違います。

以前書くといっていた小説の本編です。 と言ってもまだプロローグのリメイクです。

本来のG ジェネほどストーリーに深みはありません。
それではプロローグをどうぞ。

「プロローグ」歪みの始まり」

幾つ物次元が存在するこの世界、世界は8秒ごとに確定していく。確定とは、その時間が過去に起こったものとして記録されること。そうなれば、過去は変えられず、変えてもパラレルワールドが発生するだけ、未来は変わらない。誰が決めたかはわからない。ただ、その8秒間なら過去を変えられる。過去を変えられたのなら、未来も変わる。だが過去に戻ることができなければ、変える事はできない。

パラレルワールドと呼ばれる支流、それを生み出す本流。だが、本流はこの世界に何本がある。

支流は幾らでも発生しては消えていく。本流より早く時間が流れ、支流の起きたことが本流に反映される。だから支流は必要なくなれば消滅していく。だが本流は決して消えない。そして本流でも、まれに二本存在するときがあり、別々の時間を進む時限もある。最終的にはその二つはつながっており、未来に違いは起きない。確定がしっかりと進行しているのなら本流は消えることなく、支流の数も安定している。だがそれは、全次元を管理するシステムが正常に機能しているのならの話。

全次元を管理する「ジェネレーションシステム」、誰がいつ作ったのかわからない。

そして本流と支流を管理するジェネレーションシステムには、二つの惑星型演算処理システム、

一つは、「PMBプログラム（Parallel-Management

ent-and-Bond-Program)「

そして、「CRMプログラム(Confirmed-Records-and-Mainstream-Intervention-Program)「

この二つを持つ。惑星型と言うとおり直径は月とほぼ同じ大きさをほこる巨大な演算処理システムである。ある世界の量子演算型処理システムの数十倍の処理能力を持つ。

PMBプログラムは支流の管理をして、必要の無くなったパラルワールドを消去して、支流による本流への過激な影響を抑える。又、支流どうしを結合させ、新しい支流を作り本流の未来の選択範囲を広げる役割を持つ。

CRMプログラムは本流を管理しており、本流の出来事を記録して確定を行う。支流の過剰な影響で、本流に異変が出たとき、その異変を調査解決する役目を持つ。

この二つのプログラムが存在することにより、世界は安定している。

ある時、2つのプログラムは、自らのいる次元に迷い込んだ人間を、それぞれ1人発見し、捕獲した。ジェネレーションシステムは特殊な次元に存在し、人間どころか生物はいない。いや、入り込むことすら不可能なはず、だから捕獲し検査したところ、記憶喪失となっており、都合が良いことなので、そのまま生体端末として使用した。知能を持つ2つのプログラムは本流の現状を観察した。

そして本流の観察を続けていると、PMBプログラムの生体端末の本来人間としての自我と記憶が目覚め、いつしかPMBプログラムは、生体端末によって掌握された。生体端末にされていた者は、人類に絶望していた。一度は信じることをあきらめたが、もう一度信じようと思ったが、記憶を失い、自分でも知らぬ間に人類はまだ争っていたことに嘆き、そのとき記憶と自我が完全に覚醒し、地球にへばりつく人類に対して、いや、今や全人類に対して滅びを与える事を誓い、新たな次元を形成し、人類の争わない、新しい未来を作り出そうとして、邪魔な他の次元を消滅させようとした。自分がいた次元以外の他の次元の人類に対して、その次元にいた人類に対し敵意を持っていた死者と、機械のデータから、肉体と全次元を攻撃して人類を抹消するための機体を作り出した。そしてほかの次元を攻撃するために兵力を整え、侵攻の時をうかがった。

そしてまずはじめに、確定を妨げ、未来を変化させようとした。幾つ物次元と、同じ次元の中の別々の時間で確定が止まってしまっている。このままでは何度も未来が変えられ、幾つもの次元の未来が交じり合い本流はある次元はねじれ、いつしか別の次元と衝突して、素粒子も残ることなく、対消滅するとゆう運命を突きつけられた。

未来の変革を行い、未来が変化して、平和になれば残しておくという生存の道と、ならなければまた変え、どうしても変わらなければ、次元どうしをぶつかり合い対消滅させる道、という二択の篩にかけている。邪魔するものは復活させた者たちを使って排除する。肉体と機体を作り出すまでに、時間はそこまでかかりはしない。

これに気づいたC R M Iプログラムも、本流の消滅を阻止するべく、いくつかの次元の調査の結果、支流に存在しない未来を進む次元が、いくつかあることがわかっていた。本来、そんなことはありえるはずが無いのだ。しかし調査を進めると、それらの次元に共通するものがあつて、それはある機体だった。おそらくその機体が、何らかの鍵になると思われる。

人の形をしている機体、人の想いを力へと変える鋼鉄の鎧。

その名は「ガンダム」

そしてそれらの世界に攻撃が始まった。

ワームのような動きをした、先端が尖り、ターゲットを見つけると先端を五つ分けるように開いて捕獲するという、どの次元にも存在しない兵器を導入させ、何人もの人間を捕獲した。逃げ切った者もいたが、その数はほんのわずかだった。狙われた者は、政界の主要人物から、会社員などの一般人に、幼児まで、規則性の無い様だった。だが、ある一握りの人のみだが、共通点があつた。

その者たちの兄弟、恋人、夫、又は、父親が「ガンダム」と呼ばれる機体に乗っていた。

未来を変える力を、P M Bプログラムの生体端末にされていた者は恐れた。その力を知っているから。何度と無く自分に死をおよぼ

しかけ、大切な人を、戦友を、討たれ、最後の戦いにも「ガンダム」の名を持つ機体に敗北して、気づけばこの次元にいた。だから「ガンダム」のパイロットたちの大切な者を奪い、戦わせれない様にした。ようとした。

時間は少し戻り、攻撃が始まる前、CRMIPログラムは生体端末の自我と記憶を覚醒させ、「ガンダム」のパイロット達に接触を試みた。彼自身のつてを使ってターゲットにされている人を一人でも多く救うために、ある組織のトップに協力してもらうために。しかし、彼のいた次元以外では力を借りれないので、仕方なく一人でこなすしかなかった。だが、CRMIPログラムは確定を再開するために、プログラムを再構築する必要がある、手が離せないなので、生体端末だった者には次元と次元を飛び越える機体を与えた。

その機体名は 「RX-93V3 Ex-vガンダム」

その機体を駆り、「ガンダム」に乗っていたパイロット達のいる次元に向かおうとした。PMBプログラムを掌握したものが、全次元に攻撃を加える前に、CRMIPプログラムより出撃しようとするが、間に合うかわからない。しかし、間に合えばこちらにとっては、大きな戦力となる。

ガンダムのパイロットは次元を移動するためゲートを作ろうとする。彼のいた本来の次元、そして別のまだ見ぬ「ガンダム」のいる次元へと通じてる。

彼の目に揺るぎはない。背中に付いた8機のフィン・ファンネルが一直線と言うより、若干折れて曲がっており、円形を作りだし、その中心に黒く歪んだ時空の穴が出現する。其処を通れば別次元へい

くこたができる。

「大切な人を守りたいか。」とゆう問いを頭に浮かべ、その次元の穴を見つめ返しレバーを握る。
機体のブースターに火が入る。

「EX-Vガンダム アムロ・レイ 発進する！」

始まる。

今、次元を越えたガンダムの戦いが

ブログ「歪みの始まり」（後書き）

感想、評価お待ちしております。アドバイスもできればお願いします。

更新は不定期です。時に2週間以上未更新になる可能性があります。未永くお見知りおきを。

機体説明

E X - ガンダム（前書き）

主人公組み＋ボスはオリジナル機体（最終搭乗機の改造版）です。
新しいのが出るたびに説明は書いていくつもりです。

機体説明 E x - ガンダム

機体名「E x - ガンダム」

基本的にはH i - のデータから作られている。動力や武装に別の時間や次元の技術が使われている。

動力 ミノフスキードライブを内臓 ニュートロンジャマーキャンセラー搭載

射撃武装 H i - 用ビームライフル*1 H i - 用ニューハイパーバズーカ*1

H i - 用右腕部マシンガン*1

格闘武装 H i - 用ビームサーベル*2 H i - 用左腕内臓ビームサーベル*1

サイコミュ兵器 フィン・ファンネル*12バックパックとサイドアーマーでの再充電可能。背中に8機、腰の両側に4機（片方二機づつ）搭載している。

ファンネルを2個で四角形、4個八角形で、6個で十二角形を作り、2、4、6、の順に機体に近く、その中心にビームライフルを撃つと、ガンダムサヴァーニヤのフルバースト（ウィキ参照）のような拡散したビーム砲となる。拡散範囲は縦横約10mほどの円形状。バリアー展開可能。ビームの発射口からビームソードを出し、敵機に突入させる近接武器にもできる。

八機を使って円形状に展開して異次元のジャンプゲートを作れる。

クアンタのようにワイプも可能

左手の甲にビームシールド搭載 指部にダミィバルーン、トリモチランチャー搭載

フルサイコフレーム採用 ただしNT-Dは不採用

機体説明 E X - ガンダム（後書き）

これはやめたほうが良い、こんな武器を使って欲しいなどありましたら感想に書いておいてください。作者オリジナル機体考えるの苦手でした。アドバイスもおねえします。

第一話「UC98年めの時間」（前書き）

今回から別次元にアムロ君が突入する予定です。
題名どうりユニコーンから2年後が想定しており、アムロ、OVA、
ゲームなどの主人公を除いて行きている想定です。
それでは第一話をどうぞ。

第一話「UC98年めの時間」

EX - ガンダム（以下Nガンダム）は次元と次元の狭間を飛んでいた。今から向かうのはUC98年の12月、96年に起こった後の、「ラプラス戦役」と呼ばれた戦いから2年、世界は安定してはいた。7年後にマフティー動乱が起こったのだが関係は無い。

アムロはNガンダムの中で、ターゲットにされている者を調べた。CRMIプログラムの調べたところでは、Zガンダムに搭乗していたカミーユ・ビダン、ZZガンダムに搭乗していたジュード・アークシタ、そして、ユニコーンガンダムに搭乗していたバナージ・リンクス。この三人に関係の深い者が狙われていることがわかった。到着した日が敵の侵攻が開始される日だった。本当ならピンポイントではなく、もっと前から向かって、難なく救出するはずだったが、PMBプログラムの介入で時間が狂いピンポイントとなってしまうた。CRMIプログラムは後日にならないだけ良かったと言っていた。

カミーユは今はUC96年にファ・ユイリイと結婚、1歳の娘がいる。名前は戦場に散った姉のような人であった、エマ・シーンの名をつけた。人としての幸せを得れず、散ってしまったことを忘れず、守り抜くという、意思もこめられている。髪の色はエマと同じ茶色である。アナハイムにブライト・ノアの手を借りて就職しており、精神崩壊の後遺症は見受けられない。ニュータイプとしての勘は衰えていないのか、時々空を見上げて何かつぶやいている。今は、ニイザシティに住んでいる。

ジュードは共に木星へと向かったルー・ルカと一緒に、UC97年に一度シャングリラへと帰還しており、98年初頭にルーと結婚した。ルーはエウーゴを辞めていたので二人はブライトの計らいで、アナハイムに勤めることになっていた。シャングリラに住むビーチャとエルも結婚しており、二人とモンドやイーノ、そしてリイナも来年には、月へ移住することになっていた。ジュード達も月の工場で働けることになっていたので、ガンダムチームが集まることを喜んでいた。

バナージはオードリー・バーンと共に、スペースノイドの差別撤廃に尽力している。マーセナス家とビスト財閥の繋がりが皮肉にも功を奏して、連邦議会との会談や、コロニーの環境改善は順調に進んでいる。二人は元々相思相愛の中であり、バナージがオードリーのボディガード受け負っており（リディに鍛えられた）、共に世界中を飛び回っており、98年の12月ごろは、日本のトウキョウシティと呼ばれる都市でホテルを取り、翌日には車でコロニーからの、逆移住者に住む自治体の実態調査を行う予定であった。

アムロはデータを見ながらつぶやいた。「この三人に近親者や恋人的人間が狙われるとしたら、ユイリイ・ビダン、ルー・アーシタ、リイナ・アーシタ、オードリー・バーン、、、このアルベルトって言う奴はたぶん狙われないだろ。元敵のようだし。」そうしてデータを见ていると到着した。UC98年の次元に。

「まずはブライトに連絡してみるか。あいつはこの三人とも面識があるようだし。」そして昔ロンド・ベルで使っていた連絡コードでブライトへと通信を音声のみで送った。連邦首都、ワシントンのブライトのいる司令室（個室）では、「電話か。誰だろう？」そしてボタンを押すと、画面には「sound only」と表示され、聞き覚えのある声が流れてきた。「ブライトか？」一瞬考え込み、ある考えが頭をよぎると、「そうだが、おまえはまさか、アム」「時間が無い今すぐカミーユ・ビダン、ジュード・アーシタ、バナージ・リンクスに連絡しろ。そしてお前の権限でロンド・ベルを動かして彼らの保護をしろ。」こんなことを自分に言うのは彼しかない！と確信し、「待ってくれ！おまえはアムロなんだな。何があった？」「彼らが狙われている。彼らを失うわけにはいかない！」「だが、動かそうにも向かわせれるのは、オードリーコロニー大使と一緒にいるバナージのところ位だ。二人は一般市民でそれを守るのは私たちの義務だが市民一人に動かせはしない。」アムロは少し考え込んだが、「かまわない。あと二人はいまどこへ？行って直接保護する。」すぐに端末で調べると、「カミーユはニイザシテイ、ジュードはサイド1コロニー番地シャングリラにいる。」「そうかありがとう。」「そう告げると、通信を切って、ニイザシテイに向かった。ブライトは「アムロ、いまさらになってどうやって生きていた。ばか者が。」「だがその声は少し嬉しそうだった。そしてロンド・ベルの通信室へ連絡して、要人警護のSPチームを派遣するよう命令した。運よく日本にもSPチームが居りすぐさま向かわせた。

ニイザシテイに着いた時には、時すでに遅し、あのワーム状の敵がワープゲートから飛び出て、徘徊していた。「このっ！化け物がああああ！」「ビームライフルの威力を絞り、こちらに注意を引かせた。そうしながらカミーユを探すと、車に乗って逃げる姿を確認

した。だが、そこに別のワームが迫り車を横転させる。何とか車から出るもワームが迫る。「ユイリイ立つて！」しかしそこにまで近づいていたワームにカミーユは吹き飛ばされ、ユイリイは足を打って立てずにいた。「いかん。近すぎて撃てない！」ライフルの威力を最小にしているとはいえ、あまりに近すぎる。そこで最大出力で接近し力ずくで引きはなそうとするも、先にワームは口を開きユイリイを捕獲しようとした。が、間一髪カミーユが起き上がり、ユイリイとその腕に抱えられた傷ひとつ付いてない赤子を抱え走り去った。「間に合った。さあ、消えろ！ライフルの威力を最大にして、ワームをゲートごと貫き、両方とも破壊する。」カミーユの持つ携帯端末に連絡を入れておき、そして自分の上空にゲートを作り、シヤングリラへと向かう。

シヤングリラに着いたときはまだ侵攻されておらず、ジュードを探す時間ができた。すぐに見つかったが、接触する前にワームが次元の壁を破り進入してきた。「ここの低重力下なら、フィン・ファンネル！」展開してワームを撃退する。ひとつのゲートからしか出てこない、そして新たにゲートが開かれない、直接ジュードの前に出現しなかった、このことから出現できる場所は決まっていると思えた。スピーカーを使い、「ジュード、聞こえているか。聞こえていたのなら今すぐシエルターに非難しろ。」そう言うワームに向けてビームサーベルを抜き、斬り付ける。ジュードは「今の声ってまさかアムロさん？でもなんで？」向こうからるルーが呼びかける。「ジュード早く！」ゲートをライフルで壊すと、12機のファンネルは全ての敵をロックオンする。そして一気に敵にビームの雨を降らせるとビームにつらぬかれ破壊する。ジュードにも連絡を書いて

おき、今度はバナージの元へとジャンプする。

バナージとオードリーは、すでにSPによって保護されておいた。瓦礫を背もたれに二人は座っている。「オードリー、大丈夫か、怪我とかは。」「私よりあなたです。私を守ろうとビルの爆発の炎から私をかばって」バナージの背には火傷のあとがあった。「大丈夫、そこまでひどくないし、何より君が無事なら。」と、笑顔で答えると、そのとたんオードリーの顔は少し赤くなった。攻撃してきたワームたちも駐屯兵が大半をかたずけたので、ライフルで残ったのを一掃した。そして連邦議会場にもワームが出現したとの連絡を受け、向かった。

その後、ブライトにことの真実を伝えるべく連絡をいれた。

その後CRMEIプログラムにも報告をして、次の指示を仰いだ。「わかった。全員救出できたのは良かった。」アムロは残念さの残る口調で「だが、連邦議会の方は間に合わなかった。かなりの人数がさらわれた様だ。」今回の敵の狙いはカミーユたちガンダムパイロットだけでなく、政界の重要人たちも狙われていた。CRMEIプログラムは口調を変えることなく「だが、戦うためには彼らの力が必要だ。私達は万能ではない。救えない命もある。割り切らなくては、この先戦えないぞ。」「わかってる。」アムロはただ一言そう言つと、ゲートを開いた。「次はこの次元だ?」「いや、まだこの次元だ。時間のずれた本流がある。そちらに向かつてもらいたい。」Nガンダムはゲートへ向かっていく。

そのときだ。ブライトからメールが来た。「なぜ顔を見せないかは問わない。だが、生きてるのなら帰ってきてくれ。ロンド・ベルは今でも待っている。友としてお前の帰還を待つ。」アムロは少し微笑んだ。「おせっかいめ。だが、、、ありがとう。」メールを閉じると、返信することなく、ゲートに向かっていった。彼はわかっていて。すでに自分が死んでいることは。返事をすれば、彼らに余計に苦しませるだけだと。だから、彼は無言でゲートに入る。閉じたあとには何も残っていない。

何も残りはしてなかった。だが物質ではないものは残っていた。そう、ガンダムに乗っていたものたちは、確かに最強のニュータイプと呼ばれた男の気配を感じていた。

第一話「UC98年めの時間」（後書き）

戦闘シーンっぽいもの入れてみました。（「ライフル撃ってるだけじゃねーか」と突っ込まないでください。お願いします。）

ブライトさんが何か全シリーズで影うすいかんがあったので、パイロット達の後見人的立ち位置にしてみました。

ファさんはファが姓らしいので、勝手ながらカミーユの呼び方の変更をしました。

感想アドバイスお願いします。

敵説明 ワーム状の敵について（前書き）

また説明です。続き書くのがこれからだんだん遅くなるかもしれません。

機体説明ですがそれではどうぞ。

敵説明 ワーム状の敵について

名称 CTC (Caterpillar type capture machines)

胴体は円形型の芋虫状で、直径縦2メートルほど長さは計測不能。

先端が尖っており5つに別れ、星型に開く。歯が無数にあり、ガンダリウムも噛み砕く。

要人捕縛時には歯は収納されおり、代わりのケーブルでターゲットを捕獲する。

次元ゲートから出現し本体は次元ゲートの向こう側に存在し確認されていない。無限に近く伸びて、一度に10本ほど出現し、ターゲットを狙う。装甲は硬くなく、ヒートアックス（ザク？装備型）でも時間はかかるが溶断出来るほど。

攻撃してきた機体に対しては、歯を展開させ噛み付いてくる（想像としてはデビルガンダムのガンダムヘッド）。

先端の口の付け根部分に核となるシステムがあり、そこを砕くか、次元ゲートそのものを破壊するかなければ倒せない。そうしないと破壊箇所が再生していく。

敵説明 ワーム状の敵について（後書き）

攻撃してきた敵を謎めかす為にワームを作らせていただきました。
どこがGジェネだ！と、言ったりしないでください。お願いします。

本格的にガンダムが出るのは少し先です。戦闘シーンの書き方のコツ誰か教えてください。

第二話「UC141年めと158年めの世界へ」（前書き）

クロスボーンの話です。テテニス（ベルナデット）の年齢はトビアと同じ年の設定です。公式でも年齢がハッキリしていない為です。

シーブックとセシリーは戦いません。設定上30過ぎているのでそれに静かに暮らさせてあげたいので。

ウツソたちはみんなで暮らしている想定です。ガンダムは所持しています。

それでは第二話をどうぞ。

第二話「UC141年めと158年めの世界へ」

今アムロはまた次元と次元の狭間を飛んでいる。次に向かうのはUC141年の木星。かつてクロスボーンバンガードで、クロスボーンガンダムX3のパイロットをして、神の雷計画を止めるべくX1フルクロスを駆り、その計画を阻止した、知られざる英雄、トビア・アロナクスの元へ。

今回のターゲットにされている人物を調べると驚いた。そのパイロットは視力を失っている。その名はカーティス。一瞬でわかった偽名だ。直感がそう告げている。ほんとにMSに乗れるかと心配しながらも木星に向かった。

今彼は目の手術を行ってわずかに光を取り戻せたが、モビルスーツを動かすほど視力が戻ったわけではない。CRMIPプログラムの技術なら目の再生なら造作も無いが、承諾するか、そこが問題だった。彼はテニス・ドウガチの精神的支えになっている。それを無理に借り出すわけにも行かない。

だが、それ以前にPMBプログラムによりテニスがさらわれたら、木星の居住者は、地球に対して指導者の誘拐疑惑を向け、戦争に発展するかもしれない。なんとしても救出しなければならぬ。彼女が誘拐されたとして、猶予は2、3日以内で救出できなければ、最悪の事態に発展する。

ようやく木星に着いた。あとは彼女を保護するだけ。テテニスはエウロパの資源採掘所にいた。しかもまだあのワームは出現していない。そしてようやく見つけた。レーダー透過装置を発動し、接近する。

いま、彼女は採掘現場を無重力対応バギーで装甲している。実際は磁場で地表と本体を離れないようにして、進んでいるのでタイヤで走っているわけではない。アムロが近づこうとすると次元に歪みが生じた。「くそっ！遅かったか。急げ！Nガンダム！」最大加速で近づきながらライフルでゲートを狙う。

ワーム状の敵、CTCはテテニスを探し回っている。アムロはテテニスに通信を入れた。「君はテテニス・ドウガチか？」テテニスは驚いた。急に目の前にガンダムが舞い降りたのだから。「あ、あなたはいったい誰ですか。それにそのガンダムは。」その言葉をさえぎるように聞きなおす。「テテニスか？そうなら今すぐここから逃げろ。お前が狙われている！」オープンチャンネルだから、その周りにいるものにも届いているだろう。皆あつきに採られているから。だがテテニスは冷静に「それはできません。ここにいる方々を見捨てるわけにはいきません。」「仕方ない。今すぐ基地のシエルターにいけ。ここは守る。kカーティスもシエルターに連れて行け。彼を失うわけにはいかない。」「テテニスは承諾してくれた。

「よし。やるか、フィン・ファンネル！」木星の強い重力があるとはいえ、ほぼ無重力ファンネルの起動には造作も無い。CTCは約15本ほど、うまく弱点を撃てればすぐ終わる。それに、今回はシエルターに逃げさせれた。地中でも這わなければ捕らえない。

そんな考えが頭をよぎったとき、不自然な敵を見つけた。ゲートから出てすぐに首をたらしめているＣＴＣがいる。おかしい、あんな所にいる敵を攻撃した覚えは無い。まさかと思いライフルで撃ったところほかのＣＴＣが身を挺してかばった。その瞬間最悪の結果が脳裏に浮かぶ。ファンネルを回収し、身を翻すなりテテニスの乗っているバギーを追った。だがほかのＣＴＣがそうはさせまいと、全速力で迫ってくる。攻撃をかわしながら反撃するも、うまく中枢部に命中せず、時間をとられていく。ようやく追いつき安否を確かめる。「テテニス・ドウガチ！無事か！」だがその問いの答えを聞くまもなく、地面からＣＴＣが生えてきた。「しまった。ここにもすでにっ！」いきなりの奇襲でＮガンダムは吹き飛ばされた。「ぐおおおおお！」岩壁にうちつけられた。起動プログラムに不具合が生じ動けない。それもかまわずＣＴＣは口を開き、テテニスに迫り、飲み込んだ。それをカーティスは、ニュータイプ感覚を感じ取らせた。テテニスが消えたことを。死んでいるわけではない、がこの次元の外に隔離されている。Ｎガンダムの再起動が完了したところには、すでにＣＴＣは撤退していた。

アムロはカーティスに連絡を入れた。「カーティスいやお前はトビア・アロナクスだな。もう一度この次元に俺は来る。そのときまでにテテニスを助けたいかそうでないか考えておけ。」そう言うときゲートを開き入っていた。「あなたは、いったい誰なんだ。なぜ俺と同じ感じがする。」

次は１５８年さっきの時間から１７年まさか同じ次元で三つにも分かれているとは思っていなかった。ターゲットはウツソ・エヴィン。１８歳。１３歳でガンダムに乗ったらしいが過酷だっただろう

とわかった。彼の家には何人かほかに人がいるので被害が大きくなければ言いと願った。

ゲートを抜けて、たどり着いたのはUC158年、エンジェル・ハイロウ戦から5年。落ち着きを取り戻した地球で暮らすウツソたち。この5年戦いは起きていないわけでは無い。小規模な紛争が続いてる。カサレリアがまきこまれてはいない。が今、難民が集まってきている。農業の手助けをして貰いながら、生活を営み、食料を分けている。時々夜盗共が来るが、5年前の機体であるといってもV2ガンダムがあるので、困ってはいない。逆に燃料を届けてくれると助かっている（その天才的な腕で破壊すること無く捕獲している）。

アムロはこの世界に着いた時、戦闘に巻き込まれてしまった。「このっ、貴様らにかまっている暇など無い！」ライフルとサーベルで次々と機体を戦闘不能にしていく。数分たつて、あらかたの敵を片付けると、ウツソの搜索を始めた。だがカサレリアに今難民が集中している。戦略的価値が無いため狙われにくいのだ。こちらとしてははた迷惑だが。とにかく急がなければ、CTCはターゲット以外の者は関係なく傷つける。つまり難民全てが虐殺される可能性もある。そのときV2ガンダムを発見した。「あれは、確かこの時間のガンダム。ならあの近くに。」Nガンダムは方向を変え、V2に向かう難民の中にこちらに気づく者たちがいた。「何だあのモビルスーツは！」「こっちに来るわよ」「ガンダムの兄ちゃん頼むぞ！」その声を聞いてウツソはすぐさまV2に乗る。アムロはホールドアップのポーズを取り、コクピットを開く。「ウツソ・エヴィンか？もしそうなら今すぐシャクティ・カリンとともにここから逃げろ。」

話はその後にだ。」「ハッチを閉め、レーダーを確認したすでにゆがみが始まっていた。

ウツソは自分でもわからず行動していた。」「シャクティ、手に乗って。早く。」「彼は何故あの男の言うことをまともに信じているのかわからなかった。シャクティは掌に乗ったときには周りの難民達は散り散りに逃げていた。上空を見上げるとそこで誰かが戦っている。

あのガンダムだ。そのライフルに先には見たことの無いワーム状の敵、しかも空には変な黒い穴、そこでウツソはシャクティを降し、V2の予備ライフルを手に取る。」「加勢します。ガンダムのパイロットさん!」「何をしている。彼女を連れて早く逃げる。」「しかしV2は引かない。」「他人に助けられたままで逃げるなんて事できません!」「仕方ない。落ちるなよ!」「二機のガンダムはCTCに向けライフルを放つ。何とかしてゲートを破壊したいが、届かない。戦闘が長引いていくと、遂にV2のエネルギーが切れ始める。元から少ない燃料がそこを付き始めている。」「やばいもうエネルギーが!」「チャンスと言わんばかりにCTCが牙をむけ迫る。ガンダリウムを砕く牙がV2の腕に、足に喰らい付き、引きちぎる。何とか不時着したが、さらにCTCはV2とシャクティに迫る。しかしゲートに向けNガンダムの最大出力のビームが直撃すると、ゲートが崩壊、CTCの動きは止まる。

アムロは二人の無事を確認すると彼らの携帯端末に連絡を入れておき、ゲートを展開すると次の次元に飛ぼうとした。そんなガンダムを見たウツソは「待ってください。あなたは何で僕と同じ感じがするんですか。何で僕達を助けたんですか。」「アムロは何も答えずそのまま飛んでいった。

「次はもう宇宙世紀ではないのだな。まだ時間がかかりそうだ。」
そうつぶやくと次の次元に付くまで仮眠をとる事にした。生体端末
と言えど中身は人間だ。疲れはする。

CRMプログラムの話では次は未来世紀と言う年号が使われて
いるらしい。

そしてアムロは少しずつ眠りに落ちていった。

第二話「UC141年めと158年めの世界へ」（後書き）

一気に2つ時代を書いちゃいました。この二作品は自分あんまりしつかりと見ていなくて、所々だっただんでウイキ等を活用して書きましたので、おかしい点があると思います。あつたら感想とかに書いてください。

第三話「FC65年めとAC201年めの世界へ」(前書き)

続いてはGとWです。この二作に関して続編がいろいろで出てるみたいですが、完全無視していきます。例えばドモンの弟子が出てくる話、Wのオーロラ姫など。

ほぼオリジナルになると思います。

それでは第三話をどうぞ。

第三話「FC65年めとAC201年めの世界へ」

FC60年ドモンはガンダムファイトに優勝し、地球へと凱旋した。

それぞれのけじめのため、宇宙で、地球で、ガンダムファイトの傷跡を癒すため、世界を回った。ひどかった。そうとしか言いようが無い。荒廃した町。砂漠化が進み死に絶えそうな森。海に沈みかけ逃げ場の無い島。自分達のやってきたことがここまでひどかったのか、そう思うと胸が痛かった。世界を回って3年、またガンダムファイトの始まりがきた。サバイバルイレブン、11ヶ月間の生き残りをかけた戦いが、また開始された。もちろんドモンの元にも、もう一度ガンダムファイトの出るよう頼まれたが、嫌だった。だがここで自分が出れば、被害を最小限にとどめる戦いをすれば、そう思い出場を承諾した。シャッフル同盟には、それぞれの担当を決め、ガンダムファイトによる被害を抑えることに協力してもらえた。彼らは出場しないと言っていたので、この大会はおそらくネオジャパンの勝利と思われた。

そして予測どおりドモンが優勝した。その年の議会の決定でこれ以降ガンダムファイトは決勝戦での戦いのみ、サイバルイレブンの廃止を決定した。地球はの被害は元々サバイバルイレブンがあるからで、それをなくそうということに決定した。ちなみに、このガンダムファイトの閉幕式にサプライズで、ドモンとレインの結婚式が行われた。3年の旅、1年の戦い、結婚している暇など無かったし、年齢的にちょうど良かったので、アレンビーが言い出したのだ。

そしてFC65年の終わりに近づいてきたとき、娘のシグレが生まれた。

アムロは仮眠を終え、ドモンについて調べていた。妻子がおりその子供は生まれたばかりだと。アムロにも恋人の一人くらいいた。死んでしまったが。しかもフレンドリーファイヤで。だから戦いから開放され、ようやく幸せを手に入れた者を戦いに巻き込みたくなかった。だが奴らはそんなこと構いなしに攻撃してくる。ドモンはいま京都に住んでいる。本来はネオジャパンに住んでいるのだが、今はアルティメット細胞の自然蘇生実験をしている。最初は嫌だったが兄と師匠が望んだ地球復活を達成するにはアルティメット細胞による自然的再生しかなかった。だがうまく自然的再生にこぎつかなかった。CRMIPログラムなら、アルティメット細胞の制御はできる。戦うことの承諾の代わりにこの技術の提供をするつもりだった。

FC65年の次元についたとき、すでに戦闘は始まっていた。やはり時間が狂っている。「また間に合わなかった！彼らは無事なのか？」データにあったドモンたちの住居のほうは、すでに襲われている。CTCは大体20から30くらい。こっちに気づいたのか道を塞ぐ様に牙を向ける。突破するためライフルを構え撃とうとした時、遠くから声が聞こえる。

「出るおおおおおお！ガンダアアアアム！」何事と思ったとき、すでにそこにはガンダムが立っていた。「貴様ら！何

ものだあ！」ドモンはＣＴＣに向かつていき、拳と蹴りを叩き込む。ＣＴＣの首が吹き飛ぶが、再生してしまう。アムロはすぐにゴッドガンダムに通信をいれＣＴＣの弱点のコアの位置を伝えた。「誰か知らんが加勢感謝する。」ドモンは一気に気を高めると、「俺のこの手が真つ赤に燃える、勝利をつかめとどろき叫ぶ！ばああああく熱うううう、ゴッドフィンガアアアア」ＣＴＣに向け右手を突き出し、確実にコアを貫く。だが１匹討ち逃す。「しまった！」アムロも着気づいたが、他のＣＴＣに阻まれる。「レイイイイン！シグレエエエエ！」二人が狙われたことで一瞬集中を切らしてしまう。そこを狙って他のＣＴＣがゴッドガンダムの左腕、バックパック、左足を食いちぎる。「がああ！」そのまま地面に体を打ち付けてしまう。「やめろおお！」叫びながら必死で手を伸ばしたが、二人はＣＴＣに飲み込まれた。すぐに撤退して跡形も残っていない。

アムロは自分の不甲斐無さに苛立ちを覚えた。もうこれで３人目ドモンには連絡を入れておきその場を立ち去った。そしてゲートを開き中に入る。

不本意だがこれでドモンに戦う理由ができた。そしてまだ、これからもいくつかの次元に行くが、いったい何人の人を助けられないのだろうか、そう思ってしまう。どうすれば救出できるか。どんなガンダムを作り出せば、ＰＭＢプログラムに勝てるのか。いろいろ考えていると二つ目の次元に着いた。

ＡＣ２０１年。遂に迎えた２００年二十歳を過ぎたヒイロ・ユイ

は非公式にリリーナの護衛を担当していた。プリペンダーからの正式な要請では有ったがリリーナには伝えられていない。そのらのSPじゃ気づけないように、気配を殺し、ばれる事無く守ってきた。例えばリリーナに近づこうとしていたテロリストを締め上げたり、スナイパーが狙っていれば逆に撃ち返したり、とちゃんと任務をこなしていた。ヒロの護衛は本来リリーナが要請しており、それを拒否してあえて非公式となる事で隠密として動いていた。5年間そうして過ごしてくれば、勘のいいリリーナは、遂に気づいてしまった。ヒロが近くにいて、今も守ってくれていると。

アムロはヒロの事を調べるのに苦労していた。なにせ公式記録上すでに5年ほど前に死亡扱いになっていたからである。だが公式記録上の生前、リリーナ外務次官と強い繋がりがあったことはわかった。生きているなら、確実にリリーナが狙われる。何とかヒロにそのことを伝えたかったが、住所などの情報が一切無いので、仕方なくプリペンダーに情報を流し、CTCに警戒することにした。

今回もPMBプログラムの介入で時間がずれ、ピンポイントでの作戦となった。しかし情報をリークする分には時間があつた。急いでリリーナのところに向かう。リリーナを見つけ、コクピットをあける。「あなたはドーリアン外務次官ですね。今すぐ強固な建物に非難してください。ついでにヒロ・ユイ君もだ。」リリーナは驚いて「やはりいるのですね、ヒロ。」だがその声の返事がする前に「伏せろっ！」ヒロは叫ぶ。横からCTCが迫る。アムロは急いでハッチを閉めリリーナの前に下りる。ライフでコアを撃ち抜くと、「乗れ！ヒロ、リリーナ！」その声で物陰からヒロが出てきて、リリーナを抱え、二人が掌に乗る。飛び立つがCTCは迫る、「二人ともしっかり掴まっている！」少し掌を閉じ、一気にバ

「ニアをふかす。市外に到達してスピードを少し緩める。」「ヒイロこの高さからリリーナを抱えて降りれるか？」普通の人に聞けば、馬鹿か、と思える高度にいての質問だが、ヒイロは、「問題ない。」その一言、リリーナは何か言いたげだが、有無を言わず飛び降りる。リリーナが怪我をしないように、しっかりと抱きしめ、前転で勢いを殺して、うまく着地する。もちろんリリーナには汚れひとつとしてない。「ヒイロ！無茶にもほどがあります！もしあなたが怪我でもしたら。」「ヒイロは大丈夫だといってリリーナを降し、シエルターに向け走る。だがそのときはアムロは油断していた。二人の前にはシエルターの入り口がある。自分はCTCに向けライフルを撃つていて、CTCとヒイロたちの距離はまだある。だからだ。しかし思いもよらないことで、状況は一変する。別の場所に次元ゲートが開きそこから出てきたのはCTCではなく、モビルスーツの腕、その手にはじかれる瞬間、ヒイロはリリーナを突き飛ばし助けるが、ヒイロはそのままはじかれ、地面に叩き付けられる。その手は倒れているリリーナをつかみ、次元の彼方へと連れ去っていった。リリーナはヒイロの名を呼んだが返事は返ってこない。アムロは怒り、「フィン・ファンネル！フルバースト！」その攻撃がCTCのいるゲートへ迫る。CTCはゲートを守ろうとするが吹き飛ぶ。ゲートは健在でCTCも何匹か生きてる。だがライフルを最大の威力にしてゲートを破壊。駆けつけた国連軍によりCTCは排除されたが、リリーナは行方不明とされた。ヒイロもアムロもすでに姿をくらませ、何も残っていなかった。

アムロは気絶していたヒイロをつれて隠れていた。安易にフルバーストを使ったためフィン・ファンネルがオーバーヒートして、自己修復にまだ時間がかかった。ヒイロが目覚めると起きた話を話した。襲撃からリリーナが連れ去られ、身を隠すまで。そしてヒイロにこう言った。

「リリーナを助け出したくば俺に手を貸せ。もう少ししたら他の場所へ行く。そのうち帰ってくるがそれまでに如何したいか考えておけ。」数日分の食料を置いておき、自己修復が完了したので、次の次元に飛ばうとした。「あんたの名前は?」「アムロ・レイ」そう言つとゲートに入つていった。

「アムロ・レイ、、今この世界に何が起きているか、あいつは知っているのか。」考えようとしたが、思った以上のダメージを負っていたので、考えるより寝るほうを優先して、眠りに着いた。

二連続で救うことができなかった。怒りに任せフルバーストを放つてしまう。齒痒かった。全次元を救うには、ガンダムとそのパイロットの力が必要なのに、それを守るのは自身の役目であり、全うできてない。

ゲート内を進みながら考えていると、CRMIPログラムから次の行き先を示された。AW21年。

新たなる次元にアムロは進んでいく。

第三話「FC65年めとAC201年めの世界へ」（後書き）

勝手ながらドモンとレインの子供を出しました。雨つながりでシグレとしました。

Wのオーロラ姫の話は想定されていません。その話は支流の出来事といった感じにしています。

ヒロとリリーナは心の中ではお互いを思っているという設定です。いわゆる相思相愛です。

これからもしかしたら不定期更新になるかもしれません。ご了承ください。

感想 アドバイスおまちしております。

第四話「AW21年めと正暦2353年めの世界へ」(前書き)

ガロードとティファは5年間旅をしています。カリスと分かれたのがAW16年としてるのでAW21年としています。なので二人は21歳です。続編があるらしいですが無視していきます。

は最終回から6年後を想定しています。ロランは25歳となっています。ディアナは年齢不詳と言ったことなのでわかりません。ディアナの左薬指に指輪らしき物が確認されているので、ロランとディアナは勝手ながら恋愛関係とさせていただきますました。

作品的に守るべき人がいないと成り立たないので半ば無理やりになります。がカップリングを作りました。

途中出てくる機体については後ほど解説を載せます。

遅れましたがそれでは第四話をどうぞ

第四話「AW21年めと正暦2353年めの世界へ」

AW16年、第八次宇宙戦争から1年、ガロードとティファの旅は、北米のセントランジェの町から始まった旅。そしてAW21年に終わった、この町で。

AW16年、この町がガロードとティファの出会いの始まりであり、終わり、そして新たな旅の始まりとなった。旅立ちの日、ティファが不思議な感覚を覚えた。かつて、世界を破壊しようとした兄弟の気配を感じた。だが、あの戦いのころとは違う、穏やかなゆつたりした気配、もう滅びを望んでない、そう思えた。列車に乗り込む二人、そのとき確かにガロードはあの兄弟を見た。兄の目には激しく揺らぐ炎は無く、ただ、生氣も無く黒かった。弟の目には弱く、だがしっかりと生氣を持った炎が揺らいでいた。そのとき悟った。「もうオルバは世界の滅びを望んじやいない」そう確信して出発した。最初に北に向かってから、そして南米、アフリカ、ヨーロッパ、ユーラシア、アジア、オーストラリア世界中を回り、連邦政府の、地球圏制圧政策の緩和で連邦所属の中、独立と自治を勝ち取り復興したエスタルドに向かい、そこで二人は暮らしていた。来年にはコロニーを回る予定でもあった。

一方アムロはガロードを調べていたCRMIPログラム内のデータの修復が終わり、まともな戸籍の存在しないこの時代でも、調べることができた。今ガロードはティファと暮らしている。となると、やはり狙われるのはティファである。彼も自衛用のモビルスーツを

持っているが、スペックが低すぎる。ジャンク屋を営んでいて、改造がされていても、CTCの攻撃力を防ぎきることはできないだろう。CRMIPプログラムが、どれだけの確な時間に飛ばせれるかで成否が決まる。せっかく平和になった二人の世界を壊したくは無かった。なんとしても守りたかった。

そしてAW21年に到着した。CTCの想定襲撃時間まであと2時間きつていた。本来CRMIPプログラムのほうが、本流への介入権限が大きいのに、確定が停止していることで、PMBプログラムのほうが介入権限が強くなってしまっている。まだCRMIPプログラムは万全ではない。とにかくガロードを探すことにした。1時間程度でも、ガロードとティファを先に見つけて、かくまうことができれば、CTCは二人に近づけず、こちらが有利になれる。不確定要素はあのモビルスーツ。暗闇で色などはわからなかったが、確かに、アレはモビルスーツの腕だった。つまり、他にも次元を超える者がいると言うことだった。

アムロは機体を町の外に光学迷彩をかけに隠し、ガロードを探し始めた。さすがにNガンダムで町に突っ込むわけには行かなかった。だが足で探すとなると、かなりの時間を要した。CTCが来る前に何とかガロードを見つけれたが、襲撃が始まるまで30分と無かった。アムロが話しかけてきたとき、ガロードは最初疑ってたが、どこかを感じたことのある雰囲気を感じ、信じることにした。ティファに危険が迫っているとの事で、家にいるので急遽家に向かった。そして、ガロードとともに家の前に来る。「ティファ無事か?!」扉を開け、ティファの無事を確認するガロード。「ガロード、どう

したの？そんなに急いで」ティファはこのとき何か嫌な物を感じ取った。だが何なのかわからないので考えるのは後回しにした。ガロードはティファに近寄ってその手をとった「とりあえず一緒に来て！何かやばいことがおきるらしいから！」その瞬間ティファはある気配を感じた。「これは、、D・O・M・E・？」その気配をガロードの後ろから感じた。さっき感じたいやなものとは違う、D・O・M・E・の気配、アムロはティファの前に進み「驚かせてすまない。だが、今すぐここから逃げて欲しい。安全な所まで運ぶ」ティファは直感でこの人は大丈夫、悪い人じゃない、そう感じ外に出て、町の外に向かい、Nガンダムの手の上に乗った。時間まであと10分余裕がある。町から離れ、町を見るとCTCが蠢いていた。「来たか、、二人はここに隠れている、すぐ戻ってくる」町に向けて飛び、たどり着くと、フィン・ファンネルを展開する。宇宙じゃないから少し機動が遅い。だが弾幕を張るには十分だ。ライフとファンネルでCTCを蹴散らしていき、ゲートに最大出力でライフを打ち込む。

アムロは二人のところに戻ると、CTCについて話し。これから起こる戦いについてもわかつていることは話した。話し終えたところで、ガロードは疑問をぶつけた。「あんたは、、D・O・M・E・なのか？」返ってきた答えに少し驚いた。「違うが、、昔はニュータイプといわれていた」アムロは二人を町の近くに下ろすと「また来る」そう言うと、ゲートを作り、次の次元にとんだ。

CRMIPログラムに通信を入れた。「コンピュータ、俺がすでに接触した者、これから接触するであろう人物も含めて、それぞれにリアルタイムで今わかつている情報を伝えてくれ。ガンダムが存在する次元もほとんど少なくなってきた。後2、3個だろう。次元

座標の啓示を頼む」CRMIPプログラムからデータが来た。正暦2353年、これが次の次元だ。狭間を進みたどり着いた。正暦2353年の世界に。

西暦2353年、ギム・ギンガナムの反乱から6年、ロランはディアナ（現キエル）と暮らしている。月からの支援で暮らしており、ロランは畑を耕しながら、ディアナは女王としての地位を捨てたので、掃除、洗濯、料理などしている。結婚しているわけではないが、カモフラージュとして結婚指輪をはめている。二人とも満更ではないが、月と地球の格差は、キエル（現ディアナ）の活躍で少なくなりつつある。技術的な進歩が進み、地球も繁栄してはいる。ただ戦争の火種が全て消えてはいない。しかし、キエルの説得で何とか戦争は回避している。ディアナは、時折真の女王として地球と月の交渉を行っている。そのときはキエルは少しだが休みを取っていると言うことは本の数人しか知らない。キエルの統治によってかなり世界は安定している。キエルはハリーと結婚し、月の情勢はいまや最盛期ともいえる。そんな平和が続いた。

アムロがたどり着いたとき、想定襲撃時間まで1時間無い。何とか二人を匿わなければいけない状況で、1時間は厳しかった。正確な居住場所までつきとめれなかったので、山狩りするかのよう探索さなければいけない。「くそつ。こんなじゃCTCが来てしまう。どこなんだ、いったい！」ようやく二人を見つけたときには、すでに残り数分となっていた。「見つかったか、そこにいるのはロラン・セアックか？もしそうなら今すぐディアナ・ソレルとともに山を降りろ。君達は狙われている。ロランは上空を見たとき、機械人形がいることに驚き、黒歴史のデータにあった、ガンダムと呼ばれる機械人形にそっくりなことを思い出した。なのに不思議と警戒してい

ない。自分でもわからないが。「あ、あなたは誰ですか。なぜディアナ様の存在を知っていいかん！逃げろ！」え！？」ＣＴＣが次元の壁を砕き進入してきた。「早く彼女を連れて逃げろ！」「はい！あなたはどうするんですか！」「時間を稼ぐ、その間に逃げ！」

ロランは言われたとおり、ディアナと麓へ向かって降りた。数が尋常じゃなかった。いつもなら２０や３０くらいなのに、今回は５０に近い。しかもこちらには増援なんて望めない。一機だけでこれを相手するには無理がある。ファンネルで弾幕を張るも数が違いすぎる。そのため、次第に弾幕を抜けるＣＴＣも出てくるだろう。ロランたちを確認しようとするディアナは一人で町に向かっていった。ロランがいらないことに驚いたが、地上からシルバースモーが飛んでくる。「ロランか？」「はい。ディアナ様は山を降りました。加勢します」

「エフィールドサーベルを展開し、ＣＴＣに斬りかかる。とは言えこの数、的確にコアを破壊するのは難しい。ファンネルもそこまで高機動に動けない。ディアナは麓まで着いたが、案の定、ここでもあのモビルスーツが出てきた。今度は全身が。」久しぶりだな。アムロ、この宿命、やはりどちらかが死ぬまで終わらんか。さあ、見せてみる、新しいガンダムの性能とやらを」この機体が出現するとＣＴＣは急に活動を停止した。何事と思ってリーダーに現れた機体を確認しようと、二人が振り返った所にいたのは、赤いモビルスーツ、モノアイと一本角、２０数メートル有る少し大きいサイズのモビルスーツ、形の違う所はいろいろとあるが、紛れも無く、そのモビルスーツはくサザビー＞だった。その手にはディアナが掴まっていた。「ディアナ様！」

「ロランがサザビーにヒートファンで切りかかるも逆にビームサーベルで両手を切り落とされる。腰のグレネードでゲートが開くと、その中へと連れ去られていった。アムロはロランに通信をいれ、またくるとだけ言って、ゲートの中へと進んでいった。」

ゲートを通った瞬間C R M Iプログラムとの通信が切れる。サザビーだけいる。ディアナの姿は無く、おそらくは別の次元に飛ばされており、救出不可能だったであろう。だがサザビーがここにいると言うことは、奴もここにいると言うことだ。Nガンダムは右手にビームサーベルを抜き斬りかかる。「シヤアアアア」。「来たか、アムロ!」その声は紛れも無くシヤア・アズナブルの声だった。サザビーも右手にビームサーベルを取り出し、鏑迫り合いになる。「今までののは貴様の仕業か!」「そのとおりだ、私はこの世界を、いや、全次元を破壊する!」「人が人を自分のエゴで裁くなど、愚考だ!貴様も人の心の光を見たはずだ!」「確かに見たさ、だが変わらない。人はまた繰り返す。もう二度とこんな事はしない、二度と繰り返さないと誰が言える!貴様にも言えんだろう!」Nガンダムをはじき左手のライフルを連射する。Nガンダムはシールドで受け止め、左手に持ったライフルを打ち返す。「貴様の理屈だ!俺達は未来を切り開ける!」バズーカを3発連射する。サザビーは最初の一発を横とびで回避、ライフルで一発を破壊し、最後をサーベルで切り捨てる。「貴様も見て来た筈だ。ジェネレーションシステムの生体端末だったころ、世界は何度、戦いの業火に包まれた。いったい何人死んだ。ゆえに世界は滅びねばならん!行け!ファンネル!」サザビーはファンネルを展開する。バックパックから8機、左右の横脰外側からそれぞれ二機ずつ、計12機のファンネルを展開する。「人間は貴様一人に滅ぼされるほど、弱くわない。まして、貴様に滅ぼす権利など無い。ここで討つ!行け!フィン・ファンネル!」アムロもフィン・ファンネルを展開させ、二機は互いに撃ち合う。サザビーは胸部メガ粒子砲とファンネル、ライフルと背中中のビームガトリングを右手に構え、一斉掃射する。Nガンダムはファンネルでシールドを作り防御する。砲撃がやむと、ファンネルからビームソードを展開し突撃させる。シヤアは口元を歪ませ、こちらもファンネルからビームソードを出す。互角だった。二人はファンネルとビームが飛び交う嵐の中を突っ切り、剣を交える、サーベルが

擦れる度にビームの粒子がはじける。二機はいったん距離を置くとファンネルをそれぞれ円形にして自機の前に設置して、「ファンネルフルバースト!!」二機ともが巨大なビームをぶつけ合う。数分のぶつかり合いの後ビームが消えた後には二機のファンネルは全て消滅して、本体のみ残った。「さすがだな、アムロ。最後に聞く、これ以上私の邪魔をするな、捉えた者達もいずれ返す。望むなら何人か私を作る戦争の無い新世界へと招待するぞ。乗る気は「その気は無いよ!」ビームサーベルを抜いて接近する。「そうか、今は決着を急がない」サザビーはかわすと、腰のグレネードのようなものを後ろに投げる。そこにゲートが開く。「さらばだ。次に会うときは全力を持って貴様を殺す」そう言い残すと消えていった。「いいだろう、ならば俺も全てをかけてお前を殺そう」数分たつとCRM Iプログラムとの通信が回復し、一時間ほどして、ファンネルも再生し終えゲートを作る。

アムロは考えていた、「まさかPMBプログラムを掌握したのが奴だとは。世界いや、全次元は壊させはしない。」CRM Iプログラムから、次の世界の情報が来た。CE76年。しかも狙われているのは二人。

Nガンダムはゲートを展開し、次の次元へと進んでいく。

第四話「AW21年めと正暦2353年めの世界へ」（後書き）

大佐登場です。もちろん重要キャラです。

ガロードをもう少し活躍させたかったんですが素人、文章力皆無ゆえできませんでした。

ロランとディアナの関係がうまくかけません。誰か助けてください。

これからも書いていくので、皆さん見捨てず温かい目で見守ってください。

機体説明 ギガントサザビー（前書き）

一つ前の話に出てきたサザビーの発展型です。

名前は機駕太傳 司馬懿サザビーからギガタイプという読みから連想しました。無理なところがあるかもしれませんが。指摘お願いします。

機体説明 ギガントサザビー

機体名「M S M - 0 4 ? ギガントサザビー」

サザビーのデータから製作したがナイチンゲールのよ
うなファンネルの搭載の仕方をしている、ただし背部バインダーに
搭載しているのは8機

動力 Nジャマー搭載核エンジン ミノフスキードライブ

射撃武装 メガビームライフル*1 ビームガトリング*1
胸部拡散メガ粒子砲*1

*1
格闘武装 前腕部収納ビームサーベル*2 ビームアックス

脚部収納ビームサーベル付きアーム*2

ビームアックスは左腰に収納

サイコミュ兵器 ファンネル*12

内8機は背部バインダーに、残り4機を左右の外側横脰に
2機ずつ搭載している

両方とも再チャージ可能。12機を機体の前方に12角形上に並

ベその中心にビームライフルを撃つことによってガンダムサヴァーニヤのフルバースト（ウィキ参照）のような拡散したビーム砲となる。拡散範囲は縦横約10mほどの円形状。ビームの発射口からビームソードを出し、敵機に突撃させる近接武器にもできる。

ゲートを開けない代わりに特殊なグレネード弾頭を右腰に3個搭載している。

左腕にビームシールドを搭載

フルサイコフレーム採用 NT-D 未搭載

機体説明 ギガントサザビー（後書き）

ここがおかしい、ありえないなどありましたら教えてください。
主人公機のパワーアップを全て作るつもりです。何かアドバイスが
ありましたらお願いします。

今回はSEEDの世界ですこれからもよろしくお願いします。

第六話 「CE76年めの世界へ」前編（前書き）

今回はSEEDに入りました。カップリングとターゲットはもちろんキララクとアスカガの2組です。それとシンの活躍は少ないです。自分的に主役はキラとアスランですから。

いつもどおり会話は少ないです。ファンの皆さん申し訳ございません。文章力なくてスイマセン。

これから大体このくらいのペースになると思います。

最初のほうは駄文になっていきますが読める時間が有れば読んで下さい。

それでは遅れながらも第六話をどうぞ。

第六話 「CE76年めの世界へ」前編

CE76年、世界は安定を取り戻した。二人の英雄により。

一人はキラ・ヤマト、もう一人はアスラン・ザラ。

だが二人は悩んでいた。本当にこれでよかったのか。今だ小規模の紛争が絶えず、時たま思ってしまう。自分たちの行いが間違っていたのではないか。

デスティニープランの導入した方が世界にとっては良かったのではないか。そんな考えが頭をよぎる。そんな二人が、自分たちの行いが間違っていないかった、そう感じられるときがある。

二人が最も愛した女性、その二人が笑顔でいてくれるとき、コーディネーターとナチュラルが、何の隔たりも無く、ともに手を取り合っているとき。そんな時、世界に明日を齎してしまったことを悔いはしなかった。

アムロはこの二人についてのデータを見ていた。今まで見てきた者たちの仲でも、かなりつらい運命を背負った者達。彼らは今でも戦っている。対テロ、紛争解決、用心護衛、軍に所属しているとは言え、本音で言うともあまり戦いに巻き込みたくは無い。しかしやつらはお構い無しにやって来る。この二人は機体を持っているので、おそらくは此方には有利だろう。ただもうシャアが介入して来ないと言う保証はない。データを一通り見終わるとちょうどゲートの出口が見えてきた。

CE76年、今地上運用可能になったエターナルが、ベルリン郊外

の空に下りてくる。遠くの空には、オーブから発進したアークエンジェルが来る。

エターナルにはラクス・クライン、キラ・ヤマト、その他護衛隊の面々が乗っている。艦長はもちろんアンドリユー・バルトフェルト。護衛隊にイザーク・ジュール、ディアツカ・エルスマン、シホ・ハーネフース等。そして特別に呼ばれたものがある。それはシン・アスカ、ベルリン破壊活動阻止の立役者として呼ばれている。

アークエンジェルにはカガリ・ユラ・アスハ、アスラン・ザラ、そして護衛部隊が同行している。艦長にはマリュー・ラミアス、護衛部隊にはムウ・ラ・フラガ、他親衛隊等。

今日は終戦記念日、そしてここはエクステンデットの少女、ステラ・ルーシェが焼き尽くした町。今ここには平和記念の像が建てられている。

「もう二度と繰り返さない、こんな世界にはしない。」そう意味がこめられている。被害者から見れば滑稽だろう。そんな像を建てても意味が無いそうわかっていた。それでも何かしなければいけない。いや、したかった。たぶん、自己満足でしかなかったのかもしれない。ただ、此処にいる者たちは、全員戦争の愚かさを分かっていた。

アムロはあることを考えていた。終戦から二年目、ようやく落ち着いた世界で、急に指導者たるラクスとカガリが消えたら、この世界はどうなるか。おそらくさまざまな噂と真実が飛び交い、次第に相手を疑いだし、戦争に発展する。そうなれば確定が完了していないこの世界の未来は、完全に狂いだす。最高指導者がターゲットにな

って、浚われていて戦争に発展するのでは、という状況は初めてではない。テテニス・ドウガチの時とほぼ同じ状況。何とかして二人とも保護しなかった。しかもさらわれた際どれだけ早く救出できるかも問題になってくる。

この追悼式典兼平和記念式典は両方にとって好都合だった。最重要人物が二人まとめているからだ。どうすれば二人を助けられるか、いろんな状況に対応するために、作戦を考えていると、ついにたどり着いた。CE76年めの世界に。

エターナルは改修を施し、地上でも運用できるようになった。この追悼式典は最初は反対された。去年、ロゴス残党とパトリック派ザフトによつて襲撃を受けたからである。とは言ってもキラとアスランがばつちり防いだおかげで、被害はほぼゼロ、自分ら側には死傷者ゼロ。もちろん敵にも死者はいない。だから今年も追悼式典を行った。

アムロがついたのは丁度エターナルが下りてきて、少し遅れてアークエンジェルが来るのだが、その間くらいだった。

「まだオーブ側はきていないか。なら、ザフトにこの情報を渡しておくか」

アムロはエターナルに向けて国際救難チャンネルを音声のみにして流した。

「今すぐ武装を展開しろ。もうすぐ両国家代表を標的とした襲撃が始まる。繰り返す・・・」

こんな通信をすると言うことは、いたずらの可能性も考えられたが、決めがたかったのでモビルスーツ隊を発進させた。後から来たアークエンジェルはエターナルからの通信に従い、周囲を警戒した。アークエンジェル到着から十分ほど、遂にC.T.C.が出現した。

しかも状況は最悪、郊外に下りている船には走っても結構時間はかかる。幸運と言えばキラとアスランがそれぞれのガンダムに乗っていることだった。C.T.C.は二箇所から、それぞれ50機ほど引き連れている。シャアの気配は感じられないので、おそらく機会つかがっているかそれとも来ていないのか。エターナルに搭載している機体はキラのストライクフリーダム、イザーク専用ゲフ、ディアツカ専用ブレイズザクファントム、シホ専用ブレイズザクファントム、そしてシンのデステイニー、そしてドム小隊。アークエンジェルにはアスランのインフィニットジャスティス、ムウのアカツキシライイ装備型、新鋭隊のムラサメが5機とキサカの乗る元バルトフェルト専用ムラサメ。

ただこれだけのモビルスーツがいては、数だけそろえてもおそらく突破できないだろうと踏んでいる。不確定要素がある限り油断は出来ない。アムロは常に戦場を全体から見れる位置にいた。下手に加勢して疑われていては、思うような接触が出来ない。

船にラクスとカガリが向かっていると、次元の歪みが観測された。これまでの研究から次元に歪みが発生するときに、発生に仕方パターンがあることが分かった。そして今回のパターンはC.T.C.の出現時に観測されるものだった。

キラは危険を感じ取り、アスランに通信を入れた。

「アスラン、なんだかいやな感じがする。僕たちはラクスたちの護衛にまわろう」

「分かった急ぐぞ、車が破壊された以上危険が大きい。ロアノーク一佐、此处は任せます」

ムウは了解と返し二人はそれぞれの姫君のもとへ向かう。案の定、二人の行く手にはゲートが出現した。

「ラクスウウウウウ！！！！」「カガリイイイイイイ！！！！」

二人の目前に迫ろうとしていたCTCは空から来る光の矢に撃ち抜かれた。フリーダムとジャスティスが舞い降り、CTCの前に立ち塞がる。

「ラクスたちを狙って、何が目的だ！答えろ！」キラは似合わず声を張る。

「何故カガリ達を狙う！貴様らは何なんだ！」アスランも叫び、二機はCTCに向けコンビネーションバーストを叩き込む。

かなりの数のCTCが吹き飛んだが少しずつ再生していく。それは最初の出現地点で戦う者も同じように驚愕していた。

「そいつらはCTC、狙いは二人の姫君だ。触手の先端を狙え。そこにコアがある。それかやつらが出現した場所に強力な攻撃を加える。やつらが消滅する」

どこからか通信が入る。戦場にいたものがその通信に驚くが、その通信は真実を語っており、実際にしてみれば敵は消滅した。

あらかた数が減ってきたとき、1つ目のゲートに向けて強力なビームが打ち込まれる。それはNガンダムだった。驚く暇無く、残りのCTCは近づいてくる。

「何がしたいんだ！あんた達はっ！！！」

2つ目のゲートに向けデスティニーの超射程ビーム砲が撃ち込まれ、ゲートが消滅する。

三つ目と四つ目はキラとアスランのそれぞれの砲撃で消滅、二人の姫君は怪我ひとつ無い。

「キラ、ありがとうございます。いつもすみませんね、私のせいで」
「ラクスはキラが無事なのにほっとした。」

「アスラン、もうちょっと早く来いよ。まあ、ありがとつな」やは
りカガリはカガリだ。素直じゃない。

二人とも戦艦に帰還し終えた後、キラとアスランは護衛を残して、あの謎の通信の調査をしようと考えた。が、その必要は無い。アムロは人目のつきにくい場所に二人を呼び、そこで待っていた。

「キラ・ヤマトとアスラン・ザラだな。ガンダムに乗ったままでいいから聞いてくれ」

二人は不思議に思った。何故この男は二人の機体をガンダムと言ったのか。そう呼んでいるのは一部の人だけ。二人はこの男が今回の事件の何かしらの真実を知っていると思った。理由はピンポイントに接触してきたから。謎のモビルスーツが確認されているから。通信お声に似ているから。この3点から、二人はアムロの話を聞くことにした。

内容は驚きのものだった。ラクスとカガリが狙われている。しかも別次元の存在が。奴らが出現してきた場所に、何の仕掛けが無いことから、そうでも考えなければ違う場所からワープしてきた、と言う似たような考えしか浮かばない。他にこれからも進行してくる可能性があると告げ隠してあったNガンダムに乗る。

次の次元に行こうとしたとき、次元が歪んだ。

「キラ、アスラン、気をつけるこの近くに何かが出現する。この反応は・・・モビルスーツが来るぞ!!」3機はその場から飛び立ちあたりを警戒する。

そこに3機のモビルスーツが出現した。1機はモノアイのモビルスーツ、他はGタイプいはゆるガンダムタイプ。

「アムロ、私たちの存在によく気がついたな」

「キラ・ヤマトやはり君の存在を許すわけには行かないな」

「アスラン、この馬鹿息子が最後まで邪魔しおって」

回線が開いていないため3人には聞こえてない。次元の壁を砕いて

きた機体は名前を呼んだ相手に向け1個ずつに次元グレネードを使
って次元空間に引きずり込む。

アムロは回線を開き「その機体、やはりシャアか！」

「そのとおりだ、アムロ、貴様にあの二人の手助けをさせるわけに
はいかん」

そう言うとき次元グレネードでゲートを開き、その中に入っていく。
「此処で待っているがいい」追いかけるもゲートが閉じていった。
しかもこの次元は特殊で、解析が完了するまでゲートを開けない。

キラは、懐かしいといっても、この世で一番感じたくない気配を感じ
た。回線を開く。

「彼方は誰ですか。答えてください」

返ってきた答えは予想通りだった。出来ればそうでなかったほうが
良かった。

「よもや忘れてしまい、この声を、キラ君」

キラは認めたくなかった。アムロが話した死んだものが復活する可
能性がある、それが目の前で実現してしまっているのだから。

「ラウル・クルーゼ！！！！」キラはドラグーンを飛ばし、ライ
フルを構える。

クルーゼの乗る機体はそれをすべて回避する。クルーゼの乗ってい
る機体、それはZGMF-X666Sレジェンドのようだった。

「何故あなたが、いまさらその機体に乗っているんですか！」

クルーゼはドラグーンを飛ばしてくる。ドラグーンが飛び交う中2機はライフルを撃ち合う。

「私は確かに死んだ。だがなぜかは良く分からんが、ある男によって蘇らされた。そして手を組んだ。世界を滅ぼすと言う盟約のもとにな！」

ビームスパイクを持つ2機のドラグーンがビームスパイクを発生させ迫る。キラはドラグーンからビームソードを展開させそれぞれぶつけ、お互いに破壊される。キラはライフルを連射してドラグーンを落とそうとするが、レイ・ザ・バレルの操縦とは違いそう簡単には行かない。キラはSEEDを発動して決着をつけようとするが、今までの敵とは桁違いに強い。キラは後方から迫る3機のドラグーンを宙返りいしながら避け切り、ライフルで撃ち、1機破壊する。そしてレジェンド本体に向けカリドウス複相ビーム砲を放つ。ビームシールドを展開して防ぎ、ライフルを撃ち返す。フリーダムはよけてライフルを腰にマウントしてサーベルを2本抜く。

「はあああああ！！」獣のように叫びを上げて切りかかる。

レジェンドはビームランスを両手に持ち受け止める。そんな中でも二人のドラグーンは飛び交う。しかし空間認識能力としてはクルーゼのほうが上手だ。次第にフリーダムのドラグーンは減っていく。確かにクルーゼのほうも減っているが、もともと数的に不利が加わり1機ずつ破壊して言っても最終的に相手のほうが4機残る。

だがクルーゼは此处で驚くべき行動を起こした。今まで気がつかな

かったが、腰にまだ6機ものドラグーンがマウントされていた。

「レジェンドじゃない。これはいつたい」

そう、クルーゼの乗っていたのはレジェンドじゃない。その名は「ZGMF-X666SRリベンジプロヴィデンス」復讐の天帝。

「1ついいことを教えよう。この機体はまだ未完成でね。ちなみにもう一人いたGタイプも未完成だがはつきり言って性能はジャステイス以上だ」

「僕らをあのころのままだと思わないでください」

「それは此方もだ、此処まで差が開くとは、行け！」

すべてのドラグーンが迫ってくる。フリーダムにもうドラグーンは無い。はつきり言ってこのビームの雨をかくぐることは不可能だ。次第に被弾箇所が増えていく。右足、左翼、左肩、頭部、そして遂には両腕が撃ち抜かれる。

「これで終わりだよ、キラ君」ビームライフルがキラのいるコクピットに向けられる。

第六話 「CE76年めの世界へ」前編（後書き）

今回はちょっとやりたい事があって前後編にしました。

クルーゼやキラはもつとすごい戦闘をするのは十分承知の上です。

戦闘シーンの書き方にコツとかあったらどなたかアドバイスください。最初のほうどころか全部駄文でした。

リベンジプロヴィデンスの詳細は後ほど出します。

9月から少し更新できません。諸事情あってスイマセン。

10月からは更新再開します。

それでは後編も今月中には書きますのでよろしくお願いします。

第七話 「CE76年めの世界へ」後編（前書き）

前回に続きCEの世界です。

アスランの敵のガンダムに自信がありません。と言ってもこの小説自体面白い自身ありませんが。

とりあえず、今回はアスランの戦いと、いろいろ書いておきたいことです。

それでは第七話をどうぞ。

第七話 「CE76年めの世界へ」後編

一方此方はアスランのいる異次元では。

アスランの駆るインフィニットジャステイスの目の前にはガンダムがいる。ガンダムと呼ばれるモビルスーツの顔は特徴的だから、一目見ればガンダムタイプと分かる。

その機体はデュエルを思わせるような細身、軽武装である。後ろ腰に通常のライフル、背中には大型のライフルが見える。数秒間アスランはそのモビルスーツの動きを見ていたが、相手はジャステイスとの間合いを一気につめる。両手両足から伸びた、まるでイージスを思わせるビームサーベル。アスランはとっさに右手にサーベルを一本持ち、両足のグリフォン2と左手のビームシールドを発生させ、受け止める。アスランはオープンチャンネルで呼びかける。

「何故こんなことをする、どうして攻撃してくるんだ！」

その問いに帰ってきた声と言葉は、自分にとって忘れがたいものだった。

「何故こんなことをするかだと。分からんのか！敵がそこにいるのに、何故撃つと言うか。敵は、そうだ、ナチュラルを滅ぼさねばならんだ！！」

ただ、驚くだけだった。アムロが言っていたとおり、死んだはずの人間が生きている。そう、自らの目の前で息を引き取った自分の父、パトリック・ザラの声なのだから。

「なぜだ！あなたはすでに死んでいるはずだ。俺の目の前で、確かに」

CE71年、第二次ヤキン・ドゥーエ攻防戦で、部下の裏切りに会い、3発ほどの弾丸によって、死んだ、はずだったのだが、PMBプログラムによって復活した。今まで無かった高度なモビルスーツの操作能力を与えられて。

「死んでいたな、しかし、私は愚鈍なナチュラル共を滅ぼすまでは死なん。あの金髪の小娘に何を吹き込まれた！この恥さらしめが！」

パトリックのガンダムは「ZGMF-X-LLJ（オメガ・リトルジェネシス）ジェネシスガンダム」

ガンマ線を攻撃システムとして持つガンダムただしまだ試作段階。ジェネシスは両肩のミサイルを一斉にジャスティスに向け発射する。

「そんなもの！」アスランは近接防御バルカンとライフルで敵の攻撃を防ぐ。右手に持ったビームライフルを放つ。ジャスティスは飛行しながら難なくよけて、ライフルを撃ち返す。たとえ高度な技術があっても、使い手が悪ければ実力が発揮できない。

「父上は今でもナチュラルを滅ぼそうと言うのですか」「無論だ。それこそがやつとの契約。私が生きている理由だ！」

ジェネシスのサーベルがジャスティスのコクピットに近づいていく。ハルバートモードにしたサーベルをぶつけてはじく。すかさず距離をとり、スーパーフォルティスを発射する。だがそれはよけられ、ジェネシスはバックパックに有る、アムフォルタスを発射する。ジ

ヤステイスは避けるのが不可能と判断し、左手のビームシールドで防ぐ。

「ならば、刺し違えてでも、あなたは俺が討つ！」リフターを飛ばして不意を突き、ビームサーベルで斬ろうとするが、完全に見切られよけられる。「まだだ！まだ負けちゃいない！」サーベルを構えながら近づいていく。

数十分に及んだアスランVSパトリック・ザラ。アスランには、脂汗が染み出ている。父の驚異的な強さに唖然としている。だが二機はもう一度サーベルを構えると、敵に向けてサーベルを振りかかる。激闘のさなか、ジャステイスの右腕が虚空を舞う。リフターにサーベルを展開してとつげするも両断され、背中から大きな目のライフルを構えられる。

「このモビルスーツの名はジェネシスと言う、その理由はこのライフルだ」その理由は、このモビルスーツの腕は、本来のジェネシスのように反射、拡散することは無く、一点集中のガンマ線を弾丸として発射することに対応した機体である。

腕にガンマ線の通り道のようなパイプがあり、ライフルに装填されている、カートリッジのエネルギーとあわせることで、従来のビームライフルより、格段に高い破壊能力を秘めたモビルスーツである。

アスランは危険を感じ、ライフルを連射して距離をとる。だが、パトリックはすかさずガンマ線ブレードを抜く。ビームサーベルは右腕とともに消えているので、仕方なくシールドのビームブーメランで戦うこととなってしまった。ジェネシスの攻撃に当たればその部分から誘爆を引き起こしていく。直接あたれば終わりだろう。

一時は停滞した切りあいだったが、機体の損傷のあるジャスティスが少しずつ押され始めている。ジェネシスはブレードをしまい、ライフルでジャスティスの足を貫く。そこから来る爆発。その影響で左腕マニピレーターが動かない。そのライフルがコクピットに向けられた。「この馬鹿息子が、何故私たちの望みが分かんのだ」そう問われたがアスランは目をそらさない。

「分かりません、俺は二つの存在は共存できると信じています。だから、俺は戦います。止めて見せます！！」全身全霊をこめた思いをぶつけた。

「そうか、ならば！」ジェネシスの持つサーベルがジャスティスのコクピットに向けられる。

所変わってキラの居る次元。

「これで終わりだよ、キラ君」ビームライフルがキラのいるコクピットに向けられる。

ライフルからビームが出る寸前、キラの後ろにファンネルが出現す

る。アムロが次元の特性を解析してゲートを開き、キラの居る次元につなげやってきた。

「厄介な奴だよ、キラ君も、貴様も！」ビームが放たれるもNガンダムフィン・ファンネルバリアーによって防がれる。

「クルーゼ、貴様を生かしておくわけには行かない、おとなしく永遠の闇の中に寝ている！」アムロはファンネルを操作して、プロヴィデンスにビームが迫る。

「さすがに連戦はきついな。此処は引かせてもらおう」プロヴィデンスはビームをよけて、グレネードを爆発させる。

「クルーゼ、シャアに伝えておけ。世界は、決して滅びたりはしない。人の心に光があるのだから」

クルーゼは笑い、「気が向いたら伝えよう」そう言って消えていった。

アムロはキラとフリーダムを別次元に避難させ、アスランの元に向かった。

場所は戻ってアスランの居る次元。

ジェネシスはジャスティスのコクピットを貫こうと構える、だがNガンダムがジェネシスに向けライフルを放つ。ジェネシスは避ける為にジャスティスから遠ざかる。

「くっ！なかなか早いな。手負いとは言え奴は無傷、さすがに無理

だな、だが！」

ジェネシスはガンマ線ライフルを構える。「全カトリッジ装填、エネルギー最大出力開放モード。チャージまで1分」

アムロは危険を感じ「やらせるか、フィン・ファンネル！」

ファンネルが4機近づいていく。「あと40秒、よければいいだけの話だ」

左手にライフルを構えるとファンネルを迎撃していく。

「残り10秒・・・3,2,1・・・発射！！」ガンマ線ライフルから膨大な量のエネルギーが発射される。

その砲撃で飛ばしておいたファンネル4機が消滅、Nガンダムは残りの8機でジャステイスとともに別次元に避難する。

「くっ、にげられたか。此方も限界か、グレネードはもうないといっていたな。言うことはこれで最後か。しかたない」グレネードでゲートを開くとそこに入っていく。

アムロはキラとアスランをつれてもとの次元に帰ってきた。ストライクフリーダムもインフィニットジャステイスもかなりのダメージを追った。ジャステイスはガンマ線ライフルに影響で左半身が吹き飛びかけた。

アムロはキラとアスランに頼んでラクスとカガリにデータを渡した。

CRMプログラムやPMBプログラムに関する事も書かれている。さすがに他の次元に関わり過ぎる事は書いては居ない。

アムロはキラとアスランにもう一度会談した。

「おそらく数ヶ月したら奴らはまたこの次元を襲う。二人に質問だ。大切な人を守りたいか。それだけを教えてくれ。戦えば死ぬかも知れんのだからな」

キラは「当たり前ですよ、僕はラクスが居なければ何もできずに居ました。だから守り続けてきました。どんなときでも僕はラクスを守ります」

アスランは「俺も同じだ。カガリは俺には勿体無い位の人だ。でもだからこそ、命がけで守り通す。俺の覚悟はもうできている」

「そうか、何日かしたらもう一度来る、それまでに体調を整えておけ」そのとき、新しい剣を託す、だがまだ言わなくていいだろう。「当分の間敵は来ないが、用心しとけ、狙っているのは奴らだけじゃない。お前達の世界にも二人のことを狙う奴は居るだろう」

アムロはキラとアスランに別れを告げて、次の次元に行く準備をする。

CRMプログラムから来た情報が変わった。

狙われているのは西暦2317年、なのにアムロが行くよう指示さ

れたのは2364年、だがその時代に行けと言われたのならいくしかない。

疑問が残るがゲートを開く。

アムロが向かうのは2364年、刹那がELSとの対話を終え、外宇宙のたびから帰ってきた年。

ガンダムの存在が確認された最後の次元、旅はこれで最後となる。

「最後の次元か。戦いはまだ始まっていない。この次元のパイロットの存在が戦いの命運を分けるかもしれない」

Nガンダムはゲートに入っていった。

第七話 「CE76年めの世界へ」後編（後書き）

戦闘シーン下手すぎてスイマセン。パトリックは強化処理でも受けたと考えてください。

二機のガンダムの詳細はそのうち出します。

次回でアムロの世界めぐりは最後に世界となります。3、4話後にGジェネっぽくなります。

今回はようやくOOの世界、もっと戦闘シーンが書けるように頑張るのでお願いします。ジェネシスガンダムに搭載する武器案があったら感想に書いてください。このままだと軽装過ぎるのでお願いします。

第八話「西暦2364年めの世界へ」（前書き）

ようやく〇〇の世界にきました。半月でようやく11部目です。疲れた・・・。

余談はさておき自分は〇〇のカップリングは「刹フェル前提刹マリ肯定型」と言う恋愛は刹フェルだがりなさんは母という存在に近いと思っていますタイプです。

最終的には刹フェルです。今回出る機体は後に説明を載せます。相談した人がいますが、それと少し変えてあります。

それでは第八話をどうぞ。

第八話「西暦2364年めの世界へ」

刹那が地球に帰還して数日、マリナ・イスマイルの住居でしばらく暮らしていた、と言っても食事も睡眠もほとんど必要ない。

なので、人として暮らしていたかと言われると「はい」と言えない。

そんな時、刹那は唐突に話を切り出した。「マリナ、俺はソロソロ行くよ。帰りを待っていてくれる人がいる。今までありがとう」そういつて手をとる。

マリナは微笑みながら「あなたを待つ人、あの桃色の髪のフェルト・グレイスさんだったかしらね。あなたが旅立ったことや、どんなことをしてたかいろいろ聞いたわ。私がテロリストに襲われたときも、彼女たちが助けてくれた、悲しませたりしちゃだめよ」

刹那は分かっていると返し、クアンタとともに飛び立った。「これでいいのかしら、残酷すぎる気がするわ、本当に伝えなくて良かったのフェルトさん、あなたが」

刹那はフェルトの所在を調べるため、ヴェーダに向かっている。ELS戦役後秘密裏に軍上層部にいるソレスタルビーイングより秘密裏に譲渡されている。

だから簡単に進入できる。と、ティエリアから教えられていた。

その膨大な情報の中には個人一人ひとりのデータも詰まっている。たどり着いた刹那は早速調べた。今どこにいるのか、何をしているのか、知れたかった。

だが、検索の結果、返ってきた答えは信じがたかった。ソレスタル
ビーイング所属フェルト・グレイス2293年誕生ー2363年没、
つまりすでに死んでいる。

受け止め切れなかった。彼女が死んでいると言う現実を、真実を、
涙が止まらなかった。

墓標はベーダ内にあると知った、そこに今向かっている。

そこにあつた。紛れも無いフェルト・グレイスと書かれた墓標が。

膝をつき嘆くことしか出来なかった。対話の日、フェルトのおかげ
で目覚めた、なのに今まで受けてきた恩すべて返すことも無く、何
より彼女に気持ちに答える事も出来ず、死なせてしまった。

その時、後ろから誰かが近づく。誰だと警戒しながら聞いた。

「安心してください、僕はセルゲイ・ハプティズム、アレルヤ・ハ
プティズムとマリー・ハプティズムの息子です。フェルト・グレイ
スさんの最後の言葉を伝えにきました」

セルゲイと名乗る昔のアレルヤの面影のある少年はそう告げた。

「フェルトさんは最後まであなたを待っていました。一人の女性と

しての幸せすべてを投げ捨てて、刹那・F・セイエイ、あなたを待ちました。フェルトさんはイノベーターになることが出来ず、年を重ねるごとに老いて、去年、丁度一年前の今日、亡くなりました。そして死の間際、あなたに最後の言葉を残しました「取り出した携帯端末にその映像が記録されていた。」

「みんな、刹那にこのことは伝えなくて、心配させたくないから。それと、刹那が帰ってきたら、伝えて。刹那・・・ごめんね、あなたに・・・お帰りつて・・・言つてあげられなくて・・・ごめんね」
言い終わつたとき事切れた。

その映像を見たとき刹那の中に何かが生まれた。悲しみか、怒りか、憎しみか、何か分からないが負の感情だった。

ともに後悔が全身を襲った。他人の死で此処まで後悔したのは、二ールのとき以来、いやそれ以上の後悔だった。

「伝えることは伝えました。これからどう生きるか、それはあなた次第です」セルゲイはヴェーダを去つていった。

しばらく何も考えれずただ座っていた。この後悔が何なのか自分でも分からなかった。これがライルの言っていた、「愛」というものなのか。

何故こんなにも苦しいのか分からなかった。

ふと墓標を見た。その時目を疑った。先ほどとは違う驚き。墓標に書かれていたのは、

フェルト・グレイス 2293年誕生―2317年没

意味が分からなかった。確かに最初に見たときは2363年没だったはずだ。それが変わっている。

過去が代わったとでも言うのか、ありえない。世界にそんなことありえないと思っていたことも現実では起こりうる。だが、今回だけはありえない。過去とは絶対不変のものだから。

なのに変わった。

思考が混乱してきた。フェルトが死んでいて、死亡した年が変わった。体の中のELSたちも、わけが分からないとでも言うかのように叫んでいる。

そんな風に混乱していたときモビルスーツハンガーに巨大なエネルギーを観測した。

刹那は急いでハンガーに向かった。そこにはなぞの空間から出てきた「ガンダム」と呼ぶに相応しいモビルスーツが出てきた。

Nガンダム、アムロ・レイはこの次元に到着した。コクピットを開け、周囲を確認する。目に一人の青年（？）が写った。

「君の名前は何か、と言う前に自分から名乗るべきか、俺はアムロ・レイある人物を探しに来た」

刹那は一瞬警戒した。しかし、彼からいやな気配は感じない。そこで正直に答えることにした。

「刹那・F・セイエイだ」アムロはほっとした。

「良かった、探している人物がこんなに早く見つかるとは」

「俺を、探していたのか？」

アムロは頷きながら「そのとおりだ、ガンダムに乗る者、俺たちの探している人間だ」

「探す理由はなんだ」

「理由は・・・全次元と時間を救うためだ」

ぶっ飛んだ話だ、そういう考えが生まれたが、次の一言でその考えは180度変わった。

「フェルト・グレイスの死亡した年が変わった理由を知りたいか。そしてフェルト・グレイスを救う気は無いか？」

つまりその男は過去に何があったか知っていて、救うということは過去に行くと言う意味に他ならない。

結果今日の前にいる男は、時間を変える、もしくは戻すことが出来ると言うことになる。

「君のその心に空いた隙間の正体に君は気づいている筈だ。フェルト・グレイスに対するその思いが何なのかを」

「本当に、フェルトを救うことが出来るんだな。それにこの思いが

何なのか分かるのか」

アムロは頷いた。

そしてこれまで自分が何をしてきたのか、それをすべて話した。

「じゃあ、2317年にそいつらのせいで」

「そういうことだ、そこで君に50年前、正確には47年前に戻ってもらおう。そこでフェルト・グレイスを救出できたとき、俺とともに戦ってもらおう。」

「そんな条件じゃなくても俺は戦う。俺がそいつらを戦争幫助の対象とみなし、対話を、分かり合う気が無ければ、駆逐する」

その目には決意が見えた。

これが刹那の強さだと確信した。

「しかしどうやって過去へ行く」

「そのためには君のクアンタが必要だ、少し改造させてもらおう」

二人はハンガーに向かいアムロはNガンダムの力でクアンタを別次元にワープさせた。

Nガンダムの力を使えばアムロは47年前にいけるが、ジェネレーションシステムの力を与えられていない刹那は、Nガンダムの力で時間移動と次元移動までは出来ない。

が、同じ次元内のワープくらいなら出来る。

数時間の後、アムロは新たなガンダムとともに帰還した。

ガンダムを超えたガンダム、いやそれをさらに超えた存在とともに。

その名を「GNQ-0000V2 クアンタライザー」

次元も時間も越える存在。クアトロドライブシステムによる従来のモビルスーツでなせない圧倒的な機動力と攻撃力、そして何より対話のための力を持つ最強の存在。

アムロは機体の説明の最後にこう言った。

「気をつける、クアンタライザーは二回しか時間移動が出来ない。それに不完全な時間移動だから刹那、君自身の時間も戻る。経験や記憶は残るが、成長や寿命が戻る、ELSと融合したのは対話終了の時点だからELSが消えることは無いだろう。クアンタライザーの粒子を浴びると、イノベーターとしての覚醒が促進される可能性がある。一応気をつけておけ。それでは行くぞ」

Nガンダムはゲートを開いた、クアンタライザーはソードビット18機を使って、6機ずつのゲートを3個作る。

アムロが「先に行っている」と言って先に行ってしまった。

刹那は操縦桿を握り締め、

「クアンタライザー、頼む、俺に力を貸してくれ。ディメンジョン

バースト!!」

クアンタライザーがトランザム3を発動して3つのゲートを抜けていく。

「フェルト、俺はまだただいまを言っていない・・」

ガンダムを超越した存在が過去へと進んでいく。

第八話「西暦2364年めの世界へ」（後書き）

クアンタチート宣言します。と言いたいですが、この一機だけ強くなってしまうので、能力をかなり制限します。欠陥があるという設定ですので多分自分的に問題ありません。前の話の機体も含めクアンタライザーの説明を次ぎ出します。

感想、アドバイスください。お願いします。

機体説明×3（前書き）

中途半端なところですが機体説明しときます。駄作者の考える機体ですのいろいろな人にアドバイスもらって直したり訂正したりしました。できました。

評価をお願いします。

機体説明×3

機体名 「GNQ-0000V2クアンタライザー」

ダブルオーライザーとダブルオークアンタを掛け合わせたような機体。外見上はクアンタに似ている。

動力 GNDライブ*4 GNフィールドドライブシステム

射撃武装 肩部シールド搭載ビームガン*1 GNソード?ライフルモード*2 腕部内臓ビームガン*1

格闘武装 GNソード?ソードモード*2 後側腰部GNビームサーベル*2

特殊武装 GNソードビット*18 A・B・C格6機ずつ 両肩部GNシールド 背部GNシールド

GNソード? GNソード?の発展型でGNソード?の様に単体でビームサーベルを発生できるようになり、ソードモードでも、ソードビットの連結によってライザーソードを発生できる。

クアトロドライブシステム ダブルオーライザーのように両肩に2つ背中に2個連結したドライブを搭載、膨大な粒子量のため、連続して最大出力のライザーソードを使用することもできる。

両肩のシールドと背中のシールドはソードビットをマウントしている。

背中には、クアンタムバースト時のようにシールドがひとつ付いている。

両横側腰にGNソード?を1ずつマウントできる。

常に機体全体にGNフィールドを張り、ターンエーのようなエフィールドドライブシステムと同じで、GNフィールドの操作で機体を動かしている。そのため、機体内に駆動システムが存在せず、機体内に大量のGN粒子を貯蔵できて、オーバーロードすることがない。

トランザム1 上記の通り常にトランザム状態と同じ出力を長時間持続可能、

トランザム2 ダブルドライブのトランザムと同じ出力1時間の継続可能、

トランザム3 ツインドライブ完全同調時のトランザム並み30分間程度持続可能、

トランザム4 ツインドライブ完全同調時のトランザムの1.5倍の出力ドライブ3つの完全同調時の粒子放出量と同じ。15分ほど持続可能。

トランザム5 クアトロドライブ最大の放出量で5分持続、ツインドライブ完全同調時の4倍、ライザーソードを2本同時に展開できる。

クアンタムスマッシャー クアンタムバースト以上の超高濃度粒子を機体全体にまといて敵に突撃する。高速移動をかねているので、最大化即時もこの状態になる。トランザム4以上で使用可能。

デイメンジョンバースト 機体にGN粒子をまとい、ソードビットでできたゲートをくぐることで時間移動ができる。ただしシステムが未完成で搭乗者自身の時間も戻ってしまう。プログラムが完成すれば、確定されない限り何度でも使用可能。未完成の場合二回まで可能。トランザム3以上で使用可能。

通常のクアंटムバースト以上の広域（太陽系一つ並）の高濃度粒子領域を作り出せる。トランザム5以上で使用可能。

複座敷コクピット、背中にオーライザーのような粒子制御をするサブパイロットがスペック上必要。

ヴェーダの存在しない次元で戦うためヴェーダとリンク出来ずサブパイロットが必要となる。

機体名 「ZGMF-X666SRリベンジプロヴィデンスガンダム」

動力 ハイパーデュートリオンエンジン Nジャマーキャンセラー

射撃武装 レジェンド装備型ビームライフル改 腕部ビームマシンガン*2 胸部近接防御バルカン

格闘武装 両脚部収納ディファイアント改ビームジャベリン*2

特殊武装 ビームスパイク付きドラグーン*4 通常型ドラグーン

*20

ビームスパイク付き特殊型ドラグーン*1

両手甲部分ソリドウス・フルゴールビームシールド発生装置

ビームスパイク付きドラグーン（以下Bドラグーン）はレジェンドと同様にバックパックに2つ、両腕部ビームマシンガンに接続。特殊型はビームライフル状のグリップがありビームライフルとして使用でき、グリップの持ち替えてビームランスとなる。

通常型はバックパックに6機、腰部に二重に重なるように前部以外の箇所に4機ずつ、両肩部に一機ずつ。

機体名 「ZGMF - LJ」ジェネシスガンダム」

動力 ハイパーデュートリオンエンジン Nジャマーキャンセラー

射撃武装 高エネルギービームライフル*1 ガンマ線ライフル「リトルジェネシス」*1

肩部8連装ミサイルランチャー*2

格闘武装 腕部ビームソード*2 脚部ビームソード*2 ガンマ線ブレード*1

ガンマ線ライフル「リトルジェネシス」 ジェネシスのようにガンマ線を照射するライフル。腕部に直接連結し、カートリッジ式になっているため機体からのエネルギー供給が少なく冷却装置が機能していればかなりの量の砲撃ができる。カートリッジをいくつか同時消費することで単発より強力な砲撃と範囲を得れる。その際エネルギー集中のため発射までにタイムラグが有る。

ガンマ線ブレード 手術に使うガンマナイフのように内部にダメージを与えられる武器直接触れれば敵は内部から崩壊していく。ただしビームサーベルとの鍔迫り合いなどではない。

未完成のため二機とも装備の一部が完成してなくて初陣した。

機体説明×3（後書き）

今回は三機のガンダムを説明しました。ジェネシスガンダムにはもう1つ装備をつける予定です。ネタばれはしないほうがいいよな、と思い書きませんでした。クアンタライザーの完成は小説家の「エクストリーム使い」様のおかげで作ることができました。本当にありがとうございます。

次回で〇〇の世界も最後！！（多分・・・）

呼んでいただいている皆さんに1つ頼みごとがあります。

オリジナル機を1機感想にでも書いてくれませんか。本編に味方増援パイロット付き、また敵の幹部機（パイロットはMDになります）で登場させたいと思いますので気が向いたらいいですからお願いします。現存する主人公以外のパイロットの機体としても出せます。感想等お待ちしております。

第九話「2317年めの世界へ」（前書き）

刹那が過去に戻ってきました。やりたいこととは刹那が過去に戻ってこれて、何らかの形で一人の人間としての幸せを与えた方のです。映画でやりきった顔してましたが、自分のための幸せがないじゃないか、と言うことでこうしました。

刹フェルに限らず恋愛表現がかけません。ご了承ください。

それでは第九話をどうぞ。

第九話「2317年めの世界へ」

アムロと刹那はそれぞれのガンダムの力で2317年へと向かっている。

アムロが言ったフェルトを助ける方法が本当に時間を戻すこととは思わなかった。

それに、刹那の中に蠢くこの感情、胸の高鳴りは何なのか、その答えがこの先にある。

ゲートを進んでいくと不思議な感覚がしてきた。体に何かが入り込んでくるような感覚。

「それは今、君の寿命が戻ってきている証拠だ。すまない未来に戻ることが出来ないのにこんなことをさせてしまった」

そう、実は未来に戻れない、話の過程で分かっていたが外宇宙の旅をした事実が消えるのは残念だった。

「かまわない。それに、俺のなすべきことが此方の時間にあるのなら、それは仕方が無い。それに・・・」刹那は言葉に詰まる。言い表せられない感覚がするからだ。

数分次元の狭間を飛んでいると「刹那、もうすぐ着くぞ、身構えておけもしかしたら言っですぐ戦闘かもしれ」「あれは何だ?」「どうした?」

二人が見つめる先にはゲートの出口。だが奇妙なことが起きている。

ゲートの出口に向こうの世界の映像が写っている。

そこに写るのはCICとそれに襲われるソレスタルビーイングメンバー。

「みんな！ー！トランザム3！ー！」刹那はトランザムを発動して突っ込んでいく。

少し時間は戻り一週間前。

此処はヴェーダ内のブリーフリングルームのような場所。そこである情報がスメラギからメンバーに伝えられる。

『マリナ・イス・マイルが狙われている？』メンバーはスメラギの言葉に声をそろえて聞き返す。

「ええ、ヴェーダにいるリジエネ君からの確定情報よ」いまヴェーダはリジエネが管理している。だから情報もリジエネが送る。

それはさておき、いまマリナは人類とイノベーターとELSの共存政策のトップと言って良い立ち居地にいる。

中東復興の立役者として、ELS戦役後の暴動やテロなどによる経済の疲弊した国々への、指導する立場になった。

彼女のカリスマ性が経済回復の政策に使える、と考えた国連の議員たちによって抜擢された。

それに加えての人類、イノベイター、E.L.Sの共存政策（三種共存政策）を国連大統領と話し合い共存賛成派のトップとなった。

だが、反対派からしてみれば目の上のタンコブ、邪魔な存在であった。だからテロに巻き込んで大統領ごと殺害してしまおうという、考えを持つものは少なくは無い。

ソレスタルビーイングはもちろん賛成派の議員や大統領を守るつもりだった。

「刹那が変えた世界だ、俺たちが守るんだ」ライルは決意をともにした瞳をしている。皆それに答えるように頷いた。

大統領とマリナは一週間後ワシントンで公演を開くことになっている。記者や一般市民も集まる集会のような状態で、予定ではワシントンの全市民が来ても大丈夫なように、600万人が集まれる野外公演となる。

テロリストとしてはこれほど願ったりかなったりな状況は無い。

「今回はMSを使うには敵が小さいから、今回はしょうがないけど肉弾戦ということになるわ。さすがに大統領の目前をガンダムで跳ぶわけにはいかないし」

だがC.Bにまともに動けるガンダムどころかその名を持つ機体は一機もない。

だからといって諦めない、メンバーが算出されることになった。

一週間後。大統領野外公演予定地。

付近にビルは少なく、2・3棟しかない。此処にライルを配置。上からの監視をする。アレルヤとラッセがSPとして潜入し状況に応じて動く。フェルトとマリーは記者に扮し、いつでも飛び出せるように身構えている。

スメラギは上空リポーターのへりに扮したCB製へりにミレイナとイアンとともに乗り込み、監視の目を強めている。このへりにはさらに二人乗っている。

沙慈・クロスロードとルイス・クロスロードの二人。この二人はELS戦役の中、刹那のクアンタムバーストを受け、イノベイターへと完全な覚醒を果たしている。

この二人は少し特殊だ。

人の声を聞き取るのに長けており、戦場の声を聞き分けれる。常にはないが心の声を感じやすいのだ。600万人の人間からテロリストのみを割り出すのは普通無理だ。

しかしこの二人の力を使えば、殺意を抱いた人間のみを探せる。

けれど、脳量子波の扱いに慣れない二人には重荷だったが、それでも二人は世界のために何かしたいという思いから奮闘した。600万人の中からずいぶん絞れた。後は動いた瞬間が勝負。

そしてテロリストが数人動いたとき、フェルトはマリナを、マリーは大統領を守り、アレルヤとラッセはテロリストを抑えて、ライル

は他のテロリストを撃ち倒した。もちろん殺していない。

わずか数十秒に満たない時間のミッションだった。

そして後、公演が中止されCBメンバーはばれないように散っていた。

マリナと大統領は、SPや隠れているCBバックアップメンバーに守られ帰路に着いた。

スメラギたちはクロスロード夫妻を連れて行き、残りメンバーはライルが運転する車で旧カタロン基地に向かった。いまはこう言った所が地上活動の拠点となっている。

唐突にフェルトが口を開いた。「ちゃんと守れたね、変わり行く世界を」

相槌を打つようにラッセもしゃべる。「だがまだテロは行われるだろう、三種共存政策の賛成派4・5、反対派は3・5、人類共存賛成E・L・S共存反対派が2、賛成派が過半数を取れなくちゃ結局世界は統一されない」

「でも此処まで進むのがたった3年ですんだから、人類は進歩していると僕は思うよ」アレルヤは世界が1つに地被っているのがうれしそうだった。

フェルトは少し浮かない顔をしているが「刹那が切り開いた未来、いつ刹那が帰ってくるか分からないけど、少しでも良くなったって言ってもらいたいね」

ライルがからかう様な声で「そうだな、それまでによりいい女にならなきゃな」

フェルトが顔を赤らめながらそっぽを向いた。

そんな時、フェルトの目に写った物があった。黒い歪み。

「なに・・・あれ？」全員がそれに気づいた。

それが円形になり何かが出てくる。

そう、今までいくつもの次元を攻撃してきたCTCだった。

今回は珍しくCTCは1匹で、紛れもなくフェルトたちの車に突っ込んでいく。

「ラッセ！運転代われ、あいつを狙い撃つ」ライルはラッセと運転を代わり、イスの下に隠しておいた対戦車ライフルを組み立てる。

対戦車ライフルの組み立て、弾込めが終わりCTCに向け引き金を引く。

盛大な音とともに弾丸が命中するが、モビルスーツのビームライフルの直撃ですら致命傷にならないCTCには効かない。

「だめだこりゃ、逃げるしかねえ」荒野を走るがさすがにCTCから逃げ切れず車のタイヤを噛み切られる。

全員が別々の方向に逃げ少しでも逃げるチャンスを増やそうとしたが、CTCは狙う人間を吟味するかのように数十秒間とどまり、狙

いを定めた蛇のように一直線にフェルトに向かう。

ライルは「ちくしょあ！この化け物があ」CTCに対して攻撃するが焼け石に水、此方に注意を引かせることも出来ない。

ここが荒野であり走るのに適しているとは言えない。

マイスターの少なくなったCBはマイスターのスカウトをしたかったが、なにぶん時間と資金の余裕がない。

だからフェルトはモビルスーツの訓練を受け、後方支援の機体に乗る戦うことを志願した。ライルには混戦での戦闘能力がそれなりに高いため、後方支援をフェルトの機体に任せ、アレルヤとともに敵陣へ突入と言う作戦が取れるようになった。

ただ、あまり皆フェルトには戦わせなくなかった。訓練ではかなりの好成績が出ているが実戦ではそうは行かない。だからだ。

まあ、そのお陰があつて結構な体力がついているので足は速い。しかしCTCから生身で逃げ切れるわけがない。

CTCがもう50メートルないところまで迫っていた。

CTCはその口を開きフェルトを捕らえようとする。

「刹那・・・助けて・・・」涙を浮かべながら愛するものの名前を呼ぶ。

そんな彼女の目の前にまたしても歪みが生じる。だが今度は薄い緑色の粒子、まるでGN粒子のような色をした歪みが生じる。

その歪みから出てきた機体があった。

その名は、「GNQ-0000V2クアンタライザー」

クアンタライザーはデイモンジョンバーストで飛び出てくると、右手のGNソード？をライフルモードにしてCTCに向けチャージしたビームを放つ。

CTCが再生に手間取り動けないときに左手のライフルモードのGNソード？に左肩のソードビットを連結させ、バスターライフルの形にする。

「トランザム2、ライザーシュート」バスターライフルにチャージされた、セラヴィーのハイパーバースト並みの高濃度圧縮粒子が、ライザーソードのような形を作りながらゲートを討ち抜く。

ゲートを破壊したがクアンタライザーの周りに3箇所ゲートが生じる。

「まだいたか、トランザム4、行けっソードビット」ゲートから出てきた大量のCTCがフェルトたちを狙うが、さらに上空に出現したNガンダムによって防がれる。

「クアンタムスマッシャー発動、目標を駆逐する！」

CTCはクアンタムスマッシャーに触れるだけで吹き飛び、1箇所目はGNソード？ビームソードモードに切り裂かれる二箇所目は量子化による高速移動で接近し、バスターライフルモードの砲撃でゲートが崩壊、一番CTCの数が多かったゲートにはライザーソード

を叩き込んで消滅させた。

この数分間の出来事に目を疑った。

いきなり出現したガンダムによってなぞの敵が消滅させられていく。その動きは紛れもないフェルトが待ち続けると誓った者に違いない。舞い降りた機体からパイロットが顔を出して降りてくる。

そのヘルメットを取った時、全員の頭に蘇る3年前の記憶、大切な仲間の顔がそこにある。

フェルトは無我夢中で駆け出していた。

二度と出会えないものと思っていた人に、この世界でもっとも大切な人に出会えた。気づけばその胸に飛び込んでいた。

フェルトは涙を流していた。「どうして3年間も帰ってこなかったのよ、もう少し遅かったら・・・わたし・・・」泣きじゃくりながらも言葉をつむいでいく。

「フェルト、すまなかった。さびしい思いをさせた・・・だがまず言わせてくれ」

その言葉は、フェルトがその言葉が来るのを一緒に待ち続けると言っていた言葉。

「フェルト、ただいま」フェルトは涙をぬぐい、「お帰り、刹那」フェルトはもう一度刹那を精一杯抱きしめた。

数時間後、旧カタロン支部でスメラギたちと合流して、刹那の帰還について話した。

その席で刹那はアムロのことを話し、アムロは今なにが起きているのかを話した。

全員が今日の出来事で納得した、と言うより納得しなければ何もかも説明できない。

「俺はもう少ししたら全次元のガンダムパイロットに呼びかける。PMBプログラムを倒さなければことはすまないのだから。そこでCBにも協力してほしい、機体は此方で用意する。では準備があるのでこれで失礼する」

刹那に連絡用端末を渡しておいた。

アムロはNガンダムに乗りCRMIPプログラムの元に向かった。

「これで戦いの準備が整った。後は機体だけだが、試験機部隊はうまくやっているだろうか」

アムロはこれから幾多の次元のガンダムパイロットが乗るガンダムが、どれほどの強さなのかまだ具体的には知らない。

「シャア、人間の心の光はお前たちには負けない。あのパイロットたち全員がそれを証明しているのだから」

アムロの目には今まで誰も見たことがないような、熱い思いを感じ

させる何かをともしていた。

第九話「2317年めの世界へ」（後書き）

本文中でどのタイミングで書けばいいのか分からずここで補正します。

ティエリアも47年間をさかのぼり現在はクアンタライザーの中でスリープ状態にあります。ティエリアもちゃんと活躍（？）はさせますのでよろしく願います。

これから機体開発過程の番外編に入ります。出てくるのはオリキアラです。

家の事情ゆえ九月八日以降は更新できません。なので中途半端に途切れることをお許しください。

感想、アドバイス、よろしく願います。オリジナル機体、オリキアラは10月から書く番外編と本編両方登場するので、いつたいでも多くの書き込み願います。

番外編(?) 機体、パイロット説明その1(前書き)

ただいま帰ってまいりました。

いきなりですが番外編(?)をはじめたいと思います。番外編と言えるのかな、と思い、?付です。

まずは登場する機体から出して機体と思います。

事前に知っている方もいますが大きく変えた点があるので見てください。

それでは番外編(?) 説明ですがどうぞ。

番外編(?) 機体、パイロット説明その1

「ジェネレーションガンダムザ・ワン」GNドライブ、ハイパーデュートリオンエンジン、GNフィールドドライブシステム、エフィールドドライブシステム、月光蝶、強化武装運用試験機。

外見 ダブルオーガンダムにストライクフリーダムのバックパックとレールガンをつけ、左腕にクアンタのシールドをGNドライブは内蔵しないで装着、オプションとして新型のフォトムウに乗っている。

格闘武装 腰部レールガン装着ノイシュペールラケルタビームサーベル(ノイはドイツ語で新)*1 GNビームサーベル*1 脚部グリフォン3ビームサーベル*2 GNソード?*1

射撃武装 高エネルギービームライフル改*1 ナノマシン対応試験用ビームライフル*1 カリドウス2複相ビーム砲*1 クスフィアス4レールガン*2 盾部ビームガン*1

特殊武装 ハイパードラグーン*10 フォトムウ02*1 GNソードビット*6

ノイシュペールラケルタビームサーベル シュペールラケルタビームサーベルより柄が若干長く、両側からビームサーベルを出せる。

グリフォン3 グリフォン初期型と同じ様に、足の先端のクローからビームを出現でき、出力が向上しており、先端部を開くことでビームガンとしても使用できる。

GNソード？ 最終決戦時ビームライフルを排除してこの武装を装備した。

高エネルギービームライフル改 ストライクフリーダムのビームライフルの改造型で、連結することができない代わりに、サヴァーニヤのライフルビットのように使える。

ナノマシン対応試験用ビームライフル カートリッジ式のビームライフルで、本来はビームコーティングされた月光蝶のナノマシンを、ライフルにビームエネルギーとともに流し、敵に致命傷を与えずとも名のマシンの分解能力で攻撃できるように想定されている。

カリドウス2複相ビーム砲 拡散性を持ち、多数の敵に攻撃できる。

クスファイアス4レールガン 電磁レールガンとビームキャノンの任意の変更が可能でAMBACユニットの能力も持っている。2本のライフルを腰にマウントするとき、レール砲は後部にスライドするため、使用できない。

ハイパードラグリーン 両翼が一枚増えたため2機搭載数が増えている。ドラグリーンそのものにも、ヴォワチュール・リュミエールシステムの発生装置が付いたため射出しなくても使用できる。ビームシールドの展開能力がプラスされ、防御力が上昇した。

フォトムウ02 出撃時同時に射出され、サブファイとシステムとして使われている。武装は01などと同じくハイパーフォルティスが2門装備され、機体上部にビームシールド展開装置が取り付けられ、非常時の盾として使える。なお、このため折りたたみ式の機首はなくなり、敵機への突撃時はフォルティスの間からビームソードが展開される。

擬似型ブロッサムシステム　パイロットの脳波を計測し、一定の水
準になったらそのパイロットの状態に合わせたOSに変更し、一部
の武装を脳波によるコントロールに変更できる。擬似型のため任意
発動、変更する必要がある。

試験型Gnフィールドドライブシステム　ツインドライブのためク
アンタライザーよりすばやい動きができない。全てこのシステムで
動いているわけではない。フィールドドライブシステムも同じく。
擬似月光蝶　少量だがナノマシンを機体に積んでいるため、半径3
0メートルくらいに月光蝶を展開できる。機体再生や物質の崩壊減
少などを起こすほどではない。ナノマシンの運用試験目的。

パイロット「御ノ方^{おのがたけい} 慶一^{いち}」 16歳　高校2年生　剣道部

小学生のとき事故に合い、異次元透視能力に目覚める。

異次元透視能力とは支流の出来事を幻覚や夢に見ることができ
る能力であり、一種の未来予知能力である。またこのような能力を持
つため特異点とされジェネレーションシステムに監視されていた。そ
してこの能力があつたからジェネレーションシステムは干渉するこ
とができた。

両親は飛行機事故で他界しており、祖母と二人暮らし。両親の遺産
はかなり多くそれを勝てに暮らしている。生きることへの執着心が
強く、何より命を大事にする。人を守る力に憧れ剣道を始めた。

修学旅行に向かうバスで、世界的同時超多発テロに合い死亡しかけ

るが、ジェネレーションシステムによって次元の狭間にワープさせられ、生還と引き換えに戦うと言う条件を出され承諾する。ジェネレーションシステムのバックアップと身体強化シミュレーションによって、カミィユたちニュータイプ並みの反応速度と操縦技術を持つ。

外見は背は175くらいで筋肉質の体顔立ちはよいが性格上もてる事はない。あまり笑わず、と言うか笑ったところを見ている人はほとんど居ない。話す人も少ない。話すのは小学校の幼馴染で同じ高校に通っている友人2人くらい。学校の成績は上の中くらい。喧嘩は鍛えていて不良嫌いでよく叩きのめしていたため非常に強い。

番外編(?) 機体、パイロット説明その1(後書き)

今回出すオリジナルパイロットその1です。

これから番外編を書いていく中でもう数人出てきます。Gジェネっぽくなるのはまだ先になりました。

若干寝たばれになりましたがご了承ください。

これから頑張りますので感想、最終決戦の増援としてのオリキャラ、機体まだまだ募集しますので投稿よろしくお願いいたします。

番外編(?) 第一話「プロジェクトジェネレーション」(前書き)

今回から番外編に本格的に入りたいと思います。オリキャラや機体を送っていただいた方に連絡です。

この番外編ではまだ出すことはできません。もうしばらくお待ちください。

少しCRMプログラムが語っているような文にしてみたいと思います。

それでは番外編(?) 第一話をどうぞ。

番外編(?) 第一話「プロジェクトジェネレーション」

アムロが宇宙世紀の世界に飛び立った日、ジェネレーションシステムのプログラム、つまり私、CRM Iプログラムはあるプロジェクトを開始した。

「プロジェクトジェネレーション」

PMBプログラムに対抗すべく発動したプロジェクト、いずれ行われる全面戦争に勝利すべく、ガンダムに乗る者たちへの機体の、新型武装及び新システムの稼動実験が想定されており、実験終了後は、全面戦争に突入するまでは、凍結し保管するつもりだ。

そして、一号機が完成した。それはアムロが飛び立って2日たったのこと。予定どおりだ。

少し余談だが、何故そんなに日にちが経っているかというと、時間跳躍にまったくゼロ時間でいけるわけではない。現にアムロは何度も次元の狭間で調べ物をしたり休みを取っている。想定では、帰還には早くて1ヶ月はかかる予定だ。

話を戻そう。

それまでに全3機を完成して性能実験をしなければならない。

一号機の名は「ジェネレーションガンダムザ・ワン」

私はそのパイロットとなる次元遭難者を探していた。

次元遭難者とはほぼ読んで字のごとく、異次元に遭難してしまったかわいそうな人だ。殆どのケースが、転生させてあげたり元の次元に戻してあげたりなどだ。時たま転生の要求が無茶な輩も居るが。

それとも時たま特異点と呼ばれる、特殊な能力を持った人間がジエネレーションシステムによってこの次元にやつてくる。だがやつてくるのは死に面したとき、そう都合よくいかない。私はそちらはあきらめていた。

ちなみにその者たちも転生させることもできる。世界のバランスを保つのに良く行われる。強すぎる力を持つ者が次元移動をしてしまったりしたら大変なのだから。

遭難者は物理的なものを、特異店の者は元の世界に返すと言う条件なら協力するかもしれない。そう考えたのだ。

だが次元遭難者も特異点もまれなので、なかなか見つからない。

そんな時ジエネレーションシステムは数人の少年少女をこの次元に転移させた。これは幸運だと思った。時代はPMBプログラムの行いを認めていないと確信できたのだから。

そのうちの一人を私は見つけた。

年齢は16歳前後だろう、先ほどの条件で協力するだろうか。

それ以前に普通こんな子供にさせるなんて馬鹿のすることだと思うだろう。私も思う。子供を戦争に巻き込むことになる。だがいずれこの子の世界もPMBにより攻撃される。

私には人体の身体強化シミュレーションがあり、それを使えばガンダムパイロットに遅れをとらないパイロットにすることができる。

問題は彼らが承諾するかどうかだ。転移された特異点でない限り、拒否すれば規定どおり転生が生還のどちらかになる。

だが彼らは特異点、悩んでも始まらないので、とにかく私はイノベイドのような肉体に入り特異点の人間に会おうと思った。

その中の一人の少年は「うううう……。何が起こったんだよ、急に周りのビルが爆発して……。此処……。どこだ」

私はなるべくやさしい口調で「君が特異点の子？」

少年は驚き後からした声に振り向いた。「と・特異点？何言って・・・つーか此処どこだよ！俺修学旅行で中国居たはずだぞ。何でこんな宇宙みたいなところに・・・」

あわてるのは当たり前だろう。私達が居るのは周りには転々とした光の有るただっ広い空間。

「此処は次元の狭間よ。そして君はすでに死んでいるの。信じられないなら、自分の心臓の鼓動を聞いてみなさい。」

少年は恐る恐る心臓の有る胸にてをおいた。「……。鼓動がない・・・死んでるのか、おれ？」

「安心して、正確には死ぬ一歩手前、条件さえ飲んでくれれば助けても良いよ」

少年はかなり疑ったような目で此方をにらんでいるが一樣真実、希望を見せたがおそらく一気に絶望に変わるだろう。我ながら非道だと思う。

私は機体の格納庫に行き、「まずは自己紹介だ、私はCRMIPプログラム、簡単にCRとでも読んでね」

少年はかなり戸惑いながらも「お・俺は御ノ方 おのがたけいち 慶一だ」

私は次元の存在と、私の存在、そしてこの子にこれからしてもらいたいことを話した。この内容が希望を絶望に変えるものだったのは言うまでもないだろう。助ける代わりに命を懸けて戦えなんていうほうが辛い。

「なるほどね・・・まさかほんとにガンダムがあるなんて。俺は好きだぞ、ガンダム」

どうやら慶一君の世界にはガンダムはアニメとして存在しているらしい。実を言うと慶一君はロボットが大好きで、ガンダム以外にマジガーやガオイガーなども好きらしい。ただキャラクターに興味はない。完璧なまでに機械一直線なのである。この世界の人間からしてみれば変わっているらしい。

余談はさておき慶一君はこの条件を承諾してくれた。生き返る、転生、どちらにするかまだ決めていないが協力することは了承してくれたのだ。はつきり言って予想外なのは確か。

「さてCR、俺の機体は何だ?」「あせらないで、すぐに見せるから」

格納庫で「な・何だこれ？ダブルオーにストライクフリーダムのウイング、それにクアンタのシールド、まさかこれ」

「ええ、そうよ、新型装備特殊プログラム試験運用機よ」

慶一の目の前にあるジェネレーションガンダムは、先ほど言ったの通り試験機であり、プロトタイプと言えるだろう。

だが性能は高い、実戦でも十分戦える機体であるのは保障する。

「とりあえず機体に乗る前に訓練を受けてもらうわ。身体強化シュミレーションよ。うまくいけばニュータイプ並みに高い反応速度や高い操縦技術が手に入るから」そう言うとは私は慶一君の心臓の鼓動を始めさせた。

「今君は生きているよ。さっきまでは私の力で君を生かしていたが、もし裏切るようなら心臓を止めるよ、協力してくれればちゃんと生き返らせるわ」心苦しい、この気持ちがいかに苦しい。

それから三日慶一君はシュミレーションに励んでいた。私はその間もパイロット探しをしていた。

そして見つけたもう一人の少女、この少女も16歳前後だろうか、気のせいか慶一君の服と似ているような。いや、服というより制服だろう。

もう一人見つけた此方は20歳くらいだろうか、二人ともまだ転移の衝撃で眠っている。

そんな中慶一君は「CR！シュミレーション終わったぞ！」全身汗

だくで息も荒げながらやってきた。

「早かったね、後5時間くらいはかかると思ってたんだけど」「黙れ、さつさと機動試験に移る……麗華?」

「何? 知り合いなの?」「ああ、俺の幼馴染で同じクラスの百合原ゆりはら麗華れいかだよ。そっちのお兄さんは?」

「この次元に流れて生きたもう一人のパイロット候補よ。さつさと起きてくれないと困るの」「ううん、一体何が……あれ? 慶? 此処どこ?」

「んだよ、うるせえなおちおち寝ても……どこだ此処?」

「ええと、麗華、お兄さん落ち着いて聞いてくれ。心臓にて当ててみて」

二人の顔が青ざめる。当たり前だ、自分の止まるはずのない鼓動が止まっているのだから。

その後一騒動あったが何とか私と慶一君で収め、今起きている状況を話した。二人は完全に混乱していた。

だが分かったことも有った様だ「つまり、私達にその敵を倒すためにガンダムに乗れて事よね」「しかも身体強化つきで、面白いじゃねえか」

「面白くないですよ、そういえばまだ名前聞いてなかったですね。俺は御ノ方 慶一、彼女は百合原 麗華、この女はCR」「よろしくお願いします」「私がCRよ、あなたは?」「俺は斎洋いつきひろし、とにかく

く協力すりや生き返れるんだな」「ええ、けど拒んだ場合此処で空腹か心停止で死ぬことになるわよ」「二人の顔が一気に引きつった。当たり前よね。

「慶は承諾したんだよね・・・なら私も引き受ける、それにヒーローってあこがれるのよね」

「俺も受けよう、どうせ一度死んだ身、生き返らせてくれるならやるに決まってるあ」

「じゃあOKね？」私は格納庫へと3人を連れて行った。「丁度ツヴァイとサードが完成したようね。すぐに身体強化シュミレーションを受けてもらうわ。慶一君は私とともに期待のOSの調整を行ってちょうだい」

「ああ」「はい」「了解だ」慶一君、麗華さん、洋さんの順。

私はアムロに通信を入れておいた。あらたなパイロットの情報と一緒に。「かなり奴らの戦力は固いわね。CTCか、まったく厄介な物を作ってくれたね」

そして麗華たちがシュミレーションを始めて3日、慶一君は私とともに新型ガンダムの設計を行っていた。

「終わったわね、よし、これからジェネレーションガンダムの実験機動に入るよ。操作プログラムは組んであるから大丈夫。敵は擬似弾頭しか使わないけど油断しないでね。行くわよ、ジェネレーションビット発進！続いてジェネレーションガンダム、ザ・ワン、ツヴァイ、サード発進！」

私の操るジェネレーションビットが発進しその後続くように三期のガンダムが発進していった。

「了解！御ノ方慶一、ザ・ワン行きます」「はい！ツヴァイ、百合原麗華、発進します」「よっしゃあ！サード、斎洋、行くぜえ」

私の不出来によって巻き込んでしまった次元を渡りし三人の戦士が宇宙に飛び立った。

番外編(?) 第一話「プロジェクトジェネレーションG」(後書き)

友達にどんな小説が好きか聞いたら、地の文が一人称のものが好きと言っていたので少しだけCR視点で書いて見ました。どうでしたか？

ツヴァイ、サード、ジェネレーションビット、麗華、洋については次回くらいに出したいと思います。

感想、最終決戦に出すキャラ、MS、MAは結構長い間募集します。

これからよろしくお願いします。

番外編(?) 第二話「ジェネレーションガンダム出撃」(前書き)

機体説明とかは後ほど載せます。

番外編はとりあえずCR視点で書いて行きたいと思います。「私」は基本CRMIプログラムです。

番外編はいつまで続くかは未定です。

それでは番外編(?) 第二話をどうぞ。

番外編(?) 第二話「ジェネレーションガンダム出撃」

格納庫からあの3人がガンダムに乗って飛び立った。

私はジェネレーションシステムの緊急用防衛機のジェネレーションビットを発進させた。

D・O・M・Eと言う月にあった生体コンピュータの使っていた物を参考に作ったが結構うまくできた。

武装はまだ不完全でビームライフルとシールドくらいだが、一人10機もいれば良い訓練相手になるだろう。

しかしあの3人には驚かされる。全員予想より早い時間でシュミレーションをこなしているのだから。それでこそ重要な戦力になるのだが。戦わせている本人としては心苦しい。

慶一はドラグーンやビームライフルを使って確実に一機ずつ落としている。格闘戦に持ち込もうとライフルを腰にしまい、GNビームサーベルとノイシュペールラケルタビームサーベル(面倒なのでGNサーベルとノイシュペールでいいか)を抜く。

改造の施されていないGNサーベルは此方が作ったと言っても設計は同じ、効率よく動いている。ノイシュペールは両端からビームサーベルが展開できるようになったため、なれないと扱いが難しく、使いずらそうだった。だが出力には問題ない。

ハイパードラグーンの機動力にも問題はない。射出後はヴォヴァチユーリユ・リユミエールを展開できないでも、ビームシールドとそ

の機動力で十分強い。

それに乗っているフォトムウも十分機能している、他の武装も問題なく動いている。

問題はGNフィールドドライブシステムだ。まだクアトロドライブシステムを正式採用型のガンダムは完成していないため稼動実験のデータがないため、ツインドライブのデータはあまり使い物にならない。それに出力が少ないためそこまですばやい動きができない。

月光蝶の制御システムも、本当の月光蝶を使えず、普通のナノマシンによる実験のため正確な実験結果が出てこない。

ツヴァイはあの少女が乗っているが心配だ。アレにはかなり危険な物が乗っている。新型のゼロシステムのプロトタイプが詰まっている。

ガンダム界最強の砲撃能力を有したサテライトキャノンの強化型の試作機が搭載されている。

対コロニー用のツインバスターライフルが二丁もつまれている。

さらに最新型のモビルトレースシステムも採用されているためたちが悪い。

この機体が敵方に回ったらきつと最悪な状況になるだろう。

改良型のツインバスターライフルは威力調整が可能になり、通常の

ビームライフルと同じように使える。それを使って着実に一機ずつ落ちていく。

モビルトレースシステムを使っているので、レバー操縦の苦手な麗華でも良く動く。彼女が少林寺拳法を学んでいてくれて助かった。段位を持つてはいないが動き方だけでも知っているのならばモビルトレースシステムは十分活用される。

サードのほうは大量のファンネルを使って一機に数を減らしている。27機ものファンネルをどうしてこれらの人間が使えるのか不思議ではない。しかしかなりの操縦技術で良質なデータが結構手に入った。

手に持っているハイメガバズーカで蹴散らしながら、ムラマサブラスターで切り落としていく。

それぞれの戦闘能力の高さに感服していた。だが麗華はオペレーターのほうが効率がよさそうだ。

そういえば確か別の次元のジェネレーションシステムのアプロディアとか言う人（？）が増援に何人かよこすから機体の準備してるとか言っつてし、その人にあげちゃってもいいか。

慶一が通信を入れてきた。もう倒したのか早いな。

「CR全部つぶしたぞ。次はどうする？」

「そうね・・・いったん戻ってきて。所々被弾してるし、その修理

もするから・・・にしても慶一君と洋さんは強いわね。ほんとに一般人だったの?」

「おいおいCRさんよお、それは無いんじゃないか。おれ悲しいよ」

「ごめんなさい。麗華さん、あなたにはテストが終わってから、これから来る増援部隊の旗艦のオペレーターとして動いてもらいたいんだけど、いいかしら?」

「はい、分かりました。私も少林寺習ってましたけどかなり辛いですし、このガンダムももっと良いパイロットさんに乗ってもらったほうがきつと喜びますよ」

「そうか、一時間後にもう一度武装のテストをする。ザ・ワンのGNフィールドドライブシステムと月光蝶制御システムにブロッサムシステム、ツヴァイのサテライトキャノンとロングツインバスターライフルにゼロシステムとハイパーモードシステム、サードはフルサイコフレームとペガサス・フィン・ファンネルのオーバーロード状態のテストに光の翼の展開実験だ」

まだ問題は山済みだが彼らの力を借りれば何とかなるだろう。とりあえずこれから起こるであろう戦争を勝たなければ世界は確実に崩壊する。

これから始まる戦い。そう、ジージェネレーションクロスウオーズ「多次元交錯戦争」

他のジェネレーションシステムの統括地でも幾度か起こっているらしい。

いつしかこの戦いは簡単に「Gジェネレーションの戦い」と呼ばれ

ているらしい。

アプロディアもこの戦いを経験しているらしい。何かアドバイスでももらえないだろうか。

この戦いでどれくらい死者が出ただろうか。CTCの襲撃によりかなりの被害が出ているらしい。

おっと、考えていたら一時間が過ぎてしまっていた。

さてと、テストを再開しなきゃ。

「慶一君、麗華さん、洋さん少し遅れたけど再開しましょう。GN粒子タンクとナノマシンに新型OS、マイクロウェーブと強制発動キー、サイコフレイムのオーバーロードエネルギーと光の翼の展開システムは調整完了しているわ。皆発進して」

3機は発進して私はマイクロウェーブを発射し発動キーを挿す。

ツヴァイのエネルギー供給は順調でゼロシステムも活動待機状態で発動を待っている。ビットを発進させてゼロシステム的能力を見る。

情報量が少ないとはいえ辛いだろう。だが、ゼロシステムはちゃんと機能して最高のタイミングでサテライトキャノンを発射して、ビットを殲滅する。

ザ・ワンのブロッサムシステムは手動発動であるが、しっかりとOSの変更と脳波の受信を行っている。

タンクに入ったGN粒子とあわせてGNフィールドドライブシステム

ムを起動させて、粒子タンクのおかげでようやくまともなデータが手に入った。ナノマシンの制御領域はまだ周囲30メートルくらいでも形状のコントロールくらいはできた。

サイドのフルサイコフレームのオーバーロードはペガサス・フィン・ファンネルによって効率よく動いている。NT-Dは搭載しておらず、機体制御がかなり難易度が高くなった。光の翼も正式採用されて出力の調整や形状の変化がこなせるようになって無駄にエネルギーは消失しなくなった。

「3人ともご苦労様。これから開発する機体のための良いデータが手に入ったわ。これからもいろんなガンダムの製造を行うから手伝ってちょうだい」

敵がどれほどの戦力かはまだ分からないけど、やれることはやってみようと思う。

さてと、アムロはどれくらいの世界に行ったのかな？旅立ってまだ10日ほど、そんなに進んだとは思えない。敵もゼロ時間の時空間ワープはできないはずだからワープにかかる時間も同じはず。

敵を気にしようがない。私にやれることをやろう。

番外編(?) 第二話「ジェネレーションガンダム出撃」(後書き)

第二話終了しました。変なところで切れてしまいましたね。スイマセン。

次はツヴァイとサードの説明です。ちなみにそれぞれで数え方が違うのは駄作者の遊び心の1つです。

感想、アドバイス、オリキャラ、機体、お待ちしております。

番外編(?) 機体、パイロット説明その2 (10月2日更新) (前書き)

今回はツヴァイとサードとビット、麗華に洋の説明をしたいと思います。

書き忘れていたジェネレーションビットの解説を加えました。

いささか無茶な設定ですが、必死こいて考えました。ひょうかをお願いします。

それでは機体説明などですがどうぞ。

番外編(?) 機体、パイロット説明その2 (10月2日更新)

「ジェネレーションガンダム ツヴァイ」外見 DXの手足をゴッドと同系の物にして、肩にウイングゼロの大型にしたウイングバイナダーをダブルオーのドライブのように持つ。背部にはサテライトキャノン装備。

格闘武装 右腰接続DX専用ハイパービームソード*1 左腰ゴッドフィンガー対応型ビームサーベル*1ウイングバイナダービームサーベル発生装置*2

射撃武装 肩部ブレストランチャー*2 ツインバスターライフルカスタム*2 デイバイダー型シールド*1 腹部ビームキャノン*1 ツインサテライトキャノン*1

ゴッドフィンガー対応型ビームサーベル シャイニングに装備されているビームサーベルを元に、ゴッドフィンガー、または石破天驚ゴッドフィンガーのエネルギーを吸収し、ライザーソード並みのビームソードを作り出せる。

ウイングバイナダービームサーベル 肩のウイングバイナダーからビームの粒子を放出しすれ違いざまに敵を切る。ウイングを広げて機体の全体を包み敵陣への突撃にも使える。

ツインバスターライフルカスタム 出力調整ができるようになり、通常のビームライフルとして使える。いつもはウイングバイナダーに収納されている。砲身を縦につなげて超射程を誇るロングバスターライフル、それを横につなげたロングツインバスターライフルと変えられる。

ディバイダー型シールド 小型のディバイダー型のシールドで、ブーイスターにはならないがハモニカ砲形態にして発射する。ビームシールド発生装置がついており、基本的に左手に装備されている。

腹部ビームキャノン 拡散性の有るビームキャノンで、後腰にある砲身を連結することでサテライトキャノンとなる。イメージはセラヴィーのGNバズーカ?によるダブルバズーカ形態。これと背中の中のツインサテライトキャノンを合わせてデルタサテライトキャノンになる。

腕部VPS装甲 ツインバスターライフルのパワーに耐えるため腕部にのみVPS装甲を展開する。これにより片手でも3発、両手なら6発は打てる。ただし、ロングツインバスターライフルは両手でも腕が吹き飛びはしないが1発が限界。

新型ゼロシステム CRMIPプログラムに接続されており、その場で絶対的に必要な情報のみを検索して表示する。情報量が少なくなるため暴走の危険性は減少したが未来を見せることは無くなった。ただし、CRMIPプログラムとの通信が途絶えるとただのゼロシステムになる。

最新型モビルトレースシステム どんな動きも完全にトレースし、高い反応速度を誇る。

「ジェネレーションガンダム サード」外見V2にZの左腕とZZの頭部とユニコーンの右腕、胸に髑髏のレリーフ、両肩にフルクロスのエフィールドジェネレーター。

格闘武装 ハイメガビームブレイド*1 ムラマサブラスター改*
2 ビームトンファ*1 正式採用型光の翼 シザーアンカー*
1 スクリューウィップ*1

射撃武装 左腕グレネードランチャー*1 トライビームライフル
*1 ジェットファンネル*5 アーマードファンネル*6 ペガ
サス・フィン・ファンネル*4 スカルヘッドファンネル*6 フ
リユーゲルファンネル*6

ハイメガビームブレイド 頭部のハイメガキャノンから出るビーム
ソード、接近戦時の隠し武器として使える他、伸ばすことによりハ
イロングビームサーベルとして使える。

ムラマサブラスター改 柄の部分に連結機能を持つ。連結して一方
のみにエネルギーを集中させてビームソードを出すと通常より巨大
なビームソードを展開できる。横に連結することでツインライフル
となる。

正式採用型光の翼 今までは余剰エネルギーの散布だが正式採用型
は余剰エネルギーも駆動エネルギーに変換可能になり、任意で展開
し1つのれっきとした武器になっている。高速移動や両手のビーム
シールド発生装置に接続することが可能となっている。

トリプルビームライフル ダブルビームライフルの改良型、3門の
砲身を持つ。三角形上に砲身が並び、砲身をT字型に外側に向け開
くと中にハイメガバズーカがある。ジェネレーターに直結して、頭
部と合わせることでダブルハイメガバーストとなる。

ジェットファンネル 左手に装備されたウェブライダー時の機首と
なるシールドの先端コンテナに収納しており、砲撃ができないがビ

ームソードを展開できて、シールド装着時でもビームソード、ビームクローとして使える。

アーマードファンネル 機体の膝とすねと後腰に1機ずつ装備されている四角形をしており、頂点に1門ずつ小型のビームガンが装備されておりシールドビットのように使える。本来はこれをより多く装備する予定である。

ペガサス・フィン・ファンネル 背中の光の翼の発生装置の上部に搭載されている。再チャージ可能でサイコフレームから発生される物理的エネルギーを制御して推進剤の代わりや盾、ビームサーベルの巨大化などがある。Jの字のような形をしており、ビームサーベルの周囲に4機を漂わせてサイコフレームのエネルギーを引き上げるとサーベルが巨大化する。盾にするときはソードビットのようにする。

スカルヘッドファンネル 骸骨のような形で、横脛にあるコンテナに3機ずつ収納されており、髑髏の口が開きそこからビームを放つ。エフィールド発生装置を内蔵しており、防御力が高い。

フリーゲルファンネル 光の翼発生口に搭載しており、光の翼発生時に同時に発射する。光の翼の制御アンテナになっており、光の翼をファンネルにまわせ敵にファンゲのように突撃させれる。

バイオコンピュータ搭載 ミノフスキードライブ搭載

「ジェネレーションビット」外見 GXビットに類似しているが、サテライトキャノンは無い、背部には、高速航行用のジェットパックになっている。名前は通称GGビット（ジェネレーションGビット）

射撃武装 ビームライフル*1

格闘武装 腕部収納ビームサーベル*2 対弾シールド内臓ブレード

対弾シールド内臓ブレード 実体剣でありキュリオスのシールドのようにブレードが内蔵されているが、盾を分離する必要は無く、先端から出てくる。形は小さいイージスガンダムのシールド。

キャラクター

ツヴァイパイロット（仮）「百合原ゆりはら麗華れいか」 17歳 高校二年生
少林寺拳法部

生まれつき異次元透視能力を持っていた。

家族は両親と両祖母、妹が一人いる、全員健康そのもの、絵に描いたような家族である。慶一と話せる数少ない女性、もしかしたら唯一。慶一に好意を寄せているが本人は気づいてない様子。

根本的に明るく少々お節介なところも有る。本人曰く慶一のせい。

高校は慶一と同じでクラスも一緒。慶一とともに世界的同時超多発テロに巻き込まれジェネレーションシステムによって転移された。戦闘よりもオペレートを得意としており、ツヴァイに乗っているのは暫定的なものだ。

外見は身長は165くらいで、髪が長く腰にまでとどくくらいの長さでポニーテールにしている。顔立ちはよくモデル体系で面倒見も

良いため男子には人気。しかし告白、デートは全て断っている。少林寺はあまり強くない。成績は普通。芯が強くめったなことではくじけない不屈の精神を持つ。

慶一を好きになったのは小学生のとき車に引かれそうになったとき助けられたため。慶一はこの事故で特殊能力を手に入れた。

サードパイロット「いつきろし斎洋」 21歳 大学3年生宇宙物理学科所属
レゴ部

高い空間認識能力と三次元処理能力を持つ。高校生のとき病気で意識不明の植物状態となり異次元変換能力を手に入れ復活。

異次元変換能力 自身に病気や怪我を起こしたときそれを別次元の自分へのダメージとして変換する。ただし使くと全身に疲労感が襲い普通に呼吸ができず2、3日は疲労が残る。本人は知らないが使えるのは最後の使用から2年間の間がないと使えない。

性格は優しく年下思い、ただ不良が慶一並みに嫌いで家の近くの不良グループを一夜でつぶした。家が資産家であるがそれを鼻にけることは無い。将来的には宇宙飛行士を目指しており日々勉強している。

大学からの帰りの電車が世界的超多発テロに合いジェネレーションシステムによって転移される。戦闘センスが高く、卓越した空間認識能力と三次元処理能力でファンネルを操る。バイオコンピュータのサポートもありその技術はプルシリーズに匹敵する。

外見は190と背は高く髪型は気にしてないのかぼさばさにたらしめている。そこまでモデル顔ではないが運動神経はそこそこの有る。レ

ゴ部で三次元処理能力を鍛えている。性格が良いため友達が多い。何かと頼りにされるため人気は高い。偶然にだが生死の淵から蘇ったため命や仲間を大切にしている。そのため生き返ると知ったとき迷う事無く承諾した。寝起きがとてつもなく悪い。無理やり起こされると不機嫌になったりする。

番外編(?) 機体、パイロット説明その2 (10月2日更新) (後書き)

いかがでしょうか。

自分の足りない頭で精一杯考えたキャラクターです。駄作者の機体ゆえ不透明な点が多々おありと思います。分かりづらい点が有りましたら教えてください。

感想、アドバイス、キャラ、機体お待ちしております。

番外編（？）第三話「強襲の絶望」（前書き）

ようやく三話目・・・書くペースが遅すぎる・・・
女性の感情表現が難しくてうまくいきません。

今回も戦闘シーンは微々足る者です。

では番外編（？）第三話をどうぞ。

番外編(?) 第三話「強襲の絶望」

三機のジェネレーションガンダムのテストも開始から20日ほどが過ぎ、いよいよ大詰めと言ったところだろう。

機体の開発は順調に進んでおり、すでに四機目のジェネレーションガンダムはロールアウトだけなら完了しているが、パイロットは見つかっておらず、さらに異次元のガンダムパイロットに渡すガンダムも1機完成しており、ロールアウトと実戦訓練は完了した。

1つ欠点が見つかり、近々改修の為にアムロに頼んで持ってきてもらわないといけない。ジェネレーションビッドは機体製造のため再製造はしていない。しかも全機データ収集のため、模擬線で破壊された。

アムロから予定の次元をすべて回ったと連絡が来て、機体の製作にも時間が迫ってきている。

設計図の有る現存機は、製造にそこまでの時間はかからないが、新型機の製造にはかなりの時間を有するので製造が追いつくか心配だった。

それに、PMB本体がずっと沈黙を保っていることも気がかりだ。

本流介入権限の低いPMBが私のプログラムの再起動によって動きづらいのは分かるが、此処まで沈黙されると逆に不自然だ。

いろいろ考えていたら慶一が来た。「おい！CR・・・って何か変だな・・・麗華っ、斎さんっ」「どうしたの慶？」「何かあったか？」「ああ、こいつの事CRって呼ぶの変じゃないかなって思ってた・・・」つまり慶一は私に名前を付けようと言うのか。

「それもそうね？CRさんも、ちゃんとした名前があったほうがいいし」「そうだな・・・何が良いかな・・・」

何なのだ彼らは・・・私に名前だと・・・人間でないのに名前を付けるなど、思考がまったく読めん。

「ま・待ってくれ、私に名前など・・・それにわたしはプログラム、人間じゃない。イレギュラーだ、そんな者に「でも仲間だろ」なっ！」

不思議だ、いやな気分じゃない。うれしいのか？

「エティコラなんてどうだ」「どういう意味だ慶一？」「スペイン語で大切な仲間って言葉を短くしただけだよ」

「へー、慶のわりにいい言葉選ぶね、半対人恐怖症の癖に」「なわけねえだろ。本当は俺は感情豊かなんだよ。ただ誰かを大切だと思うと・・・」「慶・・・」

大切な仲間、さっきの気分と似た感じがする。

本気で彼らを死なせたくないと思った。

だからだろうか。こんなことを考えるなんて、今からでも間に合うだろうか。

ジェネレーションガンダムの最終型の開発に。

コンセプトは出来ている。

新型ミノフスキードライブ、ハイパーデュートリオンエンジン、クアトロドライブ、私も開発に携わった新型の駆動システム。

エネルギー消費、出力、軽量化、どれを取っても確実に現存の稼動システムを上回るだろう。

この2つのシステムを使った亜光速を超える機体。

「ジェネレーションガンダム プロテガ」

スペイン語で守る。

勝手に巻き込んで、憎まれてもおかしくないのに、名前を与えてくれた。

なら私は全力を持って彼らを守る。

「ジェネレーションガンダム プロテガ」外見 ファーストガンダムにクロスボーンガンダムのコアファイター状のものの先端に連結されているGNドライブと以下の武器がついている。

遠隔操作連結式エネルギーシールド、ガーディア・デ・ロス・ディオセス（鎮守神の意味）通称GDL D 核の爆発でも吸収するエネルギーシールド。普通にビームシールドにもなる。背中のドライブの先端にあり、ストライクフリーダムのドラグーンのような形で4機

ある。シールドはアカツキのシラヌイと同じ方法で展開する。吸収したエネルギーはGDLに触れるとナノマシンを使って自機、または味方機に供給可能。核の熱エネルギーを電気エネルギーに変換するので、核融合炉などを搭載していない機体にとってべんりで、瞬時にエネルギー供給が可能となった。

リピドペテロ・デ・ディオス（神の鱗の意味）通称ルプタラシールドビット 20機、ホルスタービットのようにGNフィールドを張るが、クアトロドライブにより常に機体の周囲に張られているGNフィールドからエネルギー供給がされるため、レグナントのGNビット二枚連結を横に半分にしたくらいほど。両肩に連結して繋がっている。7枚ずつ。膝に二枚連結している。腰に1つずつ。砲身もついているので射撃も可能。

ガーディオ・ナシオ・アラ・レイ（守護神より誕生した光の翼の意味）通称トランザム・ノヴァ トランザム6で使用可能。GNフィールドにミノフスキードライブから生じるエネルギーを合わせる事によって、亜光速に達する加速を実現した。切断能力があり、高速移動しながら敵を切り刻む。クアンタライザーにも搭載されているが、まだプロテクトの解除はされていない。最大に広げると地球一個を覆えるほどの大きさのビームシールドになる。

空間切断複合盾型兵装 プレパラド・パラ・ラ・アブソリユート（絶対の覚悟の意味）通称アブソリユート 両腕に装備された二層に分かれた武装。ワープゲートを造るように、盾の下層部分の先端に空間の亀裂を圧縮、開放することで空間そのものを切り、敵を切断する。ただし切断距離は3メートルもなく、接地面が敵とのゼロ距離でなければ、あまり効果はない。上層先端にビームサーベルや外側にビームシールド、ビームサーベルと同じところからビームライ

フル、となっている。イメージはプロヴィデンスの武装。

私が作ることのできる最強の防御力を持った機体だ、装甲にはVPS装甲を持ち、最大まで強化してあるためビームをはじける。

その前にGNフィールドもある。ルプラシールドビットによって皆を守る。最高級の防御力を「ガーディオ・ナシオ・アラ・レイ」を装備し、「プレパラド・パラ・ラ・アブソリュート」による攻撃能力が備わっている。

まだ実験機も完成してない。

大戦に間に合うだろうか。

これだけの実戦投入経験のないデータ無しの状態だと時間かかる。

他のジェネレーションガンダムの製造二時間がかかったと同じように、だが、今回は話が違う。

まったく持ってデータがない。いままでは、現存していた機体や兵器のデータも使っていたが、ほとんどの能力が卓上理論で終わってしまったものばかりだ。

まだアムロが帰ってくるのには時間がある。

それまでには取り掛かれたらよいのだが。

現存の戦艦も機体も予定ノルマはクリアした。

今ザ・ワンとサードが模擬戦をしている。

麗華はオペレータールームで二人のオペレートを行っているだろう。少し休もうかな、このところ動きっぱなしというか、考えっぱなしというか。

二人も早めに切り上げさせて休ませるか。

「ええ」と、二人の機体のコードとオペレータールームのコードは「私が通信を入れようとするときだった。

何かが接近している。

この次元に起こることの大体は瞬時情報として伝わってくる。

だがその情報もむなしく、敵機の攻撃を許した。と言うより突撃を許した。

ハンガーに突っ込んだ敵を見たときは驚いた。

そこに「フェニックスガンダム」がいたのだから。

「フェニックスだと、誰が……」そんな風に考えてた私に突きつけられたのは銃口だった。

私はとつさに物陰に隠れて大事を逃れたが、敵はいつたい誰なのだ。

この惑星級演算処理型システムの所在を知っているのは私とアムロ、

中枢のジェネレーションシステムだけだ。

だがもしPMBがハッキングをしていたら……

「あ・あなたは誰！！何故この場所が分かったの！！」

「知っているさ、中枢にハッキングを仕掛けてようやく見つけたんだ。なあCRM、いや、エティコラだったな」

「お前は……PMBか……」

そこに立つのは男、何者か名前すら分らない。

「そうだな……カウサデセ。絶望の火種をスペイン語で省略したんだが、どうかな、俺の名前？」

「良いんじゃないの、私には、あなたにぴったりだと思うわ！」私は銃を抜いて威嚇射撃をする。

カウサデセと名乗った長身の男は動じず、的確に撃ってくる。私はこんなことになるとは思っておらず、この肉体は戦闘に向いたに揺ではない。

どちらかと言えば、情報処理を行うときに使う体なので反応が鈍い。弾がつき、やつをツヴァイのほうに逃がしてしまう。

「逃げるな！このっ！」先ほどの銃撃戦で腕を負傷し、うまく狙いが定まらない。

仮の肉体といえども、コミュニケーションをとる手段としても開発されたため、痛みによる疲労感などもある。

「へえ、いい機体じゃないの、こいつ貰ってくぜ」

「やめなさい！触れるな！ガンダムは・・・人類の・・・全次元の希望よ！シャア・アズナブルなどと言う輩にプログラムを奪われた哀れな者が・・・触れるな！」

「気づいてなかったのか？」奴は笑っている。何故？私はつい銃を下ろしてしまう。

「シャア・アズナブルは権限を奪ったんじゃない、俺が奴に与えたんだ。そして記憶を改変させ、奴はあたかも自分がプログラムの権限を掌握したかのように錯覚し、次元を潰し始めた。まあ、奴が世界を憎む心にまで改造は施してないがな」

「全て・・・貴様の掌の上とでもつ、言いたいのかあ！！！」私は渾身の思いをこめて銃を掲げる。

だが容易くカウサデセは私の銃を打ち落とした。

そしてツヴァイのコクピットを開き乗り込む。

私は強制排出装置で、ツヴァイを外部に放り出し、慶一と洋に連絡を入れた。

「二人とも聞こえる？、ツヴァイが敵パイロットに奪取されたの。捕縛して、無理なら破壊してもかまわないから・・・いや、確実に破壊して！データの一片も残させないように」ジェネレーションビ

ツトの再製造を怠ったことが此処にきて悔やまれた。

「洋さん、来ましたよツヴァイです！仕掛けます。行けっ！ドラグーン！」ザ・ワンは背中のドラグーンを飛ばす。

「ツヴァイは一樣三機の中でのトップスピードは最高だ、出し惜しむな、行けっファンネル！」全身の27機のファンネルがツヴァイに飛来する。

しかしツヴァイは華麗な身のこなしでそれをことごとく避けて行く。

「逃がすな慶一、トランザムだ！」

「了解。トランザム！！」赤い閃光がツヴァイに迫る。

「フツ、甘いな、俺が一機で来るわけないだろ」

ツヴァイの前から拠点防衛用MS「レギナ」が5機やってくる。

レギナの持つメガビームランチャーはかなりの威力を有しており、遠距離戦は危険だ。

「ちいいっ！邪魔だ！退きやがれ、ハイメガキャノン！」「ソードビット！ドラグーン！食らえハイマツトフルバースト、当たれええええええ！！！」

2機は高威力の射撃によって連携の崩れたレギナを一機ずつ確実にしとめている。

だが、その間にツヴァイとカウサデセは逃げていった。

「エティコラ、すまない、逃がしてしまった」「仕方ない、戻って来なさい、機体のチェックをするわ。悔やまないで、人には限界がある」

ならその限界を超えるのが、未来を変える力を持つガンダムなのか。

私は今日の事件で決断した。

「ジエネレーションガンダム プロテガ」

この機体を最終決戦が始まるまでに完成させる。

ジエネレーションシステムを奪い返すためにも、PMB、いやカウサデセの位置をつかむための四号機のパイロットを見つけ出す。

仕事は山済みだ。

しかし、止まらない、この行動に、全次元の全てがかかっているのだから。

番外編(?) 第三話「強襲の絶望」(後書き)

少し慶一が変わり始めました。新しい環境になると人は変わるそうですから。

奪われるツヴァイ、正式パイロットの決まってる四号機、開発のプランも立たない五号機、どうゆう風に出していこう・・・

番外編は次回で最後となります(予定)。

感想、誤字、オリキャラ、機体、どうかよろしくお願いします。

番外編（？）第四話「決戦へ向けて」（前書き）

ようやく番外編（？）が最終回です。

え？短すぎ？番外編になっていない？それはそれは。

本気でスイマセン。駄文の埋め尽くしです、書いてた本人でありながら下手すぎることを痛感しております。

とりあえず、この番外編（？）は終わります。

それでは番外編（？）の第四話をどうぞ。

番外編(?) 第四話「決戦へ向けて」

カウサデセと名乗ったあの男の襲撃から3日、3人はとりあえず落ち着きを取り戻し、今は新たなるガンダムの製作に取り組んでいる。

あらかたの機体が完成し、残ったのは「ジェネレーションガンダムプロテガ」、私の機体だけだ。

このままいくとおそらく最終決戦時に完成、出撃することになりそうだ。

それに奴が乗ってきたあの「フェニックスガンダム」もまだ使えそうだ。

アムロは今日中に帰ってこられそうだ。

Ex-Nガンダムの追加武装も製作は終了している。ついでにクアンタライザーの欠陥部分の改修も行いたいので、その準備も進んでいる。

「麗華、ガンダムの製作は後どれくらいかかりそう?」

「そうですね、後多く見積もっても5時間以内には全機のOSと武装チェックも終わりますから……あ、でもプロテガの製作にはかなり時間を使いますよ。クアンタライザーのドライブと違って同調を前提にしたドライブは時間がかかりますから」

「そうね、クアンタライザーに搭載されているドライブは、エクシア、デュメナス、キュリオス、ヴァーチェに搭載されていたドライ

ブを基にして、一個一個の出力の高上と、その4基による完全同調によって生じる超高濃度粒子の使用を可能にした機体だからね。まあそのせいで一個一個の粒子生産量にばらつきが生じ、サブパイロットを必要としているのよね」

これは私がGNドライブの研究をしていたら分かったことだ。

ダブルオーライザーとダブルオークアンタの粒子発生量に何故これほどの大差が生じるのか、その疑問が始まりだった。

結論はダブルオーライザーは、ドライブが完全同調しておらず、粒子生産に不具合が生じていたからだ。

だがさらに分かったこともあった。

完全同調前提型は、ドライブの持つ個性をなくすため粒子生産量を抑えるので、一個一個の単体での生産量が、旧式のオリジナルGNドライブより少ないが、ツインドライブのときは二重化された恩恵により生産量が爆発的に上昇する。

ならば、旧式のドライブを完全同調させるにはどうするか、クアトロドライブによる4基のドライブをGNソードビット12機による同調保持、これが実現したから成功したシステム。

だがこのシステムは危険すぎる。

博打性が大きすぎる、同調するかどうか分からなかったからだ。

だから時間がかかるのが承知で完全同調型にしたのだ。

今考えると刹那はよくあんな危険な機体に乗ってくれた。

もうすぐアプロディアが増援部隊をよこしてくれるらしいが、何時くるのだろうか。

2時間もした時。

「うん？次元空間に何かが出現した？来たのかしら？」

外を見てみると、そこには「キャリア・ベース」がいた。

マーク・ギルダーなどの次元を超える戦士たちの母艦だ。

ステルスシステムを解除し、彼らを招き入れた。

「よく来てくれた、私がCRMIPプログラム、またの名をエティコラというわ」

「私がキャリア・ベース艦長のゼノン・ディーゲルです。大体の事情はアプロディアから聞いております。それに私らもGジェネレーションの戦いの経験者です。きつとお役に立てるでしょう」

「此方こそお願いね、何せ人員不足だから」

「此方は先の戦いで機体が足りなくなっていましたから此方で補給を受けると言われたのですが」

「準備は出来ているわ、ついてきて」そう言うと私は3人のいる格納庫へと歩みを進めた。

「まずマーク・ギルダー君にはこの『フェニックスガンダム』を敵の残し物だけれど解析は完了してあるから大丈夫よ」

「『フェニックスガンダム』か懐かしいな、前のはバルバトストの決戦で大破しちまって修理も出来なかったからな」

「次にラナロウ・シェイド君にはソレスタルビーイングの機体データから作った『ガンダムアストレAF?』を」

「へえ、これがソレスタルビーイングのガンダムか。俺は前の戦いではEX-Sガンダムに乗ってたからな、楽しみだぜ」

「エリス・クロードさんには空間認識能力が確認されているからちよつと扱いにくい機体だけど『ザンスパイン』、これはザンスカル帝国のコンピュータからデータを盗ませてもらったわ」

「データを盗ませてもらったって……簡単に言いますね。まあ、何とかしてみますよ、私だってやれるんだから」

「シェルド・フォーリー君には『重装フルアーマーガンダム7号機』この機体のスペックはかなり高いわ、エネルギー機関を改良して強化したわ」

「ありがとうございます、全力で戦わせてもらいます」

「エルフリーデ・シュルツさんには『ビギナ・ロナ』を、格闘能力の高いあなた用に右手のヴァリアブル・メガ・ランチャーにビームサーベル発生機能を追加しておいたわ」

「かたじけない、この機体、存分に使わせていただく」

「レイチエル・ランサムさんには『ガンダムアクエリアス』を渡すわ、敵がMDだったときはこの機体が役に立つわ。それにあなた戦術予報も出来るそうね、通信システムの改良もしいたわ」

「ありがとうございます、皆さんは私が守ります」

「ゼノン艦長、これからキャリア・ベースの改良をしたのですがよろしいですか？」

「そいつは有り難い。ついでに艦にいるやつらの紹介もさせていたくよ」

何故そんな必要があるのか、それはエティコラたちもこの船に乗るからだ。

私たちはパイロットの6人を訓練のため慶一たちに任せ、艦長と船に入ってしまった。まず入ったのは艦橋、そこにはこの艦の主要メンバー、といってもキャリア・ベースには自動行動モジュールがつのであるので、この少数で動かせる。

他にも何人かいるがハンガーにいるそうだ。

艦長が一人ひとり紹介してくれた。

「彼女がこの艦の副艦長ニキ・テイラーだ」

「よろしくお願いします」丁寧に握手をしてくれた。

「こっちが此の艦の操縦士、エルストン・イエーガー、副操縦士の

マリア・オーエンスだ」

「エルストンだ、よろしく頼むぜお嬢さん」「マリアです。ともに生き抜きましょう、この戦いから」

「この坊主と嬢ちゃんは通信士のジュナス・リアムとラ・ミラ・ルナだ」

「ジュナスです。通信による補助は任せてください」「ルナと言います。若輩者ですが、精一杯がんばります」

「でもって、こいつが狙撃主のクレア・ヒースローだ。不真面目だが頼れるスナイパーだ」

「ちょっと艦長、私だけ酷くないですか。そりゃ戦闘中にパイロットの物まねとかしますけど……」

十分不真面目って言うか不謹慎って言うか、とりあえず腕は確からしい。

次にMSハンガーに向かうと帽子をかぶった女性がいる。

「彼女がこの間の整備士兼サブパイロットのケイ・ニムロットだ」

「あたしがこの艦の整備士のケイだ。サブパイロットと言われているがうではからきし、頼るなら整備のときにしてくれ」

次にMSハンガーの上にいた二人の紹介をしてくれた。

「あの二人は此の艦に保護された子供たちだ、強化人間ゆえ戦うこ

とになってしまった……………」

どうやら気にしているようだ、まあ、私もそうだ、悲しいことだから。

「こんにちは、シス・ミッドヴィルです」この子が強化人間、暗い眼だ。

「シスちゃん、そんな無愛想はだめだよ、あたしはこのシスちゃんの大親友のカチュア・リス、よろしく……」

この子は生まれつきのサイキッカーらしい、だから気にしているのか、あのシスって子の表情が明るくなった、此方を警戒していただけのようだ。

この二人はその能力を生かすために量産型キュベレイに乗るらしい。

「これが我が艦の乗組員全てだ、キャリア・ベースは元は輸送艦を改造して作られた艦だ、まだ後3機くらいなら乗せれるぞ」

「では私と後2人の機体をお願いしたい。1機はまだ製造途中だがよろしく頼む。通信士の席が余っていれば一人頼みたかったのだが」

「オウ、余ってるぜ、通信士は1人でも多ければその分作戦がうまく行き易いってもんよ、」

この人たち以外にも送ってくれるといていた者たちはいる。

確か他のジェネレーションシステムも増援を送るといつていたが、トリエとかノーマとか言っただけ、あと何とか・レイとか言う奴も贈

るとか言ってたな。

それ以外のシステムはC、E世界の確かオーブって言う国の新兵を送るとか言ってたな。どうせならエースを送ってくれたらよかったのに。

ウルトラマンノアとか言ってた銀色の巨人は、自分の力で別世界に行った同族を、少しの間だけこの世界に送るとか言ってたし、そういえば別世界って何の世界だろう。

その前に私たち以外に次元移動できるって、本来は許されないんだろうけど、そのことに気づいていなかった私たちが言えることではないのよね。

とにかくこれで結構な人数のパイロットと機体が集まった。

さてと、今頃アムロは異次元のガンダムパイロットたちに戦うかどうか聞きに言っているところだけど、戦ってくれないと此方としては困るのよね、戦艦まで新造してやったのに戦いませんじゃ意味がないからね。

別次元の子達が乗る戦艦の製造を済ませなきゃいけないし、その艦の船員は目星がある、確かソレスタルビーニング号にいた大量のイノベイドが使えるはずだ。

大体の出来ることはやった。

この先何がくるか分からない。

でも、この世界に生きる人たちが、貴方の様な者に負けるとは思え

ない、世界はその世界に住む者たちが守り、育む物、私たちジェネレーションシステムが介入すべきモノじゃない。

世界が大きく動こうとしている、この大きな流れが未来にどう影響するか、分らない。

世界はまだ終わろうとはしていない。

時代は生きることを望んでいる。

それをあの子供たちが教えてくれた。

私に名をあたえ、仲間と呼んでくれたあの子達のためにも、私は必ず勝つ。

PMBプログラム、いやカウサデセよ、人間の心は、こんなにも温かい光を生み出せるということ。

世界は、こんなにも希望に満ちていることを。

それを、教えてやる。

機体説明

「ガンダムアストレAF?」小説「I S 光の英雄」作者様光を継ぐ者様よりいただきました。

姿 アストレAF?の腕がエクシアR?の腕、腰部のアーマーはアストレAFのもの。

武装 GNビームサーベル×4（腰の後ろとエクシアR?に付いていた所）、GNビームライフル、GNガトリングガン（背部に装着）、GNシールド

キャラクター、その他の機体に関してはSDガンダム Gジェネレーションに登場。

番外編（？）第四話「決戦へ向けて」（後書き）

今回出てきた機体の大体はGジェネレーションオリジナルの機体であり、キャリー・ベースクルーは全員オリジナルキャラであります。増援部隊には、これまで浴してくださった方々から送っていただいたオリジナル機体等であり、後に登場する増援部隊の紹介もさせていただきます。

改めてご協力ありがとうございました。

今回は本編、地の文も三人称に戻り、アムロたちも戻ってきます。

感想、アドバイス、お願いします。大戦開始まではオリジナル機体、オリジナルキャラを募集します。

第十話 「集いし戦士達」(前書き)

今回はようやく本編に戻ってまいりました。

最初の段落は番外編(?) 第三話終了時点、第二段落は番外編(?) 第四話途中です。

今回はようやくGジェネ的になったんですが、駄文の集合体です。

そんな話ですが、第10話をどうぞ。

第十話 「集いし戦士達」

アムロはCRMエプログラムの所へと向っていた。

とりあえず、自分の仕事は一段落が着いた。

これから一度CRMエプログラムの所へと帰還し、ガンダムの完成状況を見に来たのだ。

数時間飛んでいるとようやく辿りつた。

製作されていたガンダムは全て完成し、このまま行けば大戦の開始予想時間までは間に合いそうだった。

1機だけ除いて。

だが、この機体も完成には後17時間を切っていると言う報告もあった。

ともかく、アムロはCRMエプログラムのいる部屋へ向った。

「CR、全次元を回り終えた。後はこっちの準備だけだ」

「そう、分かったわ。でも、あの子達も疲れているでしょうから少し休ませてあげて」

「分かってる、俺は底までスパルタじゃない」

その時、CRMエの部屋のドアが開いた。

「エティコラさん、此方のガンダムは『プロテガ』を除いて完成、シュミレーションは全部クリアしました」

「そうか、ご苦労様、皆にも少し休んできてもらって。食事も作らせておくから」

「はい、ありがとうございます。それでは」

アムロは今の会話に少し疑問があった。

「CRM I、エティコラとは何だ、それにプロテガは計画には入ってない、完成させる必要はなかったはずだ」

エティコラは少し苦い顔をしていた。

「エティコラって言うのは、この世界に来た慶一が付けてくれた名前、私のことを仲間なのいつまでもコードネームみたいので呼びたくないって。プロテガは……」

今度は険しい顔になって、PMB、カウサデセの襲撃について話してくれた。

「なるほどな、それでプロテガの開発を進めたってことか」

「そう、それに、あの子達を死なせないのよ。私たちの無関係な戦いに巻き込んでしまって、協力しなければ結局あの子達は餓死してしまう。まったく、損な役回りよ」

その顔には、悲しい、黒いものが見えた。

「そうそう、あの刹那って人に渡したクアンタムライザー、欠陥が見つかったから近々こっちに来てもらいたいんだけど」

アムロは返事をするにNガンダムに乗って、次元の向こうに行ってしまった。

アムロは今まで回った次元のガンダムパイロット達を全員を転送した。

場所はC R M I プログラム内部にあるM S ハンガーに近い部屋へと移した。

そこには次元を超えてガンダムパイロットが集結していた。

そしてアムロが現れる。

キラがまずはじめに口を開いた。

「アムロさん、これはいい、それに此処は」

「此処は皆にも伝えられていると思うがC R M I プログラムのM S ハンガーの近くにある一室だ。心配することはない」

ドモンは少しあせった口調で、「おい、あのメールにはたしかに、あのワーム状の敵に食われた人間は誰ひとりとして死んでないと書いてあったが本当か」

「そのことも含めていろいろ話しておくことがある。聞いてくれ」

アムロの話したことそれは……………。

今この次元は確定と呼ばれる、過去の事象が、真に過去として定められる行いが停止し、もし過去に介入するものがいた場合、未来が大きく変わってしまうと言うことだった。

確定されていれば、本流から枝分かれした本流ができ、最終的には元の本流とつながり、結果的に同じ未来が待っているのだが、そうなくなり、未来が変わってしまう。

だからC R M Iプログラムは真っ先に確定を行うプログラムの再構築を行ったのだ。

いまはP M Bの影響で確定が行えない状況にあり、非常に危険だと言う。

だから、この次元のどこかに存在するP M Bプログラムの本星、惑星型演算処理システムを見つけ出し、破壊する必要がある。

そのために力を貸してほしい、といってきた。

そしてもう1つの質問。

「大切な人を、命を懸けてでも救う覚悟はあるか？」

全員が何の迷いもなく頷いた、死ぬ気は無いという言葉とともに。

「もちろん報酬は出す、たとえばトビア・アロナクス。君の見えなくなった目を再生し、その傷ついた顔や体も直す」

視力を失っているのだから有り難いことはこの上ない。

「ドモン・カッシュ、君にはCRM Iの持つナノマシン制御システムを渡してもいい」

そのシステムがあればDG細胞を自然回復のためにのみ使うことが出来る。

「キラ・ヤマト、君ならテロメア細胞再生の技術と、コーディネーター特有の生殖細胞の劣化修復手術の方法を与えてもいい」

それがあれば、ラウル・クルーゼのような惨劇は繰り返されることはない。

それがあれば、コーディネーターたちの未来が明るくなる。

一部には、それが主目的ではなく、ただ、大切な人が救えればそれだけでも良いと言うものもあるだろう。

「浚われた人たちは1人として死んではない。ただ、利用価値がなくなったら消される可能性はある」

浚われた者と、浚われる事が無かった者。

2種類の人間がこの場にいるが、両方とも暗いものを滲み出していた。

「まず、この戦いに当たるに、人質の救出を第一目標とする。それと、それぞれに新しい機体が用意されている、全員にだ。それとそれぞれの仲間に声をかけてほしい。戦力が足りなければ戦ってもらうことになるだろう」

救わなければいけない者がいる。

ただその思いが彼らを強くする。

「最後にもう一度問う。君たちは、もう一度戦場に立つ、そして、ガンダムに乗って戦う覚悟はあるか」

「俺はユイリイ達さえ守れるなら、かまわない」カミュー。

「俺はルーも皆も傷つかないようにするだけさ」ジュード。

「俺は俺自身と父さんに誓ったんだ、オードリーを守るって」バナージ。

「俺はテテニスを助け出す、それだけだ」トビア。

「シャクティが守れるなら、それで十分です」ウツソ。

「キングオブハート名に懸けて、レインとシグレを必ず救う」ドモン。

「リリーナを守る、それが俺の任務でありすべてだ」ヒイロ。

「過ちは繰り返さない、ティファを守る、それが俺の戦う理由だ」ガロード。

「僕はディアナ様との未来を掴んだんだ、離しはしない」ロラン。

「守りた人が、未来がある限り、僕は戦う、その覚悟は出来てる」キラ。

「カガリを助け、支える、それが俺の戦う覚悟だ」アスラン。

「俺に出来たのは戦うことだけだった、それを覚えてくれた人を、俺は必ず守る」刹那。

覚悟は問うまでも無く、皆出来ていた。

託すことの出来る者達ばかりだ。

未来を変える力、そう、『ガンダム』を。

「全員ついて来い。これから乗るガンダムとの初対面だ。刹那は機体に一足先に乗っているが、欠陥が見つかったからこちらに移してあるぞ」

アムロは、この先に起こる戦いに少しばかりの自信が出てきた。

確証なんて無い、ただ純粋な勘。

それだけでも、彼にとっては最良なことだった。

エティコラはMSハンガーにきた全員の目を見てこう思ったらしい。

「強い目ね、何人にも崩せない、強い覚悟を、持っているわ」

そして、かつてガンダムに乗っていた少年達は、新たなる自らの剣を手にした。

第十話 「集いし戦士達」(後書き)

久しぶりの地の文三人称バージョンですがエティコラ視点とどっちが良かったですかね？

これからはだんだん戦闘描写だけになってくるので文章力が無い自分ではつまらなくなってくると思いますが、これからもよろしくお願いします。

テストがもうすぐあるので更新が一時止まります。休んでばっかでスイマセン。

感想、アドバイス、誤字指摘お願いします。

キャラクター、機体まだ募集中なのでそちらもお願いします。

第十一話「夜明けを導く者」(前書き)

次回くらいからようやくGジェネレーションのような多数対多数の戦闘がかけそうです。

この先出てくる機体に関しては所々で紹介していきます。

Gジェネオリジナル機体も使用するので、時間があれば調べておくと読みやすいかも知れません。

それでは、遅れながらも第十一話をどうぞ。

第十一話「夜明けを導く者」

アムロはガンダムパイロット達全員にガンダムを託した。

プロテガの開発には欠陥が見つかりさらに延長するとのことだ。

世界が、時代が、人間が滅びることを望んでいないとエティコラは言っていた。

だから、慶一たちがこの次元に遣って来たのだと。

たしかにそう思いたいが、アムロは敵のほうに此方より戦力的には上だろうと感じていた。

それは今までの次元の旅からも分かっている。

あれだけのCTCを次元に送り込めるほどの力があると言うことは、MSを大量に、しかも自動操縦であればなおさら敵のほうに圧倒的に有利だ。

だが、それは戦力なことだ、戦術的なことで考えれば此方にも分はある。

いくら手駒を揃えても、戦略的には脅威だが、性能とパイロットの技量をあわせて考えれば、戦術的にこちらが有利なのだ。

増援にこれるであろう部隊は、「ロンド・ベル」、「木星クロス・ボーン軍」、「リガ・ミリティア残存部隊」、「シャッフル連合」、「プリペンダー」、「フリーデンメンバー」、「地球圏統一軍」、「新生ディアナ・カウンター」、「国際連邦軍」、「ザフト軍」、「ソレスタルビーイング」、「地球連邦軍」、そして「異次元同盟軍」。

ロンド・ベルはブライトの権限で動かせるだろう。

木星クロス・ボーン軍はいわゆる木星軍のことであり、テテニス救出のためになら動くだろう。

リガ・ミリティア残存部隊は、今は戦力はほとんど無いが、此方から提供すれば動けるだろう。

シャッフル連合は戦争介入は原則禁止だが今回のような場合はおそらく大丈夫だろう。彼らは戦争の早期終結も仕事のうちだから。

プリペンダーもこの手のことが仕事なのだから協力してくれるだろう。

フリーデンメンバーのほとんどが今を平和に暮らしているのだ、協力してくれるだろうか。

地球圏統一軍は今ジャミル・ニートとランスロー・ダーウェルが指揮をしている。協力はおそらく望めるだろう。

新生ディアナ・カウンターも党首がキエル・ハイムだ。ディアナが
浚われたと知れば協力してくれるだろう。

国際連邦軍はオーブ主導で軍縮に向かっているが、カガリが狙われ
た以上協力してくれるだろう。

ザフト軍もラクスが狙われたからには動くだろう。

ソレスタルビーイングも刹那が動くといっていたので協力してくれ
るだろう。

地球連邦軍も何人が政府要人が浚われているようだから情報さえあ
れば動くだろう。

そして異次元から集結した、俺達異次元同盟軍、此方の戦力はこん
なものか。

良くまあ、これだけの戦力をかき集めたなと思う。

だがこれだけの戦力があってもやつらには戦力レベルでは勝てない
だろう。

これだけ集めてもまだ足りないと言うのだから悲しいことだ。

「シャアのことだ、おそらくこのための最終兵器なんてものを隠しているだろう。此方はほぼ準備は完了している、後は彼らがあの機体に耐えられるかどうか」

アムロは自分に与えられた部屋に戻った。

アムロはベットに横になって、少し考えにふけた。

「人間はこれまでいくつもの過ちを犯してきた、過去も、今もそして未来も、そうして人間は成長していく、どんなに時間がかかろうとも。」

人間に限界はあるのだろうか？

俺が ガンダムに乗り、アクシズを押し返そうとしたとき、俺とガンダムは限界を超えた、今思うと、あれこそが本当の人の心の光の力だったのだろう、限界を超え、奇跡を起こす力。

ガンダムにはそれを成し遂げる力があるのか？ 彼らに託したガンダムはそれを成し遂げれるだろうか？

……………信じるしかないか、それに、奇跡の一つや二つ起こせなければ全次元を救うなんて夢物語だな。

少し眠るか、戦いの始まりまで後14時間。 8、9時間くらいは寝れるな」

いっぽう此方はカウサデセのいるPMBプログラムのモビルスーツハンガー。

「よっしできた。おれの新たな機体、「バルバトス・デスペラシオン」の完成だ。ツヴァイはあいつにやるとして、他の機体は出来上がっているな。戦闘準備完了だ、後は責めてきたところを潰すだけだ」

カウサデセが発した言葉、新たな機体「バルバトス・デスペラシオン」いったいどんな機体なのか、その詳細は仲間にすら知らされることは無かった。

「たとえば奴等がどんな手を使って攻めてこようとこっちには切り札がちゃんと用意されているんだよ。この戦に勝利して、新たな世界を創造する。」

そうすれば誰も争うことはなくなる。人は管理されなければ生きていけない。奴が来る前に、なんとしても……………」

また視点は戻りエティコラ。

「やはり奴が進行してきたわね、でも今此方に対抗手段は無い。どうにかしてとめないと、でもその前に確定を成功できなきゃとめられない。」

奴が来たら世界は、いえ、全次元が崩壊する恐れもある。奴を止めるためにも何か手を……………このことにはカウサデセも気づいているのかしら？」

二人の言う奴とは何か、それが分かるのはこれからずっと先のこと。

アムロが起きた。

と言うことは8時間くらい立ったのだ。

「起きた？アムロ？」

部屋の通信用テレビにエティコラが写る。

「エティコラか、ああ、起きたぞ、準備は？」

「プロテガ以外完了。私の体もパイロット用のものに切り変えたわ」

「そうか」

「もしかして、緊張しているの？」

「何故そんなことを聞く、どうせならあの子供達に言ってやればいいじゃないか」

「そんなこと言わなくても大丈夫よ、私達があの子達の未来の夜明けを起こすんだから、あなたが緊張してたらまた暗闇に逆戻りじゃ

ないか、って思ったの」

「心配するな、それに闇が深くなるのは夜明け前が一番らしいじゃないか、今は暗いがすぐに明るくして見せるさ、俺達が」

「どんなに闇が深くてもその先には夜明けがある。か、その通りね」

「そうだ、さてと、行くか」

「ええ、行きましょう」

全てのガンダムを巻き込んだ異次元のGジェネレーションが真の始まりを迎える。

第十一話「夜明けを導く者」(後書き)

今回出てきた「バルバトス・デスペラシオン」バルバトスはソロモン72柱に登場する堕天使バルバトスより由来があり、ゲーム「SDガンダムGジェネレーションワールド」に初登場しラスボスを務めた火力厨の機体です。バルバトスの司る「絶望、残酷、無慈悲、悪意、苦難、損失」の「絶望」をスペイン語にしたものをくっつけました。

バルバトス詳細 フェニックスガンダムやハルファスガンダムの上位に位置する機体とされ、通常の人型形態である「MS・フォーム」高速巡航形態の「エンジェル・フォーム」収束砲撃用の「ピーコック・フォーム」広範囲砲撃用の「HALO・フォーム」等、目的に応じて様々な形態に変形することであらゆる戦況に対応できる万能性を持つ。主な武装は肩にある12門、腕に有る左右1門ずつ、両足のそれぞれ2門、MA形態の機首に有る2門のビーム砲で、ハイパーナノスキン装甲や高い移動力とも相まって非常に強力な機体となっている。ゲーム中ではジェネレーション・システムを守る最後の守護者として登場し、その圧倒的な性能を見せ付ける。

ピーコック・フォーム

高速巡航形態のエンジェル・フォームへ変形後、スラスター・両腕のビーム砲を全て展開し、そこから生じたエネルギーを全て先端部の二門の砲身に収束、それを一気に放出する。スラスタービーム砲を広げた姿は孔雀^{ピーコック}を思わせる。

HALO・フォーム

MS・フォームからスラスターのビーム砲を全て展開し、12門のビームを一斉に放つ。複雑な軌道を描きながら放たれる一斉砲撃は

命中率が高く、周りを囲まれた時にも自機を中心に周りに向けて放つ事も可能。

テウルギア・ゲートイア

ビームサーベルの柄のようなデバイスを目標に投擲後、そのデバイスをしながら避雷針のように利用してHALO・フォームからの一斉砲撃を行う本機の必殺技

できれば画像をお探しく下さい、口で説明できません。

感想等お待ちしております。

超精鋭部隊VS圧倒的多数（前書き）

今回は出撃と激突のワンシーンです。

遂に戦いの火蓋がきって落とされます。

今回こそは戦闘に入る予定です。

それでは第十二話をどうぞ

超精鋭部隊VS圧倒的多数

アムロがNガンダムに乗ってハンガーから出るとそこには数多くの戦艦が並んでいた。

世界にはまだ知られてはならないことなので、ここにいるもの全てが非公式に集まっている。

つまり全員極秘任務として集まってくれた。

にしてはかなりの数だ。

寝る前に確認した戦力はそこまで多い数ではないし、公式的に軍を動かせないとなると独立遊撃隊のような部隊しか動かないと踏んだが、正規軍も結構集まっている。

戦艦はそれぞれの次元で並べていくと、

ロンド・ベルは所持していたラー・カイラム、艦長はブライト・ノア、搭載機はカミーユの乗るアクセルZガンダム、ジュードの乗るZZZガンダム、ビーチャ、モンド、イーノが乗る3機のEX-S、リゼルを15機そしてアムロの乗るEX-ガンダムを搭載。

そして、ネエル・アーガマ改、艦長はオットー・ミタス。搭載機はバナージの乗るユニコーンガンダムエルシャンス、フルアーマーバンシィHWS（ヘビーウェポンシステム）装備型、リゼルを17機。

木星クロスボーン軍は、マザー・バンガード（木星仕様）艦長はオンモ、搭載機は手術を受け回復したトビアの乗るクロスボーンX1

ダブルクロスとヨナ、ハリソン、トウインク、ミノルの乗る量産型ガンダムF91。

リガミリティア残存部隊には、隠してあったホワイトアーク、艦長はマーヴェット・フィンガーハット、搭載機はウツソの乗るV3ガンダム、トマーシユの乗る量産型V2アサルトバスター。

シャッフル同盟にはロシアから最新鋭ゴルビー？、艦長ナスターシヤ・ザビコフ、搭載機はドモンの乗るマスターゴッドガンダム、サイシーのドラゴン、アルゴのボルト、ジョルジュのローズ、チボデーのマックスター、アレンビーのノーベル。

プリペンダーにはエティコラから、小型化し母艦能力を向上させたピースミリオ改、艦長はサリイ・ポウ、搭載機はヒイロの乗るカイザーウィングガンダムゼロ、カトルのサンドロック、五飛のアルトロン、デュオのデスサイズ、トロワのヘビーアームズ、ゼクスのトールギス？。

フリーデンメンバーには、統一軍のシンボル母艦フリーデン？の改強化型フリーデン？、艦長はサラ・タイレル、搭載機はガロードトリプルエックスの乗るガンダムTX、ジャミルのXディバイダー、ウィッツのエアマスターバースト、ロアヴィのレオパルドデストロイ、パーラのGファルコン、カリスのベルディゴ、エニルにエティコラより通常のパイロット用に調整したベルフェゴール、ランスローの専用クラウダ。

ディアナ・カウンターはソレイユ、艦長はキエル現ディアナ、搭載機はガンダムタイプ100、ハリーのスモーゴールドタイプ、スモールバータイプ20機。

国際連邦軍はアークエンジェル、艦長はマリユ・ラミアス、搭載機はアスランの乗るインフィニットジャスティスパライドイン、ムウのアカツキシラヌイ装備型、キサカの専用トツカ、親衛隊使用のトツカ11機。

ザフトはエターナル、艦長はアンドリユー・バルトフェルド、搭載機はキラの乗るストライクフリーダムブレイブ、イザークの乗る隊長専用ゲルググセイント、ディアッカの専用ブレイズザクファントム、シホのスラッシュザクファントム、ドムトルーパーズの3人、シンのデステイニー、ルナのインパルス。

ソレスタルビーイングはプトレマイオス？愛称はトレミー？、艦長はスメラギ・李・ノリエガ、搭載機は刹那とフェルトの乗るクアンタムライザー、ロツクオンのサバーニヤ、アレルヤとマリーのハルート、ティエリアのラファエル、沙慈とルイスの乗るジェネレーシヨンガンダムクアトロ。

地球連邦軍はマネキン隊ヴォルガ級航空巡洋艦、艦長はカティ・マネキン、搭載機はパトリック専用ブレイヴ正式採用型隊長機、他ブレイヴ正式採用型一般兵機5機、GN-X？を14機。

異次元同盟軍はキャリアベース、艦長はゼノン・デীগエル、搭載機はマーク・ギルダーにフェニックス、ラナロウ・シェイドのアストレAF？、エリス・クロードのザンスパイン、シエルド・フォーリーの重装フルアーマーガンダム7号機エネルギー機関強化型、エルフリーデ・シュルツのビギナ・ロナ武装強化型、レイチエル・ランサムのガンダムアクエリアス、シス・ミッドヴィルとカチュア・リスの量産型キュベレイ、慶一のザ・ワン、洋のサード、未完成だが私のプロテガ。

キャリア・ベース以外の各艦の先頭の機体の説明は後日。

フルアーマーバンシィHWS、フルアーマーバンシィに ガンダム
のHWSのミサイルポッドだけ搭載、ミサイルを撃ちつくした後、
ポッドをパージしなければ変形できない。

マザー・バンガード（木星使用）は元艦のデータを下に木星軍が開
発、能力にそこまで差は無い。

量産型V2、エティコラがV2のデータ道理に造り、機体の変化は
無い、しいて上げるなら完全武装になつたくらい。

ゴルビー？、ネオロシアが開発した新造艦、前期型と比べ高出力と
高火力を齎した、正し、少し巨大になった。

ピースミリオン改、小型化し、MS運搬を主眼に置いた形に再設計、
ただ小さくて内部の機材を取り除いただけのような形。

フリーデン？、フリーデン？を改修し、火力が上がった。エティコ
ラによりマイクロウェーブの送電ができるようになった。エネルギ
ーはカートリッジ式、を3発。

ベルフェゴール、リミッターを搭載し、暴走が無くなった機体。

トツカ、ムラサメを元に、IWSPのデータを掛け合わせ、ビーム
キャノンと折りたたみ式対艦刀を持ち、変形できる。

ゲルググセイント、隊長機用に作られた機体、ウィザード装備が可能、グフのようなジェットパックもある。ビームシールドとビームナギナタを一本装備、外見は白い初期ゲルググ。

トレミー？クアトロドライブのリンク能力を持ちワープ用のビットを持つ。外見はトレミー？と変わらない。

ジェネレーションガンダムクアトロ、外見はOガンダムにクロスボーンガンダムのバックパックをつけたような形、バックパックの先端にGNドライブを搭載。対話に特化した機体。

武装、腕部内臓GNビームサーベル両腕一本 GNビームライフル
*1 GNシールド*1 頭部実弾マシンガン GNフィールドドライブシステム

武装も自己防衛程度にしかついてない、ゆえにライザーソードのような攻撃ができない。トランザムは1から5まで使える、6はリミッターがかかっている。

GN粒子拡張流域はクアンタライザーやプロテガより格段に広い。

ブレイブ正式採用型、試験機と大差はない、肩部にGNシールド発生装置がついたくらい。隊長機はダブルドライブ。

GN-X？、GN-X？の強化版、脱出ポッドが標準化され、GNフィールド発生装置も搭載された、武器にドレイクハウリングが追加装備できるようになった。

重装フルアーマーガンダム7号機エネルギー機関強化型、ミノフスキードライブを搭載して高速戦闘を可能にした。

ビギナ・ロナ武装強化型右手のヴァリアブル・メガ・ランチャーに
ビームサーベル発生機能を追加。

これだけ集まると壮観な光景になる、ありとあらゆる次元の戦艦が
集結しているのだから。

まだ到着していない物もあるがかなりの数だ。

「さて行くか、ゲートオープン、目標、PMB公転区域」

PMBもCRMも惑星型演算処理システムであり、何を中心に公
転しているのか分からないが、とにかく公転している。

その区域に行こうとしている。

ついた先には、PMBがいなかった。

光学明細が何かで全体を隠しているのだろう。

アムロは本体を探そうと全員に連絡しようとしたとき、浮遊していた小惑星状のものから大量のガガが出てきた。

ラー・カイラムのオペレーターが数を報告してきた。

「推定機数.....約.....5万機」

ふざけた機体数だった。

もとより戦力で勝てる気はしていなかったがこの数は圧倒的だった。

「さて、此方はただか146機勝てる気がしないな」

アムロは通信を手に取り、「敵の数は推定でも5万いる、此方は146機、戦力的は絶望的だ、だけど引き下がるな、勝機は必ずある、全機出撃！！！」

その言葉とともに全艦が動いた。

リゼルやスモー、トツカにGN-Xのいくつかは艦の護衛についたが、60、70機くらい護衛に回したので前衛は80機足らずとなつてしまった。

「十分な数だ、乗り越えられるさ、ガンダムなら、人の心に光があるのなら」

沙慈とルイスにトランザム5を使ってPMBを探し出すように言って、オープンチャンネルを開いた。

「全期攻撃態勢、クアトロがPMBを探し出すのに時間がかかる可能性がある、全能力を持つて全てのガガを破壊しろ！！」

超火力機や戦艦がガガの大群に向けてビームを、ミサイルを、陽電子砲を、一斉砲撃をした。

その砲撃をかいくぐるようにガガたちがせまってくる。

超精鋭部隊VS圧倒的多数（後書き）

どうでしたでしょうか。

ガガ5万機つてやりすぎだろと考えてから思いましたが、コンだけ超精鋭部隊が集まってんならそんぐらいの敵は必要だろうと思いの数をぶち込みました。

「まだたりねーぞ！！」と思う方がいましたらお申し付けください。これからの展開の参考にしたいと思います。

主人公勢のオリジナル機体は後日紹介していきますのでお待ちください。

感想アドバイスなどお待ちしております。

第十二話「決戦第一幕く特攻の神風と黒い不死鳥」(前書き)

今回は本格的な戦闘に入りたいと思います。

圧倒的多数の敵との戦いは〇〇の最終決戦を参考にしています。

いろんな機体が所かまわずぶっ放しまくるので原作知識か、機体の知識がないと読みずらいかもしれません。

では第十二話をどうぞ。

第十二話「決戦第一幕く特攻の神風と黒い不死鳥」

5万機のカガに向かっていく砲撃、それをかいくぐるカガ。

まるで踊るように掻い潜ってくる。

しかし此方もMSの数は3個艦隊に匹敵する数だ、あたらないことは無い。

しかしさすがに抜けてくる機体はある。

「くるぞ、全員近接戦に備えろ！！」

アムロの声が全員に伝わる。

その時後ろに待機しているクアトロが緑色に輝く。

「トランザム5！！クアンタムギガバースト！！！」

トランザム5から発生する超高濃度粒子拡張領域がこの次元全体に広がるうとしている。

この力を使い、人質とされている者達の脳量子波を、沙慈とルイスの力で感じ取り、見つけ出そうとしている。

そして可能ならカガの連携を乱させることができれば此方に有利、何より此方の連携能力が向上する。

しかし、カガの動きは乱れない。

予測していたことだが、これで5万機のガガを自分達で破壊せざるを得なくなった。

スメラギの指示が流れる。

「此処までは想定済みよ、リディ君！トマーシュ君！トロワ君！ロアビー君！ロックオン！シールド君！先行してガガを薙ぎ払って！」

「了解した、バンシイ、ミサイルハッチ開放！！」 「分かりました、行くぞV2！！」 「任務了解、排除する！！」 「さあて、いっちょ派手に行きますか！！」 「了解した、全力で乱れ打つ！！」 「了解しました、頼むぞガンダム！！」

バンシイの全身のミサイルとビームマグナム、V2の大量に装備されたビームキャノン、形の似ているヘビーアームズとレオパル

ドの一斉発射、サバーニヤの全ビットによる一斉射撃、7号機による長距離砲撃が、ガガの舐先を集中攻撃していく。

これだけの砲撃を受けたため、かなりの数が減ったが、まだ4万機以上が健在だ。

エティコラがキャリー・ベースから指示を出す。

「ラー・カイルム、ネエル・アーガマ、ソレイユ、アークエンジェル、トレミー3はメガ粒子砲、陽電子砲、GNキャノンで中心区域を攻撃、EX-S隊はスマートガンで右翼を、ティエリアはビックキャノンを左翼に、マークはメガビームキャノン、キュベレイ2

機はファンネルで抜けてきた奴を撃て、それが終了しだい、全機で敵MSハンガーに攻撃をかける!!」

そして一気にガガが消滅させられていく。

マネキン少将の指揮が伝わる。

「高速戦闘が可能な機体は先行しろ、ブレイヴ部隊はトライパニッシャーで活路を開け、羽根つきは先行して敵の数を減らせ。ザンスパイは光の翼を使い接近しろ、デステイニー、君が先陣を切れ!!」

「わかりましたよ大佐あ、ブレイヴ隊、俺に続けええ!!全機つ、フルブラストだ!!」「了解!!」「了解した、ピース行くよ!!トランザム!!」「分かったわ、機体制御は任せて!!」「了解しました、行くぞ!!こんなことつ、もう終わらせるんだああああ!!!!」

ブレイブの強力なトライパニッシャーによりかなりの数が減り、そこをザンスパイ、ハルルト、デステイニーが突っ切り、切り刻んでいく。

そんな時、ネエル・アーガマから凶報が伝わる。

「敵MSハンガーよりさらに機影、データ称号……………これは、レギナです!!総数、約2千機!!」

ブライトの声が響く。

「リゼル、シルバースモー、トツカ、GN-Xは艦隊の護衛につけ。スモー部隊はエフィールドの集中形成体勢に入れ。やつらの砲撃は

確実に防御しろ!!」

スモーク部隊は集まり、それぞれのエフィールドジェネレーターをフル稼働させ巨大なエフィールドを形成する。

レギナの砲撃は間一髪で防ぐことができた。

マリユーの声が聞こえてくる。

「全機レギナに対して格闘戦用意、ガガの対処を怠ることなくレギナの接近に備えよ」

レギナもマリユーの予測通り扇子上のビームファンを構えて接近してくる。

ジュードが機体をレギナたちに向ける。

「ハイメガキャノンでぶっ飛ばしてやらあ、行くぜええ!!」

ガロードがフリーデンに通信を入れる。

「サラ、マイクロウェーブの照射を頼む、やつらを吹き飛ばす」

ヒロがバスターライフルを構える。

「任務了解、敵機の殲滅を行う」

キラがドラグーンと武装を全て展開する。

「皆をやらせるわけには行かない、全て、此处で討つ!!」

刹那がフェルトに指示を出す。

「フェルト、バスターライフルモードに切り替える、粒子調整を頼む」「分かったわ……調整完了、出力OK」

「ツインハイメガカノン!!」「デルタサテライトキャノン!!」

「ロングバスターライフル、目標を、破壊する!!」

「全機ロックオン、アタレエエエエ!!」「トランザム2、ツインライザーキャノン!!」

エティコラたちが作ったガンダムの一斉砲火がレギナをことごとく吹き飛ばし、その数を数百にまで減らした。

アムロがジュードーたちに近づいて通信を入れた。

「あまり強力な砲撃は使うな、諸刃の剣でもあるのだからな。お前達が戦闘不能になるわけにいかんだろう」

人質を助けていない手前、此处で戦闘不能になるわけにはいかない、その通りだった。

そして戦いが続く中、沙慈とルイスは人質となったものたちを探していたとき、遂に見つけた。

「いた此处はどこだ……」「この座標はまさか……」

その座標とは。

「敵のMSハンガー内部、此処を突破しなきゃどうしようもない」
「すぐにスメラギさんに連絡を」

二人はスメラギにこのことを伝えたとスメラギは戦術を考え始めた。

「なら、突撃能力の高いシャッフル同盟の方達に連絡を」「はいですう。シャッフル同盟の皆さん聞こえますかあ？」

そして作戦が伝えられる。

「了解した、行くぞ皆！！」メンバー全員が「オウ！！！！」

5人はハイパーモードとなつて、レギナやガガの隙間を突き抜ける。

作戦は、シャッフル同盟のMFの機動力と白兵戦能力の高さを利用しようと言うものである。五人を先行させ、その後ろに機動力

の高い機体をつけ、接近してくるガガたちを排除しつつ近づこうと言うい当たってシンプルだが効率的なやり方である。

さらに、クアトロのクアンタムギガバーストにより連携能力が向上しているのでさらにやり易い作戦となった。

「ドモン、ハンガー表面にシールドを確認しました」「このままじや潜入できねえーぜ」「人質のいない場所をピンポイントで破壊して進入するぞ、データをくれ」

そしてMSハンガー内のスキャン映像がくる。

「俺は夢、俺は希望、俺はこの手で掴む、豪ねえええつ、マシンガ

トビアは元々防御力の高いX-1に乗っているので先行した。

そのころ外部でも戦闘は続いていた。

「天に竹林、地に少林寺、目に物見せよう、最終秘伝！！真 流星
胡蝶剣！！」

「くらえ！！炸裂、ガイア・クラッシャアアアアアアアアアア！！」

流星胡蝶剣が切り裂き、ガイア・クラッシャーが敵を殴り飛ばす。

シャッフル同盟が奮闘していた。

4機が進んでいく途中にてきMSが現れた。

それは多数の次元の機体であり、ガザD、ギラ・ドーガ、リゲ・シャッコー、ビルゴ？、クラウド、マヒロー、GN-X？。

良く此処まで集めたな、と、ほめてやりたいくらいの機体のバリエーションだった。

しかし、愛するものを守るといふ思いに裏打ちされた強さを持つものに、心無き木偶人形が勝てるはずも無い。

「心無き拳で、俺を止めれるものかあああああ！！！！」格闘で迫りくる機体をなぎ倒していく。

「邪魔をするのなら、排除する！！」高速で動き回り、確実に敵を

切り伏せていく。

「邪魔だあああ！！、どけええええええ！！」両手に持った大剣でMSを切断していく。

「ホワイトドールよ、ディアナ様を守る力を！！」両手に持ったビームサーベルがMSを紙のごとく輪切りにしていく。

かなり奥までたどり着くと、スキャン映像では確認できなかったが、通路は？がついていたのだ。

その扉を開けると浚われた5名が居た。

「レイン、シグレ、大丈夫か！！」

「リリーナ無事か？」

「テテニス、どこも怪我とかしてないか？」

「ディアナ様、無事ですか？何も無かったですか？」

浚われた5名は外傷も何も無く健全だった。

4人とも一安心するとそれぞれ連れ出し自分の艦へと戻っていった。

カウサデセは、

「ふん、人質は取り返せたか、先ず先ずな成績だな。ソロソロ出番かな『ハルファスガンダム』そして『ジエネレーションガンダム ツヴァイ』さあ、第二局面開始と行こうか」

ガンダムが戦っている次元に、さらに新しいMSハンガーが光学明細をとりて出現した。

「此処に来てさらに新しいハンガーだと!!」

「カウサデセめ、いったいどれだけの戦力を保有しているのだ……」

アムロもエティコラも驚きを禁じ得なかった。

ハンガーから出てきたのはハルファスガンダム、フェニックスガンダムの後継機型のガンダムだ。

そしてジエネレーションガンダム ツヴァイ。

そしてさらに『フェニックスゼロ』までもが千機近く出撃してくる。

「マークさん、ハルファスガンダムが来ました、対処お願いします」

「了解した、遊びじゃねーんだ、本気でいくぜ、物まね野郎」

フェニックスガンダムはバーニアを吹かしてハルファスへと向かっていった。

慶一の下に麗華から通信が来る。

「ツヴァイが出てきたわ、十分警戒して」

「分かってる、あの時は取り逃がしたが今回は」

その時、頭の中に何かの映像が流れてくる。

酷い頭痛、何度も感じたことのある感覚。

そう、未来が、いや支流の出来事が見えたときの感覚だ。

『畜生、お前のことを、救えねえで終わるのかよ、明^{あき}……………」

何のことが分からないがいやな感じがした。

それは麗華も同じで、似たような幻覚を見ていたようだ。

『嘘でしょ？……………ねえ、答えてよ！！け……………」

言いよの無い不安が襲っていた。

「慶、ちゃんと生きて帰ってきてよ。お願いだからね？」

麗華の表情は真剣だったが目には不安の色が隠せない。

「分かってるさ、俺もまだ生きたりねえんだからよ」

その言葉を麗華が聞いたとき、少しだけ、不安が薄れていた。

だが、あの頭の中に流れてきた映像のワンシーン、そのなかで、慶

「は額から血を流していた。」

「死んでたまるか！！俺は他人のせいで死ぬ気はねえ！！」

ザ・ワンはGN粒子を輝かせながらツヴァイの元に向かった。

第十二話「決戦第一幕く特攻の神風と黒い不死鳥」(後書き)

どうでしたか、さらに敵の機体数を増やしてみましたか。

フェニックスゼロは、フェニックスガンダムの試作機で、ナノスキ
ン装甲を装備しておらず、頭部はVアンテナが無く、フェザーファ
ンネルも無い、といったような形のMSです。

主人公勢のガンダムについては、本格的戦闘が始まる前に説明いた
します。

感想などお待ちしております。

第十三話「決戦第二幕く更なる敵と驚きの増援く」（前書き）

今回でようやく皆さんに送っていただいた機体を登場させることができます。

感想やメッセージボックスにあった物を全て出したいと思います。

送って頂いた方々の期待にこたえられるようにがんばりたいと思います。

それでは第十三話をどうぞ。

第十三話「決戦第二幕く更なる敵と驚きの増援く」

ハンガーから出てきたハルファスガンダムとジェネレーションガンダム ツヴァイ、そしてフェニックスゼロ。

かなり厄介な敵だ。

それに、おそらく後続にはまだ控えがいることだろう。

フェニックスゼロに装備されているメガビームキャノンはフェニックスガンダムほど威力は無いが、その数が問題だ。

フェニックスガンダムの試作型と言うだけあってその高起動は侮れない。

ハルファスにはマークの乗るフェニックスが、ツヴァイには慶一のザ・ワンが向かっている。

両者とも性能的には互角だろう。

問題はパイロットの技量、その差が勝敗を決めるだろう。

まだガガも2万機くらいは残っている、一般兵たちが確実に片付けているおかげでエースたちの負担は少ない。

十分ハルファスたちに集中できる。

マークはハルファスに高速で接近する。

「さあ、決めるぜ木偶人形」

ビームサーベルを抜き、切りかかる。

「さあ、パイロットは誰だ！！声を聞かせやがれ！！」

2機のビームサーベルが競り合う。

「フェニックスガンダム確認、排除対象、ターゲットロック、処理します」

聞きたくなかった電子音声、紛れも無い、これは。

「こいつはハルファス・ニューロだ！！」

ニューロ、それは別次元のジェネレーションシステムが開発した人口知能、学習能力が高く、他を圧倒する操縦技術を持ち、超高速処理能力を誇る、そのハルファス専用のニューロなのだ。

「何チンタラやってんだマーク、一気に決めるぜ！！」

ラナウドが痺れを切らしたのか、アストレアF？がGNビームサーベルを両手に持ち、切りかかる。

「今までのウォーミングアップだ、行くぜ！！ファンネル！！」

12機のフェンネルと2機のライフルやアストレアのGNガトリングガンがハルファスに向かう。

ハルファスは三次元的な回転をしながらビームを回避しながら此方

に攻撃してくる。

「ファンネル射出、敵機の破壊優先目標A、フェニックスガンダムB、アストレアFタイプ」

ハルファスのファンネルの操作時はかなりの繊細さを持ちながらも的確に回避し、尚且つ此方に当ててくる。

フェニックスはシールドがない分なのスキン装甲で回復するが、時間がかかる。

アストレアはシールドがあるので問題は無い。

しかし、この強さは厄介だった。

「くっ、速い、このままでは押し負ける。何か逆転の手は………」

そして此方はどこか別次元。

「全員乗艦したな、これより本艦は異次元同盟軍の増援部隊として派遣される、ドミニオン、発進!!」

その声は、ナタル・バジールのもだった。

エティコラの当とはナタルのことだった。

別の次元で死亡している彼女でも、どこかの次元なら生存している。何より、エティコラは増援部隊としてくる予定のパイロット達の迎えを彼女に頼んでおいたのだ。

「艦長、まもなく次元移動を終了します、転移先の次元データ表示します」

中央パネルに映し出された映像から次の手を考える。

「ローエン格林1番、2番用意、異次元到着と同時に敵MSハンガーに向け両門同時攻撃を仕掛ける、砲撃終了と同時にMSを発進させる。三人とも体は大丈夫か？」

オルガが答える。

「大丈夫ですよ、エティコラの治療のおかげで薬は要らなくなりましたからね」

クロトが続く。

「僕なんて元気すぎるくらいだよ、彼女には恩があるからね、恩返しはするさ」

シャニも珍しく会話に入る。

「……………いけます、やれます、皆、助ける……………」

この3人は、初期段階のブーステッドマンで、定期的な投薬が無い

と強烈な激痛と精神錯乱に陥るのだが、エティコラの細胞再生手術のおかげで投薬がなくなかった。

「それだけやる気があるのなら問題は無いな、後数分で次元を超える、準備しろ」

「了解！！！！」

そして次元を抜けると。

「ローエン格林、撃てええええええ！！！！」

陽電子砲2門がフェニックスゼロを貫き、MSハンガーに直撃する。

「続いてアストレイレッドフレーム、ブルーフレーム、ゴールドフレーム、ミラージュフレーム、トライア、インペラトル、D4、イダテン、全機発進せよ！！」

レッドフレームはタクティカルアームズ？ローエン格林ランチャー装備型でクロトが乗っていて、ブルーフレームはセカンドL.L.Lでオルガが乗っていて、ゴールドフレームは天ミナでシャニが乗っている、ミラージュフレームには別次元のアムロのとベルトーチカの息子のゼクス・レイが、トライアにはトリエが、インペラトルにはノーマが、D4にはウルトラマンノアが転移させたイーヴィルティガ基影山 一輝が乗り、イダテンにはC.E135年の世界から来たハイネ・アークヴェルスが乗り、フェニックスゼロの大群へと向かっていく。

エティコラはホッとした感じで、

「ようやく来たか、まったく遅いわね、しかし奇襲は成功、今ので

ツヴァイも吹き飛んでくれたら良かったんだけど早々うまく行かないわね。プロテガはまだ完成には時間がかかるし、慶一、頼んだわよ」

ツヴァイにザ・ワンが急接近した。

「もらったあああああ！！」

GNソード？を振りぬく。

だが、ツヴァイは驚異的な速さ左腰のビームサーベルを抜刀の要領で抜き、GNソードを防ぐ。

「その機体は元はマークに渡す予定だったんだ。返せとは言わねえ、ぶっ壊れる！！」

ザ・ワンはドラグーンを展開する。

ツヴァイは後方に回転しながらドラグーンの砲撃を避けて行く。

それにザ・ワンが突きを打ち込む。

それも、ツヴァイはビームサーベルの横なぎで振り払う。

そして、背中のバスターライフルの威力を絞り、左手に持ち、ビームを放つ。

ザ・ワンは左手のシールドで防ぎ、GNソードをライフルモードに変え、バスターライフルモードにしながら砲撃する。

ツヴァイはそれをデИБライダーのビームシールドにて防ぎ、そのまま、デИБライダーをハモニカモードに変形させ砲撃する。

ザ・ワンはコクピットに来るものはシールドで、その他の箇所はハイパードラグーンのビームシールド機能で防ぐ。

「やるな、けどこれがMDによる操作だとは思えない、まさか、誰かが乗ってるなんてことは……………それに新型ゼロシステム、CRMエプログラムとの繋がりが切れているとは言っても、PMBプログラムに繋がられていれば結局同じことだ、このままじゃ勝ち目がねえ」

その時、慶一の頭に痛みが走る。

「があっ！！くそお、こんな、時に、あうぐうつ！！」

必死で目を開けてツヴァイの攻撃を避けていく。

「ちいいっ！！未来^{みらい}を見せるなら、もっと頭痛のしねえようにしろよ！！」

今慶一は脳に流れてくる膨大な支流の情報を処理しながら戦っている。

つまり、慶一自身がゼロシステムのような状態にある。

だが、鋭く走る頭痛、全身を襲う痛み、腸をえぐられるかのような吐き気、はつきり言って非常に危険だ。

「こんなことで……………終われるかああああああああああああああああああ……………」

ドラグーンと手に持ったライフルを構え、フルバーストの体勢になり、一斉掃射する。

「敵機砲撃、対処する」

ツヴァイはウィングバイダーをシールド状にしてビームのエネルギーを放出、此方の攻撃を防いだ。

「敵機砲撃停止、破壊する。右腕部、ナックルガード展開、爆熱ゴッドフィンガー、発動」

その電子音のような声は慶一には聞こえてない、だが、見てれば分かる、敵がゴッドフィンガーを使おうとしているのが。

「やらせるかよ、フォトムウ！！ソードビット！！」

旋回していたフォトムウと左腕のソードビットを射出、ツヴァイに向けさせる。

ツヴァイはその7つの斬撃武器をかくぐり、ザ・ワンに接近する。

おそらくこの攻撃を抑える手段はザ・ワンの今使える武装には無い、そして今慶一は頭痛による反射能力の低下で追いきれてない。

「此処までかよー!!」

だがその思考を遮る様にビームがツヴァイに迫る。

ツヴァイはそれを回避して、その砲撃者を見つめていた。

「ようつ、慶一、随分と苦戦してるじゃないか」

「洋さん、遅いですよ」

「こいつが重いんだよ、それにサードはジェネレーションガンダムの中じゃ1番足が遅いんだぜ」

「とにかくこいつを片付けましょう、ドラグーン!!」

「話フッタのそっちだぜ、たくつ、仕方がねえ、いくぜ、ファンネル!!」

2機はお互いの遠隔操作兵器を使いながらツヴァイを近接武器で攻撃する。

距離をとれば強力無比な砲撃を撃ちかねない、サテライトキャノンもバスターライフルもほとんどチャージ時間をなくして瞬時発射が出来る様になってもいるから、距離をとりすぎるのは危険なのだ。

ザ・ワンは両足のビームサーベルとノイシュペールラケルタを使いながら、サードは両手に持ったムラマサブラスター改を使い、切り掛かりながらも遠隔誘導兵器による砲撃も行っている。

「敵機の戦闘能力上昇、ゴッドフィンガーソード、システム開放」

ツヴァイはゴッドフィンガー対応ビームサーベルを抜く。

「エネルギー充電開始……………完了、勇気と絶望と憎しみの、ゴッドフィンガーソード、展開」

右腕を振りかざし、2機にめがけて振り下ろす。

2機ともよけたがツヴァイはさらにそれを振り回し迫ってくる。

「シャイニングフィンガーソードとは桁違いってか、派手に振り回しすぎだろ!!」

ライフルモードのGNソード?を撃つがディバイダー型シールドに防がれる。

「愚痴つてもしょうがねえ、喰らいやがれ!!」

トリプルビームライフルで攻撃するもよけられる。

ならばとばかりにフォトムウをツヴァイの後ろに旋回させフォルテイスを放つ、が、ゼロシステムを搭載している恩恵か、当たらない。

そこに追い討ちのようにゴッドフィンガーソードが迫る。

「トランザム!!ライザーソオオオオオド!!!!」

トランザムとなったザ・ワンがソードビットを集結、ライザーソードで立ち向かう。

2本の体験がぶつかり合ったとき、強大な衝撃波が発生した。

そして、慶一の脳にまた映像が流れてくる。

『なんでだ、何でお前がそこいるんだ！！答える！！明仁！！』
あきひと

その名は、この次元に来る前、そう、テロの発生前、バスに乗っていたとき、隣にいた半対人恐怖症の自分が話すことの出来た唯一無二と言っている友人、はまき「浜木 あきひと明仁」だった。

明仁がいる場所は見えていたのだが、慶一には頭痛のせいで集中できず、どこにいるのかははっきりと見えなかった。

カウサデセは、この戦いを見ていてほくそ笑んでいた。

「さて、この戦いどっちが勝つか、この先の展開が左右される戦いになるだろうな、さて、こいつも完成したし、出すか。俺が出るのは何時位になりそうかな？」

その後ろには、ガンダム史上最強の鉄球が鎮座していた。

アストレイ系、トライア、インペラトールに関してはウィキ先生のほうが早くて確実ですのでそれを診てください。

D4「光を継ぐ者」様よりお貸しいただいた機体。

姿 シャア専用の塗装をしたバンシィが肘から先の部分と肩部がデステイニー、背中のバックパックがリボーンズ、胸部がキャスバル専用ガンダムになっている。GNシールドビットを8基大型フィンファンゲの隣に各2基搭載。

イダテン 「ホッキョクグマ」様よりお貸しいただきました機体。

機体番号 EDE-G20W

武装 ・ビーム・ライフル

・ビーム・サーベル

・カリドウス複合ビーム砲【これはストフリと同じ腹部のビームです】

・シールド

・アムフォルトスプラズマ収束ビーム砲【セイバーと同じ物】

機体説明 ○変形機構を持つ機体。また、大型の翼を持っており、空中戦は得意。動力には普通のバッテリーを用いている。基本的にオールラウンドのMSである。しかし、水中だけは出来ない。オーブの新型機でありセイバーのデータに基づいて製作された。

第十三話「決戦第二幕く更なる敵と驚きの増援く」（後書き）

今回登場したナタルさん達、これはゲーム「SDガンダムGジェネレーションDS」のアナザールートに基づいて出来た設定です。ナタルさんや旧連合三馬鹿が丸くなって生きているというルートです。ゲームでご確認を。

そしてそこに出てきたオリキャラ、トリエとノーマ、二人の機体は姉妹機であり、月光蝶のデータを使い製作されているので事故修復やナノマシン散布などの能力を持つ超高性能MSです。

上記は「サナレイド」様の発案で出演が決定しました。

影山 一輝、ゼクス・レイは此方も「光を継ぐ者」様よりいただいた案で影山はイーヴィルティガの人間形態、ゼクス・レイは本文の通り、小説版のベルトーチカとの子供です。

ハイン・アークヴェルスは「ホツキョクグマ」様よりいただいた案で、コーディネイター、基本的にはおとなしいが、いざとなると鬼神の如き戦いをする。また彼女がいる。SEED能力を有してる。

最後の鉄球、分かる人にはわかります。何でしょうか？

説明して欲しいところがありましたら連絡をください。

感想等お待ちしております。

第十四話「決戦第三幕く降臨の鉄球と聖誕せし守護神」(前書き)

今回は知る人ぞ知る最強の鉄球が降臨します。トンでもない攻撃を繰り出すあの機体、分かる人は何人居るでしょうかね？

戦闘はまだまだ中盤です、これからもどんどん激しくなっていきます。

それでは第十四話をどうぞ。

第十四話「決戦第三幕＜降臨の鉄球と聖誕せし守護神＞」

此処はカウサデセのMSハンガー。

「さてと此方の戦力もこのMAたちとあいつらのMSと俺のバルバトスだけか、結構削られたな。俺達が出るにはまだ局面が早い、さあて、頼むぜ、最強と名高いMAの出撃だ」

一方此方はキャリー・ベースMSデッキ。

「後は、こいつを繋げてつと、完成したー!!」『ジェネレーションダム プロテガ』、いやあ長かったなあ、おっと、エティコラに連絡しなきゃ」

プロテガ完成の報は、エティコラに通達されると、「分かった、すぐにそっちに行くわ」

エティコラはデッキにいく前に、すでにパイロットスーツを着込んで向かった。

ニムロッドはデッキで最終調整に取り掛かっていた。

「エティコラ、後はこのOSをアンタ用に調節すれば完成だよ」

そして数分後、「OS調整完了つと、稼動実験は出来てないからね、

やばいと思ったらすぐに引き返しなよ。全武装はシュミレーションじゃうまく行っただけど実戦は分からない。気をつけてきな」

「ニムロッド、ありがとね、心配せずとも大丈夫よ、戦っているのは私達だけじゃないもの」

プロテガがキャリー・ベースのカタパルトに乗る。

「カタパルト固定、進路クリア、エティコラさん、慶をお願いします、射出タイミングをパイロットに譲渡します」

「了解、大丈夫よ、あの子達は強いし、何より彼は死んで大儀を全うするなんて性格じゃないもの。さて、エティコラ、ジェネレーションガンダム プロテガ、発進する！！」

カタパルトからプロテガが飛び出す。

「ゼノン艦長、メガ粒子砲によるバックアップお願い、いざと言うときは“アレ”を使ってください」

「いいんですかい！？、あの破壊力はメサイアだって一撃で吹き飛ばす、それを使おうってんですか！？」

「いざと言うときは、使う機会が無ければ嬉しいに越したことはありませんから」

「分かりました、けれども、そんな機会、造らないで下さいよ」

「了解したわ。尽力つくすから」

そういつてプロテガは戦場のど真ん中に向かっていった。

此方はハンガー、あの黒い鉄球が放たれて数分、沈黙していたそれが動き出した。

その後ろには巨大な何かも居たが、異次元同盟軍からは見えておらず、動いている物とそうでないものが居る。

シルエットだけで言うなら、

1体は台形、に近いが少し丸みを帯びている、そして台形の下のほうに赤い目のようなものが見える。

もう1体は天使のような左右対称の羽の形があり、羽のようなもの間には突起が見える。

もう1体は2本の足ののようなものに円盤が乗っており、頂点部に二つ突起物がある。

もう1体は戦闘機のようなフォルムだが、上部から見ると、先端に向かって二つの鋭利な武器のようなものが出ている。

隣に小さいものも幾つか居たがシルエットでは良く分らない。

このぐらいしか分らないだろう。

そして、黒い悪魔の鉄球は少しずつ、戦場に近づいてくる。

その存在を感じたのは、シスとカチュアだった。

「なに、このいやな感じ、トンでもない奴が迫ってる？」

「嫌々感覚だね、こんなのリグ・リングや、テラスオーノと戦ったとき以来だよ」

リグ・リングもテラスオーノもどちらも、特殊な波長で人間の精神に攻撃を仕掛け、その戦闘能力を削ぐ事を目的に作られたMSとMAである。

しかし、今回の敵は別に特殊な波長を発している訳じゃない。

つまり、これらの特殊な波長を出すMS達並に戦意を削り取るような、物理的能力を持った機体が近づいているということだ。

「攻撃目標確認、キャリア・ベース補足、攻撃開始」

黒い鉄球は腕(?)の拡散ビーム砲の砲身を開いて、掃射する。

その砲撃に気づいたエリスはザンスパイの光の翼を広げ、ビームシールド状にして防ぐ。

エリスはその砲撃してきた敵に目をやる。

「何アレ?なんか見覚えある気がするんだけど.....」

「.....」
シエルドも相槌を打つように答える。

「僕も見た覚えが………あつー！、お、思い出した、黒い悪魔！ー！」

エルフリーデも答える。

「ようやく思い出したか、貴公らはどれだけ平和ボケしているのだ」
レイチエルも思い出した口調でしゃべる。

「で、ですがあいつが居るなんて………あんな悪魔が………」

シスとカチュアは分からない様子だった。

「悪魔？何それ？」 「私にも分かるように説明してー」

エリスがその質問に答えた。

「あいつはあなた達が参加する前、マークさんとラナロウさんがやつとの思いで倒した敵です。バルバトスと同等、いやもしかしたらあの時は私達の仲間が大勢居たから勝てたけど、バルバトス以上の性能を持つてるかもしれない奴………」

4人が口をそろえた。

「
「
「
「
サイコロ
」
「
「
「

彼女達は此処とは違う次元で旅をしながら戦ってきた。

そんな時出会ったのがこの『サイコハロ』、MDの暴走で実験場を破壊し、通りかかった彼女達をいきなり攻撃した。

運よくそのときは、別次元のドモン・カッシュや、キラ・ヤマトのようなエースパイロット、マークとラナロウも居たため勝つことが出来た。

しかし今回は自分達しかない。

模造品ならオリジナルより若干性能の劣るところがあるかもしれないが、基本的なスペックが怪物級のMAなので、勝つ見込みが薄い。

そして近づいてきたサイコハロはその腕(?)を伸ばし、内部の拡散ビーム砲を放つ。

幸いキャリー・ベースは戦闘している場所から離れたので6体は回避する。

「こんの〜〜、くらっちゃえ〜〜〜!!」 「当てる、ファンネル!!」

カチュアとシスは自機のファンネルを飛ばしてサイコハロを攻撃する。

「二人とも無駄だ、そいつにビームは」

シエルドが止めたが放たれていた。

そして二人は驚愕しただろう。

サイコハロはエフィールドを装備している。

ビームは全てはじかれ、逆にサイコハロは、サイコハロを極小化したようなビット、『ハロビット』を頭部の開閉する耳のようなものの中から飛ばしてきた。

さらに両手（？）の鉄球状のものからはドリルを出して、腕を伸ばして攻撃してくる。

ハロビットは射撃こそ出来ないものの、一個一個が強力な弾丸、否、流星のように降り注ぎ攻撃する。

しかもその数は10個20個どころじゃない、100以上のハロビットが6機に降り注ぐ。

さらにドリルも迫り、時折収納して拡散ビームを発射していて、さらにはサイコハロ自身が高速回転して突撃してきたりもする、何せ装甲の硬さも尋常じゃない、コイツその物も隕石のようである。

これこそがこの機体を最強と言わしめた理由である。

「くっ、このままでは埒があかん。私が先行する、貴公らはビットと腕を頼む、至近距離ならこのヴァリアブル・メガ・ランチャーも通用するはずだ――！」

「分かりました、私のザンスパインの光の翼ならハロドリルも切り裂けます、シエルド君、援護お願い！！」

「了解です、でも射線軸に入らないで下さいよ。当たっても責任とりませんから！！」

「シス、カチュア、私達でハロビットを落とすわよ、アレにはイーールドは無い、撃ちまくって！！」

「了解しました、行け！ファンネル！！」 「了解……ファンネル！！！！」

ビギナ・ロナとザンスパインがサイコハロに突撃する、その後ろでは大型のビームキャノンと腰のレールガンを連射する7号機、ハロビットはアクエリアスのドーバーガン、キュベレイはファンネルにアクティブカノンを使いハロビットを撃ち落とす。

しかし、サイコハロが最強足りえるのは攻撃力と防御力だけじゃない、その機動力も侮れない。

3機の追撃をかわしながら確実に命中コースにハロビットをぶつけて来る。

ランチャービームサーベルとビームファン、ビームサーベルを使いながらかわして行くも、さすがに抑えきれない。

「くっ、ティンクル・ビット！！行って！！」

ザンスパインは切り札のティンクル・ビットを射出、これとビーム

ストリングやビームファンを使いながらハロビットを切り落とす。

7号機も手に持ったのビームライフルやビームサーベルも使ってサイコハロに肉薄するも、ハロビットやその驚異的な機動力に今一步届かない。

「ショットランサーの間合いまで持ってこれれば……………」

……」

しかし、それはサイコハロにギリギリまで接近しなければ打ち込めない。

膠着状態が続く中、1機のガンダムの蹴りがサイコハロに一撃を入れた。

「今のは……いったい誰が!？」

一方此方は旧連合三馬鹿「……誰が三馬鹿だ!……!」(#。)(ゴ
ルア!……!」

……………オルガ、シャニ、クロトそれに、トリエとノーマはハンガーに向かっていた。

トリエとノーマは不思議そうに、「誰と話しているの?」

「……気にするな」

ともかく5人はハンガーに向かって攻撃を仕掛けようとしていた。

そこには巨大な天使のようなMSが立ち塞がった。

「へっ、まさかコイツのお出ましか」　オルガは苦笑いを浮かべ、

「まあ、僕にかかれば瞬殺だね」　クロトは余裕そうに、

「……………壊していいよね？」　シャニは鋭く睨み付けた。

そこに聳え立つのは『デイベニダド』。

木星帝国との決戦で苦しめられたクラックス・ドウガチの切り札となった核攻撃想定MAである。

しかもこのMAの生産形態は『対地球殲滅機』というほどの火力を持っている。

5人ともこのMAには苦戦を強いられ、オルガ、シャニ、クロトの3人はそれぞれの機体を失う羽目になってしまった。

三人にとっては因縁の相手といっても良い。

デイベニダドは頭部にある超大型メガ粒子砲を5体に向けて発射する。

5体はそれをかわすと、ゴールドフレームはトリケロスで、レッドフレームはタクティカルアームズアローモードで、ブルーフレームはタクティカルアームガトリングモードで、トライアとインペラトールはランチャー・ジェミナスを用いて攻撃する。

ディビニダド自体が巨大な核ミサイルといって良いほどの原子炉と核ミサイルを積んでいるので、一撃一撃が奴にとっては致命傷足りえる。

しかし黙って攻撃をくらう筈がない。

フィールドによってビームははじかれ、実弾武器は装甲の硬さであまり効果が無い。

「ちっ！！コイツフィールドなんて装備してたか！？」

「敵も黙ってコピーしているだけじゃない様だね。厄介だ！！」

「あいつウザイ！！接近して潰す！！行くよ」

トリケロスのビームサーベル、2本のタクティカルアームズとブレード・ルミナリウムを展開して切り掛かる。

しかし妙なことにディビニダドの核ミサイル搭載部である胸部が開いて打ち出されたミサイルは小型、しかも通常のミサイルとなんら変わらないのだ。

つまり、奴は核ミサイルを搭載していない代わりに、対MS戦闘能力を向上させられたということになる。

しかもその数が尋常じゃない。

5機はその弾幕を掻い潜れずにさすがに後退してしまう。

しかし、核ミサイルを使つてこないとすると、全身の原子炉の存在も危うくなる。

試しとばかりにローエングリランチャーを発射して、右足を掠めるが、本来なら陽電子砲の熱で、融合路に高熱が生じ、誘爆が始まり自己崩壊してもおかしくは無いのだが、そうならない。

つまり、このディビニダドは原子炉を1機も、または搭載していない可能性がある。

どんな動力炉を使っているのかは分からないが、自滅を狙えない事は十分すぎるほどの脅威だった。

そんな時、トライアとインペラトル構えに出る。

「大丈夫、皆は私が守る。ノーマ、今こそあの力を使おう!!」

「ええ、本当に強い敵が来たときのみしか使わないと決めた最強の武器」

2機が並び、背中からは青白い光が広がりながら輝いている。

「フィールド・インペリウム!!!」

月光長に類似した光がディビニダドに迫る

此方はカウサデセ。

「ほう、まさかあの兵器を使うとは、やつらも本気か。しかしあのデイベニダドはやつらには倒せない、あいつらがナノマシンを使っている限りな、それにまだこっちには機体が残っている、なあ、みんな、まだ局面が出来上がってないから我慢してくれよ」

意味ありげな言葉を残してその口元は不気味にゆがんでいた。

第十四話「決戦第三幕く降臨の鉄球と聖誕せし守護神」(後書き)

Gジェネファンなら誰でも知っている、チート機体サイコハロ、無双しましたけどどうでしたでしょうか？

このくらいの戦闘能力でよろしいでしょうか？

ちなみに機体説明としては、

サイコハロの手が口の部分にあり、のびて先端の鉄球状のものは開閉式で、三連想の拡散メガ粒子砲で状況によってドリルが出てくる。

耳の部分からはハロビットが出現、個数は数え切れないほど。

とにかく強い、硬い、便利、でも設計や開発が難しいという造ったら最高、造るまでが最悪といったチート機体、でも面白い。

こんな感じですね。最後のほう自分の感想ですが。

感想アドバース等お待ちしております。

第十五話「決戦第四幕く鉄球の舞いとまさかの敵」(前書き)

今回で決戦も第四幕です。

今回はいろいろ武器など出てくるので各ガンダムシリーズの予備知識があると読みやすいかもしれません。

それでは、第十五話をどうぞ。

第十五話「決戦第四幕<鉄球の舞いとまさかの敵>」

此方はサイコハ口と戦闘中。

「救援に来た。此方はオーブ軍所属　ハイン・アークヴェルス　少尉、全員無事か？」

「此方はエリス・クロード、此方は全員無事です。助かりました、奴のデータを送ります」

データが送信し終わる。

「厄介だな、近距離でアムフォルタスがカリドウスを撃ち込まなきゃならねえ。ビギナ・ロナだったな、俺と奴に向けて攻撃を仕掛けるぞ。他のは援護を頼む」

「了解！！」　「分かりました」　「O.K.」

イダテンは飛行形態に変形し高速でサイコハ口に迫る。

その後ろをビギナ・ロナ達が着いて行き、ティンクル・ビット、大型ビームキャノン、ドバーガンビームモード、ファンネル60機がハロビットを落としていきながら道を造る。

2機のビームサーベルがサイコハ口を切りつけようとするもさすがに機動力で勝つことが出来ない。

「この！！落ちろ！！！！」

アクエリアスのヒートロッドがサイコハ口の右腕に絡まる。

そこに風穴を開けようかとハロドリルが迫る。

「やらせない、ザンスパイン！！」

それはザンスパインの光の翼で受け止める。

「これでっ、どうだあああああ！！！！」

7号機が最大出力で突撃、体勢を崩すと、ゼロ距離での腰部レールガンを左腕に撃ち込むと、サイコハ口の腕がようやく一本もぎ取れる。

「この間合いなら！！貰い受ける！！」

ヴァリアブル・メガ・ランチャーが右腕も吹き飛ばす。

しかしサイコハ口の両目は不気味に光り、両足を伸ばすと4機を吹き飛ばす。その隕石のごとき蹴りは4機の腕や武装を破壊する。

そしてまだ残っているハロビットをぶつけようと放出する。

「皆！！ファンネル！！」 「友達は遣らせない！！ファンネル！！」

ビットを破壊していくがサイコハ口自身への注意を怠らせたため接近を許してしまう。

サイコハ口はその身を回転させてハロタツクルを繰り出す。

「これ以上は遣らせるかよ!!」

イダテンが飛行形態で近づき、遂に至近距離でアムフォルタスを撃ち込む。

煙の中からは右足を失ったサイコハロが出てくるがその目はまだ光っていた。

そして機体内にある全てのハロビットを放出する。

「本気か、ならば」

その瞬間、ハイネの中で何かが弾けた、そうハイネはSEEDの能力を持っているのである。

目のハイライトが消えるとその表情はより一層険しくなる。

迫りくるハロビットを確実に1機1機破壊して行く。

2機のキュベレイがいるとは言え、その正確さには驚かされる。

そしてイダテンはサイコハロに近づきビームサーベルを振るう。

「硬い!!さすがに間接部以外は硬いか!!」

ビームサーベルでも表面を少し削る程度にしかない。

そのころエルフリーデは。

「くつ、あの機体でもさすがにサイコハ口の装甲には、何とか私のバスターランサーを打ち込めれば楔になるのに………特攻あるのみか、機体状況から考えてもその手しかないか」

「「そんなことはありませんよ」」

「エリス！？シエルド！？」

「その通りです」

「レイチエル！？皆大丈夫なのか？」

「問題ありません、それより、私のザンスパインでビギナ・ロナを運びます」

「7号機とキュベレイ2機の砲撃で何とか道を作ります」

「サイコハ口につくまでの護衛はアクエリアスで」

エルフリーデは小さなため息をついていた。

「ふう、貴公らは恐れを知らぬのか？それともただの虚け者か？」

「「虚け者です」」

6機は作戦通りの体勢に入る。

ザンスパイのV2に匹敵する機動力で二次加速をかけ、ビギナ・ロナの出力を最大に上げバスターランサーを打ち込む。

そうすれば楔となり、そこから内部を破壊できる。

そしてザンスパインが動き出す。

それに気づいたサイコハ口はハ口ビットを飛ばしてくる。

それをブースターをやられてまともに機体制御できない7号機とエネルギーの少なくなってきたキュベレイが打ち落として行き、サイコハ口の伸ばしてきた足をアクエリアスが体を張って押さえる。

そしてザンスパインからビギナ・ロナが飛び出す。

サイコハ口はその場から離れようとするが、「逃がしやしねえよ、喰らって貰うぜ！！！」

イダテンがサイコハ口を掴んで、動きを止める。

「かたじけない、参る！！！」

そして、ビギナ・ロナのバスターランサーが連続して打ち込まれる。

1点に集中して打ち込んでいるため、サイコハ口の装甲といえども貫かれた。

悪あがきといえる足がビギナ・ロナをはじく、がビギナ・ロナはキュベレイが受け止め、大事には至らなかった。

「とどめだ、いくぜ、ボーリング玉」

飛行形態に変形して距離をつめてバスターランサーの突き刺さった

部分をロックする。

そこにアムフォルタスとカリドウスを最大出力、バッテリーオーバーヒート無視で放つ。

どんなメカでも内部はもろい、そして、サイコハロは表面にひびが入っていき、爆散した。

しばらく静寂。

「終わったか、にしても化物だな、あのMAの能力や装甲、たったこれだけの戦闘でこっちの体力根こそぎ奪っていきやがる」

少し安堵したのか深く息を吐いた。

他の者達も、コクピットの中で少し一息ついていた。

「フィールド・インペリウム!!!!」

ディビニダドにセンチリオン系統最強の攻撃が迫る。

しかしディビニダドは動かない、と言うより受け止めようかと両手を広げている。

そして、フィールド・インペリウムが当たった。

その瞬間、フィールド・インペリウムが強制解除された。

5人とも驚きを隠せない。

受け止められたなどではなく、表示されたのは強制解除の文字。

「う、嘘、トライアたちの力が……………」

「強制解除だと、これではまるで、触れたときに止まることが分かって奴は……………」

そう、このデイビニダドは自らの周囲にナノマシンへの指令信号を無効化する電磁場をまとうていたのだ。

ブレード・ルミナリウムを避けていたのは発動していなかったため、この電磁場に気づかさず、フィールド・インペリウムを使わせてエネルギーを大量消費させるためだったのだ。

しかもトライアたちの放出したナノマシンはデイビニダドが吸引、エネルギーに変換していた。

「ちっ、ヤベーぞこれ、どうする？」オルガがあきれたように言う。

「どうって、僕に聞かないでよ、そんなのわかんないから」クロトは少し困惑する。

「どうでもいい、とりあえずぶった切る、それで良いじゃん」シャニが提案する。

「「そいつはそうだ」「どこまでも馬鹿で単純である。」

しかし、それが時に頼もしい。

レッドと、ブルー、ゴールドは、持ち前の機動力を生かして突撃していく。

レッドフレームはガーベラストレートとタイガーピアス、ブルーフレームはタクティカルアームズソードモード、ゴールドフレームはトリケロスとオオツキノカガミを用いて切りかかる、

トライアとインペラートルは先ほどの攻撃でかなりのエネルギーを消耗したためあまり高速戦闘は出来ないなので、後ろからランチャー・ジェミナスによる援護射撃を行っている

しかし、ディビニダド自体の装甲が硬く、ガーベラストレートをもつてしても表面を削る程度にしかない。

やはり、有効なのはビームサーベルだった。

とは言っても、迫りくる大量のフェザーファンネル、ビーム、そして巨大な爪、接近しようにも出来ないでいた。

攻め倦んでいたとき、高速でディビニダドに迫る青白い機体があった。

此方はD4のイーヴィルティガ基影山 一輝。

「ここらはガガばっかりだな、つまらない、と言うと『戦争を楽し

むな』とか言われそうだな、あの唐変木に」

愚痴りながらもガガを切り刻んでいく。

しかし敵の数はさすがに多い。

「面倒だ、フアングー！シールドビットー！」

計12機の遠隔操作武器が飛び交い、周りの敵を、肩のフラッシュエッジも使いながら落としていく。

そんな景山に迫る機影がひとつあった。

かなり遠くだが、その邪悪な存在はウルトラマンとしての感覚が感じ取った。

「このいやな感じは何だ……………かなりやばいのが近づいてきやがる」

その予感は見事なまでに的中した。

「データ照合、なるほど、奴は『デビルガンダムJr』^{ジュニア}って言うのか。そっぴやオルガたちが話してたの聞いた覚えがあるぞ」

その内容とは。

『デビルガンダムって言う奴の作り出すデスアーミーって言うザコ兵が居るんだけどさ、そいつら1体1体が学習能力が高くて、そいつらが合体して出来た機体がいるらしいんだよ。しかもめちゃくちゃ強いって話だよ。』

『へえ、ドモンも大変だね、あいつまだ世界中に散らばったD G細胞の欠片の破壊に着手してるんでしょ』

『俺も、ドモンから聞いた……………マスターアジアと話してたの聞いた』

上からオルガ、クロト、シャニである。

「全く、悪魔が置き土産とは。未練がましい」

悪魔とは、それが分かるのは別の次元での出来事だ、此处では語らないで置こう。

しかし、3人の会話を聞いたので気にはなっていたし、少し高揚感もあった。

「貴様の野望、この俺が破壊してやる！！」

右手のパルマフィオキーナを輝かせデビルガンダムJrに立ち向かう。

此方は慶一。

多数のドラグーンやファンネルをもってしても、ツヴァイは攻撃を受けることはなく、シールドバインダーやディバイダーシールドで

防がれた。

「くっ、何だったんだあの映像は……………やべっ!!」

危うくバスターライフルに焼かれるところだった。

「どうした慶一、動きが鈍ってるぞ、GN粒子を使いすぎたか？」

「いや大丈夫、ちょっと集中が切れただけです」

そう言うと、すぐさま思考を切り替えツヴァイを攻撃していく。

しかしあの悪寒は振り切れないでいた。

親友の明仁がこの次元の何処かに居るかもしれないのだから。

慶一にとって、明仁は麗華と同じくらい大切な存在であった。

自分の居場所が、両親の他界で祖父母の下にしかなく、そのときのショックで人とかかわるのが怖くなってしまい、学校ではいつも一人で本を読む毎日だった。

そんな中から救ってくれたのが、明仁だった。

小学1年のとき、両親をなくし、3年のとき、同じクラスになった明仁と麗華に声をかけられ、唯一と言っていい友人となった。

だからこそ気になるのだ。

「だがその疑問解決の前に、貴様が邪魔だああああああああ

ああ！！！！」

高速で近づいていきGNソードとノイシュペールを振るっ。

しかしそんな一直線的な攻撃じゃ簡単に止められる。

「だったら……!! コイツで!!」

グリフォンも最大限に活用しながら、ソードビット、ドラグーン、フォトムウを操作し、少しずつ追い詰めていっている。

洋も両手に持ったムラマサブラスターの先端からビームソードを出し、その背中を狙う。

ツヴァイは後転やサイドステップを使いながら此方の攻撃を確実によけてくる。

そんな中、遂にツヴァイが小惑星にぶつかり、その動きを止めた。

[illegible]

GNソードの一線がツヴァイのコクピットに迫る。

その時、ツヴァイはディバイダーキャノンを小惑星に放ち、破壊、高速逆噴射で後ろに下がる。

とは言つても無理に近距離で小惑星を崩壊させれば機体の各所にか
けらが衝突し、傷をつけた。

しかし、コクピットを切り裂かれるより良かった。

その切先がツヴァイのコクピットを掠め、表面だけが飛ぶ。

その中にあるものを、慶一は見た。

だからコクピットハッチが吹き飛んでようが今の慶一にとってはどうでも良かった。

そのコクピットに立っている、いや、取り込まれているといったほうが正しいだろう。

そう、まるでDG細胞に飲み込まれたかのように触手でいたるところを縛られており、その身を固定されていた。

そして、今、この瞬間、慶一が見た未来が現実のものとなった。

「なんでだ、何でお前がそこいるんだ！！答えろ！！明仁！！」

この言葉は、紛れもなく、慶一が見た未来のビジョンから聞こえてきたものであった。

カウサデセは、

「おつ、奴がツヴァイの正体に気づいたか、探すの苦労したからな、死ぬ直前の次元に行って、さらにそいつに肉体保護のために転送装置までつけて、ようやくつれてきたんだからな、と言ってもこの次元にきた時点ですでに死んでるか、せいぜい足止めになってくれるだろう。俺はこっちで楽しみか」

その笑みはだれが見ても悪魔の微笑みというだろう。

そして静かな笑い声が聞こえてくる。

第十五話「決戦第四幕＜鉄球の舞いとまさかの敵＞」（後書き）

いかがでしたか。台詞の一部に「光を継ぐ者」様より提案していただいた台詞があります。

明仁はツヴァイの生体モジュールに、ありきたりな展開ですがこれでもいいかな、と思ったのでこうしました。

デビルガンダムJrは上記の通り、デスアーミーの集合体で、人を殺して地球を綺麗にするが、初期デビルガンダムの考えで、Jrは人類の脳をコントロールして地球再生に使う、というスレイブコントロールと言う人間の脳に作用する特殊な波長で人間の思考を操るといった能力のほか、デビル四天王を模したビット兵器を持ち、強力な攻撃を仕掛けてくる。

このような感じです。

何か分からない所がございましたらご連絡ください。

感想等お待ちしております。

第十六話「決戦第五幕く新世代の参戦と悪魔の置き土産」(前書き)

今回でゲスト軍の戦闘を終われたらいいな、と思いますが、絶対終わらない気がします。

ソロソロちゃんと主人公勢の戦闘に入りたいと思いますがなにぶん多いもので。

しかし、此処まで長く続いたのも、機体などのデータをお送りいただいた皆様方のおかげです。

それでは、第十六話をどうぞ。

第十六話「決戦第五幕＜新世代の参戦と悪魔の置き土産＞」

D4とデビルガンダムJrは格闘戦を繰り広げていた。

一輝の体が本来はウルトラマンであることの恩恵から一輝はスレイブ・コントロールにかかることがない。

つまり、現在この敵に対抗できるのは、強靱な精神を持つMF達が一輝だけなのだ。

確かに他のガンダム搭乗者も強い精神力を持っているが、MFのように自身を律して、明鏡止水の境地にたどり着いたものでなければ、普通はスレイブ・コントロールに陥ってしまう。

だから、今戦えるのはウルトラマンとしての光の力を持つ一輝だけなのだ。

Jrはその巨体と異質な形から俊敏な動きや格闘に向かわないように見えるが、実は驚愕するほどのスピードと、圧倒的な馬力によるパワーを備えているのだ。

D4はフィンファンングとシールドビットによる射撃、ビームサーベルにフラッシュエッジを投擲したりと、さらにパルマフィオキーナによる連続攻撃を持つとしても、決定的なダメージに至るところか、こちらが無駄にエネルギーを消耗する一方だった。

そしていくらか攻撃を続ける間にJrのメガデビルフラッシュやその拳による攻撃で、Jr最大の武器と言われる、四天王ビットへの注意を怠り、その展開を許してしまった。

「しまった！！ビット兵器を持ち出しやがったのか！！」

四天王ビットはその三角形と言う特有の形から四天王の武装を模した武器を出す。

1つは頂点から接続部の面へと向かって分離その中からはマスターガンダムの上半身が現れる。

1つは接続部から2本の角を生やし電気を待とう。

1つは頂点から接続部の面へと向かって分離後方から2本の触手を伸ばしこちらに向けてくる。

1つは下から爪を生やして側面からは一对の羽を伸ばす。

その動きはすばやく、あろうことかその攻撃に当たってしまう。

通常のデビルガンダムの攻撃一つ一つは非常に強力、当たれば命はない。

一方Jrは戦闘能力より精神操作能力のほうが長けているので大事には至らなくとも、おそらく腕の一本は持っていていかれる覚悟だった。

D4も運よく両手のシールドやシールドビットなどの反応が追いつきを展開できた。

グランドガンダムのビット、2本の角がD4に迫り、電流とともに攻撃してくる。

シールドビットで防ぎきったが何枚かが爆散、そしてすぐ次が来る。次はガンダムヘブンスソードのビット、一対の翼が此方を切断しようとして接近してくる。

これはフラッシュエッジを投擲、フラッシュエッジを1機失うも翼をビームサーベルで切断することかわす。

次はウォルターガンダムのビット、爪のついた触手の先端からビームが放たれD4を襲う。

フィンファングを向かわせ迎撃するが、敵のほうが一步上手、フィンファング一機を落とされ、さらには左肩に当たり、左のフラッシュエッジが吹き飛ぶ。

そしてビットの中でも随一の戦闘能力を持つマスターガンダムのビット、その動きは紛れもなく、かの『流派東方不敗マスター・アジア』の動きそのもの、連続の拳が繰り返される中、何とかそれをビームサーベルを使って防ぎきったも、最後に、敵はその右腕に赤い炎をまとう。

「ちっ、ダークネスフィンガーか！！させるかあああああああ
！！！！」

D4は左手のパルマフィオキーナを最大出力にしてダークネスフィンガーもどきにぶつける。

勝負は目に見えていた。

並のMSがMFに格闘で、しかも必殺技の部類に入る攻撃なら直接

対決してもほとんど勝てる見込みはない。

射撃ならMFに勝つ要素はあるが、必殺技に対してはほとんど無理だ。

何とかダークネスフィンガーの直撃は防いだ、が左腕は無残にも吹き飛ばされていた、と言うほどでもないが、おそらくもうパルマフィオキーナは撃てないだろう。

「ぐううつ、衝撃がこっちにまで伝わってきやがる、エネルギーもほとんど使っちゃった。どうするよ」

そんな考えにお構いなくJrはメガデビルフラッシュの砲撃体勢に入る。

フルチャージならおそらくアークエンジェル級や、ミネルバの装備している陽電子砲並みの砲撃能力を持っている。

ただのビームシールドでは防ぎ切れる訳がない。

アカツキのような対陽電子砲や対ビームに特化した機体でなければ防げない。

D4にそんな機能はない。

「此処までか、まあ、最強と言われたデビルガンダムに対して此処まで出来たんだ、文句はねえーな、ノア、契約完了ださつさともとの世界に戻せ」

「ところがギッチョンそう言うわけには行かないのよ」

D4の周りにストライクフリーダムドラグーンを巨大化させたようなものが浮かぶ。

それは遠隔操作連結式エネルギーシールド、ガーディア・デ・ロス・ディオセス、通称GDL D。

全てのエネルギーを吸収するエネルギーシールド。

メガデビルフラッシュのエネルギー全てを取り込む。

そんなビット状のものにJrは四天王ビットを飛ばすも何か盾のような物に防がれる。

リピドペテロ・デ・ディオス、通称ルプラシールドビット、しかも、それはダークネスフィンガーをも防いだのだ。

そして攻撃態勢となり四天王ビットを撃ち落とす。

「おい。どこの戦争屋の台詞だ、って、エティコラか、スレイブ・コントロールは？」

「私はあくまで機械よ、精神操作なんてきかないわ」

「そうか、そいやノアが言ってたぜ、こっちの唐変木を助けるために慶一を貸してくれと」

「それは私じゃなくて慶一に聞いて、彼は自分で決めて動くから。それと選別よ、受け取りなさい」

D4の周りにGDL Dが浮遊する。

「GDLで取り込んだエネルギーをあげるから、勝ちなさい！！」

そういうとエネルギーを供給した後、すぐさま飛び立っていった。

「ちっ、分かったよ、やって見せるさ………デビルガンダム
 Jr、もう一度言っぜ、貴様の野望、この俺が破壊してやる!!」

ビームサーベルを振り上げると通常とは違う色の刀身が展開される。

これは、実はエティコラナタルに頼んで、ノアの光のエネルギーを溜め込んだクリスタルをD4のビームサーベルのグリップの中に埋め込み、そのクリスタルが一輝の中の光の力に反応して、ノアの光の力、ウルティメイトゼロソードの擬似刀剣を出現させたのだ。

「てあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ
!!!!!!!!!!!!」

光の剣がJrに迫る。

対抗しようとしても言うかのように、Jrは自身の右手にエネルギーをチャージする。

これはまるでダークネスフィンガーのようだった。

四天王とデビルガンダム本体のデータを引き継ぐ機体なので、やり方はわかる、ただ、一度もやったことがない。

それに対抗しようとも言うかのように右手を突き出す。

そしてD4も光の剣を振るい、そのままJrに迫る。

「これが俺たちウルトラマンと……！ガンダム乗りの……！力だあ
ああああああああ……！！！！！！！！！！」

数十秒にわたる競り合い、次第にD4の左腕が悲鳴を上げ始める。

そして、左肩が吹き飛ぶと、Jrのほうに若干押し返し始める。

「まだ、まだ終わるわけにはいかなえ！！！！！！……」

一輝は一度目を閉じた、数秒後、かつと目を開き、叫ぶ！！

「光をおおおおおおおおおおおおおおおお
 おおおおおおおお!!!!!!」

それまで劣勢だったD4の体が光を放ち、刀身が巨大化する。

そして次第に押し返す。

Jrの腕が完全に額につくぐらい下ろされる。

その瞬間、一気にウルティメイトゼロソードが振り下ろされ、生体コア、と言うより擬似型コンピュータごと、切り裂かれる。

「へ、ざまあみろ、デビルガンダム、置き土産、有り難く頂戴してやったぜ」

一輝は周りに敵の存在は確認できず、オートに変更してから少し休むことにした。

妙に体の力が入らない、彼はそれがエティコラのせいだとは気づくことはなく、また、自分が使ったのがノアの力の一部、ウルティメイトゼロソード知ることもない。

そしてD4はドミニオンへと向かっていった。

デビニダドの右肩にビームサーベルが突き刺さる。

オルガ、クロト、シャニ、トリエ、ノーマの5人はいったい誰だと、そしてデビニダドに一太刀入れたものに驚愕していた。

その正体は、ザフト軍の白服、イザーク・ジュールの駆る新鋭機ゲルググセイントのビームナギナタだった。

そこに向けて、さらにディアッカ・エルスマンの乗るブレイズザクファントムのビームトマホーク、シホのスラッシュザクファントムのビームアックスが繰り出され、その硬い装甲を削っていく。

最後にゲルググに装備されている新型ウィザード、『ストロングウィザード』2機装備されている対艦刀を振り下ろす。

『ストロングウィザード』は全距離対応型ウィザードであり、中型ブースター、2連装ビームカノン「ガンデーヴァ」、光学兵器型対艦刀「レーヴァテイン」を装備しており、中型ブースターによる高速機動と、ガンデーヴァによる砲撃、レーヴァテインによる近接戦闘両面を可能にした。

光学兵器型対艦刀レーヴァテインはアロンドイト等とは違い、刀身が折り畳まれるのではなく、つばの部分を大型化して、ビームのみによる対艦刀となっている。

ガンデーヴァはバラエーナ・プラズマ収束ビーム砲の技術を使用しており、エネルギー効率の良さを追求、連射能力とチャージによる高威力と、2通りの使い分けが出来て、腰の下からケルベロスのように展開して、砲撃する。

直線スピードではセイバーの飛行形態を上回る速度を実現、正しその驚異的な能力から、ザクのジェネレーターでは耐え切ることが出来ず、ゲルググセイントの専用ウィザードとなった。

モデルとしてはデスティニーのバックパックを参考にされている。

その対艦刀が振り下ろされ、ディビニダドの右腕を切り落とした。

そして3機はミサイルと蹴りでディビニダドを吹き飛ばす。

「ふう、腕一本でもこれだけの労力がかかるなんてナンセンスだな」

「無駄口をたたくな、次がくるぞ、そのアストレイ3機とセンチ

ユリオン!!」

5人はチャンネルを開いて通信を受ける。

その時イザークは驚嘆の声を上げた。

自分が殺した相手がそこにいるのだから。

シンたちの発見したエクステンデット研究所のデータからカラミティ、フォビドゥン、レイダーのパイロットの顔を知っていたのだ。

「き、貴様ら!!何故生きている!!?あの時確実に俺が!!」

「はあ?何言つてんだ?そりやおめえの世界の話だろうが」 オルガは切れ気味に、

「こつちの世界では僕ら一緒に共闘もしたのにねえ」 クロトは呆れ気味に、

「貴様つて口癖、直ってないね、ぷっ」 シャニは少し小馬鹿にしながら、

「イザーク、いつも言っていた、キラ達に笑われてた」

「いつもうるさい、だからアスランに負ける」 トリエとノーマにも見放されている。

そんな会話をしていればイザークはぶち切れるのが常だ。

「5人ともいい加減、ちっ!!」

全機はとっさに回避行動を取る。

体勢を立て直したディビニダドからのビームとフェザーファネルの雨がくる。

「ディアツカ、シホ、ファネルを打ち落とせ、その隙に俺が攻撃する!!」

「了解!!」

ゲルググは取り回しのいいビームナギナタを構え、その後ろからビームライフルで2機のザクが援護していた。

他の5人はイザークだけにいいカッコさせまいと続いていく。

ゲルググはビームナギナタを回転させ、盾のようにファネルを落としていく。

レッドフレームはタイガーピアスをブルーフレームに渡し、ガーベラストレート一本で切り込んでいく。

ブルーフレームはタイガーピアスを使って切り込んでいく。

ゴールドフレームはトリケロスのビームサーベルで切り込む。

トライアとインペラートルはブレード・ルミナリウムで突撃する。

飛び交うファネルの中を掻い潜り6機がディビニダドに急接近する。

腕一本なくしているため、格闘戦能力が落ちており、接近しやすくなったのだ。

次第にデイビニダドのファンネルの総数が減ってきて、さらに機体各所に傷が見える。

しかし、そんな中、一方的にダメージがあるわけではない。

レッドフレームは左足が吹き飛んでおり、メインカメラも左半分消えている。

ブルーフレームは右手が飛んでおりブースターの出力も落ちている。

ゴールドフレームはトリケロスがなくなっていて、マガノイクタチも右半分なくなっている。

トライアとインペラートルはその自己修復機能で大事に至っていないが所々の修復後が見える。

ゲルググは右足のみ、2機のザクはシールドやウィザードを失っているが大事には至っていない。

しかし、全機は好機と見てみて格闘武器を構え突撃していく。

デイビニダドはすかさず胸の元核ミサイルハッチ、現対艦ミサイルハッチのミサイルを全門発射する。

さらに全身のメガ粒子砲を連射、8機を寄せ付けない。

「俺達が活路を開く……！！！」

「その先は任せたよ……！！！」

「いつくぜえええええ……！！！」

レッド、ブルーはタクティカルアームズを、ゴールドはツムハノタチで突っ込んでいく。

ビームの雨の中、3機はデイベニダドに肉薄、その武器を腹や足に向けて突き立てる。

硬い装甲を砕いて、タクティカルアームズ、ツムハノタチ、ついでにマガノシラホコを突き刺す。

一瞬動きを止めたが、3機はその巨大な手で吹き飛ばされ、トライアとインペラトルに抱えられる。

2機はランチャー・ジェミナスで応戦、アストレイ3機への被害を最小にしようと奮闘するが、手負いの敵を逃すはずがないので、此方にビームが迫る。

2機は非接続武装から出るシールドで2機を守るが手が足りない。

残った1機にビームが迫ると、それをゲルググがビームシールドで防ぐ。

そこから急接近、アストレイの攻撃した箇所めがけてガンデーヴアを撃つ。

さらにそこへディアカとシホの精密射撃により左足が内部より吹き飛ぶ。

「グウレイトオ!!!」

「隊長!!!今です!!!」

そうなるに幸運にもエフィールドジェネレーターが破損、ザク2機のビームライフルとランチャー・ジェミナスがデイビッドの装甲を削る。

ゲルググがレーヴァテイン2本を、バックパックの羽に振り下ろす。

「でやあああ あああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

豪快な音とともに羽をそれぞれ一刀両断してその場から離れる。

そこにロックオンするものがあるからだ。

アストレイはレッドとブルーが何とかローエングリンランチャーを
 構え、ゴールドが3機のエネルギーパイパスをつなげ出力を最大に
 上げる。

そしてその後ろをトライアとインペラートルが支える。

「『消えろおおおおお！』……！！」

「！！」

通常ブルーフレーム1機の砲撃のため出力を抑えているが、3機分のエネルギーをフルで使っているので通常より広い砲撃が放たれて、ディビニダドを包み込む。

その中から聞こえる爆発音と蒸発音、ディビニダドは完全に破壊された。

ディアツカとシホとトリエにノーマはボロボロの3機と軽少だがダメージを追ったゲルググを艦に戻していった。

カウサデセは。

「まさかJrまで破壊されるか、それにディビニダドまで、しょうがねえな、デストロイ、ハルファスガンダム元へ、レグナント、ツヴァイの増援に行け、それとようやく出撃だぜ、死の淵から舞い戻りし戦士達よ」

死の淵から舞い戻りし戦士達、その言葉が意味するものとは？

レグナントと、デストロイがハンガーから出撃した。

そのころクアトロは。

「感じる、強い憎悪を」「世界を滅ぼそうとする思い、世界を掌握しようとする思い、世界を憎み続ける思い」

2人の脳にはカウサデセの位置がはつきりと分かった、つまりそこがPMBプログラムの本星。

そのデータが全てのガンダムに転送された。

第十六話「決戦第五幕＜新世代の参戦と悪魔の置き土産＞」（後書き）

今回出てきたゲルググに関してですが、ザクウォーリアやグファイグ
ナイトッドはザクとグフとドムは、英語の一文が省略されて、そう
読めるようになっていのですがゲルググのそれが思いつきません。

ウィキ先生で調べれば分かりますがゲルググにそれが思いつきませ
んの、何か案のあるお方がいたらご連絡ください。

D4の使ったウルティメイトゼロソードは本来ウルトラマンゼロが
使う技で、それを取り入れました。「光を継ぐ者」様、勝手に武器
レパートリー増やしてスイマセン。連絡を怠りました。

次回でゲスト軍の戦いは終わりにしたいです。

感想などお待ちしております。

第十七話「決戦第六幕く燃え滾る炎と意地の閃光」(前書き)

今回でゲスト軍のたたきは一旦終了です。
後は所々細かい戦闘シーンが出てきます。

先行して戦いを始めたジェネレーションガンダム以外の主人公機の
戦いが次回から出る予定です。

それでは第十七話をどうぞ。

第十七話「決戦第六幕く燃え滾る炎と意地の閃光」

此方はカウサデセ。

「ハルファスはまだフェニックスとやり合ってたのか？結構時間かかるな、デストロイだけで足りるかな？ハルファスのほうも結構時間かかってるな、あいつは一樣はフェニックス以上の機体でもあるしな……………そういえばこの間見つけた次元に面白いのがいたな、簡単な構造だし、何より顔が良かったな、200機位は今からでも間に合うな」

その口元に、またしても不気味な笑いが浮かんだ。

カウサデセの企みはいかに、それがわかるのは少しだけ先。

此方はマークとラナロウ。

「はあああああああああああああああ……………！！！！！！」

フェニックスとアストレアのビームサーベルがハルファスに突立てられる。

ハルファスはアクロバティック飛行のように、機体を前後左右に三次元的に回転させ、四本のビームサーベをかわしきっていた。

しかし、そんな中にも反撃の糸口を見つけてはクロス・メガビームキャノンで応戦してくる。

アストレアはGNガトリングガンを使い弾幕をはり、一旦距離を置こうとした。

ハルファスとの戦闘経験上ハルファスは射撃重視の機体だが、フェニックスのようなビームライフルでの威嚇や牽制射撃が出来ず、クロス・メガビームキャノンによる、大火力を持つての殲滅を主とする一面がある。

だから、一旦距離を置き、ハルファスが砲撃体勢に入った時、トランザムで一気に決めようと思っっているのだ。

しかしその予想は思いもよらない形で崩された。

側面からの大火力砲撃、それも戦艦並の砲撃によるもので。

さすがにこれには、2人とも驚いた。

敵に戦艦並の大火力砲撃が出来る敵がいるとは思っていなかったからだ。

しかし、敵は戦艦じゃない。

それは、戦艦に収まりきらないほどの巨体を持つMS、デストロイガンダムだ。

「嘘だろ、此处でデストロイはきついぜ」

「マーク、デストロイは俺が抑える、だからお前はハルファスを頼む。この機体じゃ結局ハルファスには機動力で負ける、それに俺が近くに居たら、バーニングファイアできねーだろ」

「立つたらそっち頼んだぜ、帰ったら祝杯な」

[illegible]

アストレアはデストロイに向かっていった。

「行くぜ、こっからは本気だぜ、ハルファスガンダム……！」

そして、デストロイガンダムの居る地点。

「さーてと、どう潰そうかなこのデカ物」

デストロイは何事もないかのように側面のネフェルテム503を辺りかまわず乱射する。

「へっ、そんな砲撃に当たるかよ、俺だって一機でデストロイ落としたことくらいだよ」

GN粒子を多く出して一気に間合いをつめる。

デストロイはそれに対処しようと、シュトゥルムファウストを飛ばしてくる。

五本の指のスプリット・ビームガンと腕のシュトゥルムファウスト本体のビームガンで砲撃してくる、デストロイはこれさえ気をつければ接近するのは難しいことじゃない、が、これが厄介なのだ。

スプリット・ビームガンは五指から放たれるゆえ、射撃角度を自由

自在に曲げることが出来る。

そしてその威力はMSのビームライフル以上、当たれば確実にお陀仏だ。

そしてシュトゥルムファウスト本体の陽電子リフレクター、格闘戦なら怖くはないのだが、こうも近づけないで居ると厄介だ。

アストレアの射撃武器は全てビーム兵器、陽電子リフレクターは実弾にも効果があるのだが、弾丸がビームコーティングなどされていた場合、防ぐことが出来ず、すり抜けられてしまう。

実はラナロウはこの特性から、特殊弾を造り、それを使ってデストロイをしとめたのだ。

だが今回はそれはない、つまり、格闘で叩きのめすしかないと言う事だ。

しかし、敵も敵だ、みすみす遣られてはくれない、ネフェルテム503を撃つては腕がくる。

「嵐の拳骨」とはよく言ったものだ。

ラナロウはそんな拳骨で根を上げる弱くはないが。

「やるじゃねーか、おもしれえ、叩き潰そうじゃねえか」

ビームライフルとガトリングガン捨て、両手にビームサーベルを構え突撃する。

スーパースキャラの真ん中の砲口に向けて右手のビームサーベルを一本、下を向いてツォーンを撃とうとしている顔面に向けて

左手のビームサーベルを突き刺す。

機体の真横に來たシュトゥルムファウストを高速移動して1つ落とし、もう一機はビームライフルを捨てて放ち牽制、ビームサーベル一本を使って突き刺し、そのまま破壊した。

しかしそこでトランザム終了、機体の性能がかなり落ちてしまった。

お構い無しに怒り狂ったようにデストロイはネフェルテム503を乱射、最初より危険だった。

しかもミサイルランチャーも弾切れになるまで撃ち続けた。

それではさすがにビームライフル一本とGNシールドだけで伏せきれほどの弾数じゃない。

ビームライフルは破壊、GNシールドもミサイルランチャーに碎かれた。

何とか避け切ったが残った武装はビームサーベル一本だけ、さっきの砲撃で投げ捨てておいたガトリングガンに被弾、見るも無残な姿になっていた。

「ちつ、コイツだけか、やるしかねえか。持ってくれよアストレア、最後の……………」

そこでいったん目を瞑り精神を落ち着けさせる。

チャンスは10秒、それ以上は続かない。

「トランザム!!!!!!!!!!!!!!」

デストロイに急接近するアストレア。

コクピットがつぶれてもなお動くデストロイは、壊れた真ん中のスキヤラは使えないので放って置き、両側のスキヤラを放つ。

アストレアは射角の調整されたスキヤラの丁度死角となる場所を真っ直ぐにひたすら進んだ。

このとき、ラナロウにはわずか数十メートルのデストロイとの距離がとても長く感じていた。

そして、遂にアストレアの間合いに入った。

「
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

声にならない叫びがコクピット内にこだまし、ラナロウはレバーを思いつき倒した。

その動きとともに、アストレアの腕はデストロイにビームサーベルをつきたて、動力炉に達した。

数秒間の沈黙、そして巨大な爆発。

「ちっ、至近距離であのデカ物の爆発に巻き込まれんのはやっぱだ

めだ」

アストレアがしばらく宙を漂っていた。

ちよつと時間が戻りフェニックスは。

両手に持ったビームライフルがハルファスに向かって火を噴く。

ハルファスはまた三次元的飛行を使って此方の攻撃を避けて行つた。

フェニックスはビームサーベルを構え、接近戦に持ち込もうとする。

宇宙区間を赤い閃光と藍色の閃光が交差するようにビームサーベルが交わつた。

両機はファンネルを飛ばしてお互いに敵を打ち落とさんとファンネルが飛び回る。

ファンネルの撃ち合いの中、両機の間には距離が開く。

ハルファスは好機とばかりにクロス・メガビームキャノンを構え撃つ。

全8門からなるクロス・メガビームキャノンを避けきるのは並大抵の技量じゃ出来ない。

勿論、マークはそこまで高い反射能力に恵まれてもいない、少し空間認識能力が高いので誘導兵器の扱いに慣れているだけだ。

避けきること出来ず被弾、強力な砲撃で有ったため両腕が吹き飛び、機体各所にはえぐられたような跡があった。

だが、フェニックスガンダムにはナノスキン装甲が装備されている。

大抵のダメージは自己修復で直る。

それはハルファスガンダムも同じこと、兄弟機なのだから当たり前であるが。

つまり、どちらのの攻撃も無駄なのだ。

確かにコクピットや動力炉を潰せば問題ないのだが、ハルファスに搭載されているナノスキン装甲はおそらくスーパーナノスキン装甲に分類される回復力を持っている。

バルバトスにも搭載されていたものと同じものなのだから、驚異的としか言えない。

「へっ、さすがは黒い不死鳥の異名を持つガンダムなだけはあるな、戦闘能力が半端じゃねえな。しかしよ、負ける訳にはいかねえんだよ！……！！！」

腕はまだまともに修復できていない。

ならファンネルで攻めるしかない。

両機はファンネルを飛ばし、再度高速の撃ち合いに入る。

フェニックスは腕が使えない分、蹴りにより、ハルファスの体勢を崩し、そこにファンネルを撃ち込むという戦法を取るしかなかった。ハルファスにはまともに一対一でぶつかって勝てるのは真のガンダム乗りくらいである。

「俺だつてなあ、真のガンダム乗りになりてえんだよ！！！！だから、此处で潰すぜ！！ハルファスガンダム！！！！！！！！」

フェニックスは一旦距離を置き、ハルファスに突っ込む。

そしてMA形態に変形すると音声入力コマンドが発動する。

「バアアアアアニング！！！！！！！！ファイアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

フェニックスガンダムの最強の攻撃、バーニングファイヤ。

機体全体をシャイニングフィンガーと同じ流体金属で包み込み、敵の腹をぶち抜くと言う、派手な攻撃である。

「フェニックスガンダム、バーニングファイヤ発動を確認、対処する」

ハルファスは、機体をMA形態に変形させる。

前方から見ればX字のように見えるフェニックスガンダムと対を成すハルファスのMA形態である。

「バーニングフレア、発動、特殊流体金属機体全面に展開、発熱確

認、破壊する」

ハルファスガンダム最強の攻撃、バーニングフレア。

それは構造上はバーニングファイヤと同じだが、機動力、装甲、発熱量がどれをとってもハルファスはフェニックスを上回っているため、総合的なパワーではこちらが上なのだ。

マークは以前にもこの技でハルファスと対決したとき、アストナージ・メドツサ特性のアストナージエンジンを装備していたため勝利できた。

しかし、此方の世界のアストナージはシャアの反乱と呼ばれた、第二次ネオ・ジオン戦争中に戦死している。

勿論そんなエンジンは作られていない。

しかも、そのエンジンはある特殊なエネルギー発生システムで動いていたため、二個異常存在しない。

しかも、唯一無二のエンジンはマークがバルバトスに勝った時、マークが乗っていた、ボロボロになったフェニックスガンダムと一緒に消えていった。

そして両機は。

2機の距離はどんどん近づいていく。

そして2機がぶつかり合ったとき、強力な衝撃波が走った。

このシステムはある故にて、こう呼ばれている。

機体の全スペックが飛躍的に上昇し、簡単に言うと無双が誰でも出来るシステム。

故に、『究極の黒歴史の遺産』。

そして、遂にフェニックスガンダムがハルファスガンダムを貫いた。

フェニックスはMS形態に戻り、宙を漂った。

「ハア、ハア、ハア、ハア、これで、俺も、真の、ガンダム乗りになったぜえ」

オートに切り替え、帰還することにした。

もうエネルギーが残ってないのだ。

その途中、半壊のアストレアを見つけて引っ張る。

「ラナロウ、やったのか？」 「ああ、しかし、あんな奴に手こずるとは、俺もまだまだだな」 「しかし、お前は一機でも良くやっただよ、そんな不慣れな機体に乗って」 「お世辞はいい、それより、約束の酒、おごってもらうぜ」 「おごんのは俺じゃねえ、ゼノン艦長さ」

その時、ゼノンの背筋に一瞬寒いものを感じたのは言うまでもない。何せ、2人はめっぽう酒に強い、そして、戦いの後はかなりの量の

食事をとるのだ。

艦長は2人にだけは酒を奢りたくはないのである。

カウサデセは。

「遂にハルファスまで落ちたか。しかしこっちの準備は完了している。さて頼むぜ、どのガンダム世界に繋がることのない、ニューウージェネレーション、ガンダムAGE-1」

バルバトスのいるハンガーから、200機近いが発進した。

その瞳は本来の碧色ではなく、血に染まったような濃い赤だった。

第十七話「決戦第六幕く燃え滾る炎と意地の閃光」(後書き)

いかがでしたか？以下は今回登場したものの説明です。

アストナージエンジン SDガンダム ジージェネレーションウォーズ及びワールドで出てきたオプションパーツの1つで一週目をクリアしないと手に入らないチートパーツです。攻撃力、機動力+50とふざけた値です。

黒歴史の記憶 一回きりの消費パーツで、テンションを超一撃、攻撃が当たれば1.25倍のクリティカルが必ず派生する状態にする、此方もクリア後のチートパーツです。「究極の黒歴史の遺産」は作者の勝手な呼び方です。

マークがGジェネのオリキャラなので導入しました。

最後の量産特攻部隊は叩かれまくりのガンダムAGE-1です。

自分はガンダム作品の中で唯一嫌いなガンダム作品です。絵がちよつと……………

といっても特攻部隊ですからそこまで書きません。ちなみに出演は「サナレイド」様の後押しがあつて決定しました。

次回から主人公勢の戦いです。機体説明も追々出ていきます。

感想などお待ちしております。

第十八話「決戦第七幕く蘇る死者と新しい力」(前書き)

今回から主人公機の戦闘に入りたいと思います。

AGRが出てきましたが、個人的に、絵的に、今までで嫌いな唯一のガンダム作品なので活躍どころか皆さん意フルボッコされますのであしからず。

それでは第十八話をどうぞ。

第十八話「決戦第七幕く蘇る死者と新しい力」

此方はカウサデセ。

「さあ、はじめようか、本当の戦いを、全てのガンダム達よ、貴様らは此処で終わる、地獄の死者達が首を永くして待ってるぜ」

そして、カウサデセはバルバトスのスラスターを吹かして、その後を、13機確認できるMSが飛んでいく、その前には200機に及ぶガンダムAGE-1がいた。

アムロは何かいやな物を感じ取った。

表現するのが難しく、口で言い表せることの出来そうにもないもの。

人の発するプレッシャーとも違う、しかし、精神を押し潰すかのような、黒く、捻じ曲がり、淀んだ物。

その正体が何か分からなかった。

しかし、分かることもあった。

この淀んだ物が、途轍もなく危険なものだと言うこと。

「いったい何なんだ、この感じは」

エティコラが通信を繋げてきた。

「あなたも感じる？この淀んだ様な感覚を」

「ああ、感じている、だが、どこかで感じたことのある感覚だ、いったいどこで……………」

その時、脳裏によぎる感覚、紛れもなく感じ取りたくない感覚だった。

「思い出した、C・Eの世界でラウ・ル・クルーゼと戦ったとき、あの時感じた感覚だ」

「けど、この感覚を発しているのは1人や2人だけじゃない」

「つまり、何人もの視野が蘇っていると言うことか」

その時通信に割り込みが入る。

「その通りさ、エティコラ、アムロ・レイ」

その声の主は。

「「カウサデセ……………」」

「よう、久しぶりだな、エティコラ、それと、直接話すのは初めてかな？アムロ・レイ」

2人の表情は渋いものだった。

敵の大將が堂々と此方の回線に割り込んできているのだから。

「そんな顔するなよ、俺は今MSに乗っている、ソロソロこの戦いにも決着をつけようと思ってな、此方は14人の戦士を用意した、そっちも14人、代表を出して戦おうぜ」

「ふつ、そんなことせずとも、私達自らが貴様の本拠地に行つて上げるわよ。首を洗つて待つてることね」

「だろうな、じゃあ楽しみにしてるぜ」

通信を強制的にきつて、全員に通信を入れる。

「皆聞いて、敵の大將が打つて出て来たわ、今から敵本星に向けて攻撃をかける、皆、私に、あなた達の未来をかけて」

プロテガが、クアトロから伝わった来たデータの場所に向かつていくと、後ろから他の同盟軍がともに来た。

「ザ・ワンとサードはツヴァイと交戦中か、ゼノン艦長」

「オウ、なんですかい？」

「慶一と洋を頼みます」

「任せといてください、それと、そちらを頼みます」

エティコラは軽く頷いて、目線をPMB本星に向けた。

そのときだった。

目の前に惑星大の工学明細が解かれていった。

そこには200機に及ぶガンダムAGE-1と14機のMSが立っていた。

その真ん中に立つMS以外の13機はそれぞれMS1機ずつに向けて飛んで行き、その手に持ったワープレネードを爆発させ、異次元空間に飛ばしていった。

飛ばされたのは。

アムロののるEX-ガンダム。

カミーユの乗るアクセルZガンダム。

ジュードの乗るZZガンダム。

バナージの乗るユニコーンガンダムエルシャンス。

トビアの乗るクロスボーンX1ダブルクロス。

ウツソの乗るV3ガンダム。

ドモンの乗るマスターゴッドガンダム。

ヒイロの乗るカイザーウィングガンダムゼロ。

ガロードの乗るガンダムTX。

ロランの乗るガンダムタイプ100。

アスランの乗るインフィニットジャスティスパラディン。

キラの乗るストライクフリーダムブレイブ。

刹那とフェルトの乗るクアンタライザー。

真ん中に立っていたMSはプロテガと対峙していた。

「それがあなたのMSなの？」

「そうさ、これが俺の最高傑作、『バルバトス・デスペラション』
さ、そしてこいつらが新たなるニュージエネレーションのガンダム、
ガンダムAGE-1だ！！！！！！！！」

AGE-1は全機ライフルを構え砲撃準備に移っていた。

「さあ、始めようか、本当の最終決戦を」

AGE-1は全機、ライフルの引き金を引いた。

此方は別次元、アムロのいるところ。

「やはり貴様が、シャア！！」

「久しぶりだな、アムロ、さあ、見せてもらおうか、心の光が造る
軌跡を！！」

「貴様だって、1人の人間だ！！光を知っているはずだ！！」

カミーユ。

「本当に蘇ったのだなシロツコ！！」

「言っただろう、世界を動かすのは一握りの天才だと、私はその1人、死などありえん！！」

「貴様のような物がいるから平和が来ない！！今度こそ消えろ！！」

ジュドー。

「まだ血を求めているのか、グレミー・トト！！」

「私の血には戦う大儀がある、貴様ら子供の悪戯で消すわけには如何のだ！！」

「そう言う訳には行かない、俺達の可能性をつませるわけには行かないんでね！！」

バナージ。

「もう箱は失われたんだ、戦う必要なんてないんですよ、フル・フロントタル!!」

「私はスペースノイド全ての器となるため戦わねばならん、だから君を殺せる!!」

「違う、あなたは自分のエゴで他の人を苦しめてるだけだ、だから俺があなたを落とす!!」

トビア。

「貴方だつて人を信じれたはずだ、ドウガチ!!」

「私の野望は費えぬ。地球が核の劫火に包まれる日まで!!」

「なら俺が止める、幻想でも現実でもアンタに世界を焼かせはしない!!」

ウツソ。

「何でアンタが、こうして来るんだよ、クロノクル!!」

「お前が俺を、カテジナを、許さないぞ、ウツソ・エヴィン!!」

「戦争で全てを変えようとするな、分かり合うことだって出来るはずなのに!!」

ドモン。

「まさか貴様が復活するか、キングオブハートKOHの何かけて貴様を倒す、ウルベ
！！」

「いいだろう、ならば私もこのDG細胞の力で貴様を潰す！！」

「行くぞ、俺の全てをぶつけてやる！！ガンダムファイトオオオ」

ヒイロ。

「あの時殺されて、まだ世界を欲するか、デギム・バートン！！」

「ふつ、あの敵マリーメアが阻まなければ出来たことだ、私に支配されてこそ、世界は平和となる！！」

「違う、俺達の未来に貴様不要だ！！リリーナのためにも、破壊する！！」

ガロード。

「何でだオルバは変わったのにお前は変わらない、シャギア！！」

「世界は私を認めなかった、オルバは負けても私は負けん!!」

「間違ってる、過ちを繰り返さないためにも、俺はお前を否定する!!」

ロラン。

「何故貴方は戦うんですか、ギム・ギンガナムさん!!」

「戦いこそ我が宿命、戦うことが私の生きることなのだよ!!」

「戦って生きることを実感するなんておかしいですよ、貴方にだけ守るものがあるのに!!」

アスラン。

「やはり貴方ですか、今度こそ俺が止めるパトリック・ザラ!!」

「父親を呼び捨てとはいいい度胸だ、今度こそナチュラル全てを滅ぼすのだ!!」

「刺し違えても貴方を討つ、それが俺の罪だから!!」

キラ。

「貴方だけは、貴方だけは僕が討つ、ラウ・ル・クルーゼ!!」

「人類の夢、欲の到達点、キラ・ヤマト、君は存在してはならない、故に私が殺す!!」

「僕には帰れる場所があるんだ、守りたい人が、紡ぎたい未来がある、だから貴方を討つ!!」

刹那。

「復活していたとは、ならば、もう一度破壊するだけだ、アレハンドロ・コーナー!!」

「ふっ、世界は再生した、ならもう一度破壊し、もう一度私色に染め上げる!!」

「世界は貴様のものじゃない、分かり合う気が無いと言っなら、俺は貴様を破壊する!!」

13機のガンダムと、復活した敵との戦いが始まる。

第十八話「決戦第七幕く蘇る死者と新しい力」(後書き)

今回は大戦が始まる前菜です、皆宿命の対決や戦う事無く終わってしまったものなど多々あります。

面白くなるかどうか分かりませんが頑張ります。次回からそれぞれの機体についての説明を出していきます。

感想などお待ちしております。

第十九話「最終決戦くザ・ワンVSツヴァイ、サードVSレグナント」(前書

今回から主人公勢の戦いをピックアップして行きたいと思います。

今回は題名で分かるようにザ・ワンとツヴァイ、サードとレグナントの戦いです。

それでは、第十九話をどうぞ。

第十九話「最終決戦くザ・ワンVSツヴァイ、サードVSレグナント」

此方は異次元空間ではなく、通常空間で戦うザ・ワンとツヴァイにサード。

そこに1つの巨大な影が迫っていた。

「あん？レーダーに反応？慶一、何かデカイのがこっちに接近して来てるぞー！」

「今それどころじゃないですよ！！コイツ一体でも手一杯で、それに……………」

そう、ツヴァイのパイロットは、慶一のたった2人の友人の1人、
「浜木 明仁」だから、なおさら戦いにくい。

訓練を受けて、エース級の操縦技術を持っていたても、まだ17歳、たとえ敵でも唯一無二の親友を手にかけることが、そう簡単に出来るはずがない。

「やめろー！！、明仁！！俺がわからねえのか！！！！答えるよー！！」

迫りくるビームサーベルをGNソードでかわしつつ、接触を試みるもことごとく失敗する。

このままでは、隙を作って慶一が遣られかねない。

洋はそう判断するが、慶一の友人だと知ると、なかなか行動に移せなかった。

「くっ、何か、何か手はないのか……………そうか!!」

洋は何か思いついた。

「此方は斎洋、そうだ、最大出力で頼む」

通信を切ると、すぐさま慶一の援護に入る。

「慶一、もう少しの辛抱だ、もうすぐ『アレ』が来る!!」

「『アレ』って何ですか？」

その問いの答えは一瞬で返ってきた。

「クアンタムギガバースト」

クアトロから発せられたクアンタムギガバーストが、一本の帯状になってザ・ワンたちを包み込んだのだ。

限定的だが量子空間が出来上がり、人の意思を伝えられる。

「今だ!! 行け!!!! 慶一!!!!」

ザ・ワンは粒子に包まれてその物理的力によって押し流されているツヴァイを追いかけて行つた。

「さあてと、慶一の邪魔はさせねえぜ、レグナント、俺が相手だ!!」

後ろから迫っていたレグナントは進行を停止し、MS形態へと変形した。

サイドは2本のムラマサブラスターを構えレグナントに向かっていった。

レグナントは胸部部分を開いて湾曲GN粒子ビーム砲を発射する。

サイドはフィールドを搭載しているので、避ける必要はないのだが、此処まで強力な砲撃となると、ジェネレーターが限界を超えて暴走してしまう恐れがあるので、避ける道を選んだ。

しかし、これは湾曲ビーム砲、避けてもすぐさま曲がってくる。

「ちっ、面倒だな、受けきるかそれとも途絶えるのを待つか、ここは待つか、それに、攻撃中はGNフィールドがない、だったらくらえ！！」

避けながらもムラマサブラスターを連射、硬い装甲に傷を付けていく。

しかしそこはレグナント、この程度では大事に至らない。

五本の爪を広げると、その一本一本を飛ばしてくる。

ファングの中でも大型、さらに突貫力も高いレグナントのファングは非常に危険だ。

「やらせるかよ、行けっ！！ファンネル！！」

ジェットファンネル、アーマードファンネル、ペガサス・フィン・ファンネル、スカルヘッドファンネル、フリーゲルファンネル、計27機の遠隔操作兵器が舞う。

戦力差は10対27、こちらが有利だが、レグナントのファンゲは強力なビーム砲であると同時に、鋭利な刃にもなっている。

アーマードファンネルもどれほど耐えられるかは分からないが、侮ってはいけない。

ムラマサブラスターを連結させ、トリプルビームライフルを手に取り、レグナントをファンネルの影から狙い撃つ。

レグナントには強力なGNフィールドが備わっている、だから、GNフィールドを突破できるムラマサブラスターによる直接攻撃か、こつした不意打ち気味の狙撃しかない。

だが、見え透いた狙撃など軽く防がれる。

「だったら、光の翼！！！行け、行け、行け、行けええええ！！！」

超高速で接近して行き、足に向かってムラマサブラスターを振るう。別に足は問題ないとも言つように、完全に無視しているかの様に切り落とされた。

エグナーウィップを両方放出し此方の動きを止めようとする。

光の翼の高速起動で避け、先端に向けてジェットファンネルを向かわせ、破壊した。

すかさずレグナントはファングを此方に向けてきた。

そこでサードは隠し玉のグレネードを発射、ファングからは外れたが狙いは違った。

ファングが通り過ぎる瞬間爆発、その中にはビームコンフューズと同じ効果が発生するように計算されたメガ粒子が入っており、爆発と同時にそれがファングを数機破壊していった。

「コイツは便利だ、後でカミィユに教えなくっちゃな、って、今別次元にいて通信つながらねえんだよな」

今ので3機破壊したが油断は出来ない。

レグナントは特攻するかのようには高速で近づいてきた。

急上昇でそれを避けたがそれは罠、本命は機体の後ろに隠れたファングだった。

すぐさまアーモードファンネルでガードするも6機ともビームキャノン並の砲撃に爆沈、今までかなりのダメージを追っていたため、かなり表面も磨り減っていたようだ。

ムラマサブラスターを盾代わりにして防ぐがそこに痛々しく突き刺さる。

ファングはいくつか残っている、そこで盾にしたムラマサブラスタ

ーを破壊して、突き刺さっていた3機とともに破壊。

残り4機、これがなくなれば戦闘はこちらがかなり有利になる。

レグナントはマイクロミサイルを連発してきた。

ファンネルによってあらかた落とすが、そのミサイルはスモークミサイルだった。

敵からしたら此方はスモークの中、兎に角撃てば当たる。

だが此方は、レーダーにまで以上をきたすジャマータイプだったため、スモークのせいで敵の位置が分からない。

撃てばこっちの位置がばれる、故に攻撃に転じれない。

スモークを出たところを狙い撃ちされては元も子もない。

「やるしかないか、あんまり使いたくないんだけどな、これ、気分悪くなるから」

あるスイッチを押すとそこに表示されたのは『NS-D』ニューロ・システム・デストロイヤー。

NT-Dはパイロットが感じ取った脳波を敵意に変換し、それを元に敵機を破壊するシステムだった。

が、このNS-Dは対ニューロ用に開発されたもので、ニューロが出す特有の電磁波を交信し、それをパイロットに敵意として送信、パイロットから返って来る敵機への破壊命令を基にして機体を制御

して敵機を破壊するシステム。

それがNS-D。ユニオンデストロイヤー

パイロットによる操作も受け付け、何より脳波によるコントロールを極力少なくしており、NT-Dより確実に負担は少ない。

これはユニコーンガンダムエルシャンスにも搭載されている

感じ取った電磁波を元にレグナントの位置を割り出した。

そこに向けて頭部のハイメガキャノンを発射、レグナントは驚異的な反応速度でGNフィールドを展開、回避した。

それでも攻撃の手は緩めない。

ペガサス・フィン・ファンネルを使いビーム砲を防御しつつ、フリーゲルファンネルで攻撃、確実にファンングを一機ずつ落としていった。

しかし、あまりこのシステムに慣れてないのか、延々と入り込んでくる敵意に気分が悪くなったのか、システムを停止してしまふ。

レグナントは残り1機となったファンングを此方に向けてきた。

「ちっ、休む暇もねえな、コイツで最後だ!!!」

右手のビームトンファアで最後の1機を切り裂いた。

しかしレグナントがない。

その瞬間、機体が大きく揺れる。

「ぐおうー！つく、何だ！！急に機体が」

サードの真横を赤い閃光が横切って行った。

レグナントはトランザムに入っていたのだ。

レグナントの翼は大型GNソードでもあるので、さっきのはただの体当たりだったが、もしGNソードだったら真っ二つになってたかもしれない。

レグナントはトランザムを停止、様子見に入った。

時たまGNバルカンで攻撃しながら切りかかる隙をうかがっていた。

膠着していても埒があかないので、サードはレグナントに向かっていった。

ムラマサブラスターを使って切りかかるも、思ったより頑丈なGNソードによって防がれてしまう。

はじかれると湾曲ビーム砲が放たれる。

光の翼で受け止めるも、徐々に、徐々に押されている。

「負けらるかよー！、NS-D、再発動！！！」

サードは急激に高速機動に入り、レグナントの右腕の付け根にムラ

マサブラスターを突き刺す。

そこに向かってガデツサのGNメガランチャー状に砲門を開いたトリプルビームライフルを、腹部に接続しながら向けて、ハイメガバズーカにして、ムラサブラスターを楔状にして、それごとレグナントの右腕を破壊する。

すぐさま左手でハイメガバズーカ取り外し、右手のビームトンファ―を展開、ペガサス・フィン・ファンネルをビームサーベル付近に漂わせ、ビームサーベルを巨大化。

一気に縦一文字にレグナントを切り裂いた。

「はあはあはあはあ、NS-D停止、ふう、終わったか」

一息つくと思ったが、すぐにやめた。

「いや、まだか、来やがったなガンダムAGE-1、俺の友達^{ダチ}が言ってたぜ」

『あんなガンダム、86000度の油でAGE^{あげ}てやりてえ!』

「ってな、だから、やらせてもらっぜ!!!!!!」

サイドの目の前にはガンダムAGE-1が10機ほど並んでいた。

ツヴァイは。

クアトロが発生させた物理的な力を持つGN粒子がツヴァイを戦闘区域からどんどん引き離している。

それを追うようにザ・ワンもついて行っている。

そして、ある程度離れると、粒子が拡散して、高濃度粒子領域が出来る上がる。

慶一はそこで脳量子波を使って明仁に接触を試みた。

通信で呼び掛ける事が出来ないのなら、脳に直接話し掛ける事が出来る脳量子波を使って話せばいい。

だから洋はクアトロにGN粒子を発生させることを頼んだのだ。

「聞こえているか、明仁、聞こえているのなら返事をしろ！！明仁！！！！」

「無駄さ」

「つつ！！誰だっ！！！！」

返ってきた答えは、明仁の声ではなかった。

「この肉体を支配しているものさ、この肉体はすでに死んでいるんだよ、僕が君の次元に赴いて、テロに巻き込まれる瞬間に君ともう

1人の彼女はこの次元に転送された。その時、一緒にコイツを転送させたのさ」

量子空間で見えるその顔は、紛れもなく明仁だ、だが声が違う。

悪意が籠っていて、それが明仁の口で喋っているのが許せなかった。

「しかし面倒だったよ、君の存在が確認されてからだったから、無理に時間移動してこっちはクタクタ、おまけにこの世界に連れて来た時の影響で、この肉体は強制的に死んでるしさ。ま、それ以前にテロにあって死んでるはずなんだけどね？」

その瞬間、慶一の『何か』が吹き飛んだ。

「それ以上その声で口を聞くな!!!!!!!!!!!!!!」

「はっ、知るかよそんなこと、俺はカウサデセのデータから作った擬似人格だからな」

明仁の体は死んではいたが、カウサデセの処置により、自身のコピーを搭載していたのだ。

2機は量子空間内で戦闘を続けていた。

慶一は確かに怒りはしていたが、まだ、理性を失いただ我武者羅になっただけではない。

「てやあああああああああああああああああ!!!!!!」

ザ・ワンの右足のグリフォンがツヴァイの左腕を狙う。

それをツヴァイは右腰のハイパービームソードで受け止める。

ザ・ワンは右足を引くと、次は左手のノイシュペールをつく。

それは右手に持ったゴッドフィンガー対応サーベルで止める。

すかさず胸部の拡散ビーム砲をチャージする。

ザ・ワンもカリドウス2をチャージする。

2機の距離が少し開き、同時に放たれる。

2機とも拡散ではなく、一点集中に切り替えており、2機の砲撃がぶつかり合うと強い衝撃波が生まれた。

「何だ、友達を失って切れてるのか？なんとも醜い、まるで獣だ」

「そんな獣に貴様は殺されるんだぜ？」

ザ・ワンのコクピット内で機械音が響く。

The imposition of BLOSSOM - System

それはパイロットの脳波を感じ取り、その状況に最適なOSに瞬時に書き換え、いかなる心理状況にも対応するためのシステム。

元々搭載されていたシステムは未完成で、手動で発動させる必要が

あり、OS書き換えだけできる状況だったが、完成し、脳波によって発動が出来るようになった。

いまの慶一の心理的状況、精神的状況に合わせてOSが書き換えられた。

興奮していれば、敵機に突撃していくのに最適なようにスラスターの出力を調整したりなど、高速戦闘中にOSの瞬時書き換えにより戦況を有利に運ぼうとしていた。

機動性能や格闘性能が微妙に変わるだけだが、それでもその瞬間的に強くなっているのです、若干だが、ツヴァイを押して来た。

高速戦闘の中での激しい斬り合いが続く中、『BLOSSOM - System』の限界が来る。

高速で機体のOSを処理するため、機体のコンピュータ自体にも多大な負担がかかり、長時間の使用は出来ない。

そうになると、長時間使用できる、ゼロシステムを搭載するツヴァイが優位に立つてくる。

何度も斬り合っているうちにザ・ワンは粒子が少なくなり、機動性が落ちてきた。

「ちっ、もうやばいか、仕方ない、最終プロテクト解除」

その言葉とともにザ・ワンのメイン画面にはプロテクト解除の文字が並ぶ。

そして、音声入力コマンドが発動する。

「月光蝶!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ザ・ワンの背中から、まばゆい光の羽が生えてくる。

ツヴァイはそれを確認すると、両腰のサテライトキャノンの連結式砲身を腹部に接続、両肩にツインサテライトキャノンを展開、左手にロングツインバスターライフルを構え、右手に石破天驚拳のエネルギーをため、ビームサーベルを持つ。

ツヴァイの最大出力の砲撃形態。

マイクロウェーブ受信から廃熱処理の必要のなくなったサテライトキャノン。

ツインバスターライフルを大きく上回る出力を持つロングツインバスターライフル。

石破天驚拳を超える斬撃が加わった石破天驚ゴッドフィンガーソード。

この3つを同時に発射して敵を完膚なきまでに粉碎する。

それがツヴァイの最強の攻撃である。

ザ・ワンの月光蝶がナノマシン制御システムによって両腕に誘導され、手のひらの間で球体状になっていく。

「月光砲、発射ああああああ!!!!!!」

ナノマシンで形成された砲撃で、月光蝶を普通に直撃させたときの分解力より高い分解力を発揮する。

ツヴァイは最強の砲撃と斬撃を発射する。

ツヴァイの砲撃と斬撃が1つに収束し、さらに威力を増していった。

ザ・ワンとツヴァイの攻撃がぶつかった時、両方のエネルギーが次元空間全体に向けて、広がるかのように衝撃波を発した。

巨大な衝撃波は2機にもせまり、機体がばらばらになりそうなくらい衝撃に耐えかねていた。

ツヴァイは、あまりにも強すぎる自身の攻撃によって、両腕が吹き飛びそうになっていた。

本来、それぞれの武器が別々のガンダム1機に搭載されているものを同時に使用したので、3機分の負担が1機にのしかかっているのだ。

ロングツインバスターライフルは、両腕を使っても1発が限界の砲撃で、石破天驚ゴッドフィンガーソードもすでに一度使っており、腕がエネルギーに耐えれなくなっているのだ。

デルタサテライトキャノンは機体への負担が最小限に食い止められるように設計されているが、別に強力な攻撃を行いながら使用では、耐久能力に支障が出る。

ザ・ワンの月光蝶は機体内に溜め込んである月光蝶のナノマシンで

作り出しているのです、制限があるので、あまり長くは持たない。

両機の攻撃がやんだとき。

ツヴァイは左腕が吹き飛んでおり、右腕は電気を発しており危険な状況だった。

ザ・ワンは主だった外傷はないが、慶一自身がエネルギーの爆発の衝撃に耐え切れず、気絶している。

ツヴァイはボロボロになったビームサーベルを捨てて、ハイパービームソードを手にとった。

ツヴァイはそのままザ・ワンのコクピットに狙いを定め、突き刺してきた。

が、ギリギリの所で、慶一が気づき、フォトムウを操作、ビームシールドを展開して防いだ。

ツヴァイはそれでもフォトムウを破壊し、ビームソードを振るった。

ツインドライブを使って緊急後退をしたが、切先がコクピットをかすめ、画面が爆発。

画面の破片などがヘルメットに突き刺さる。

「があああ！！くうう、操縦桿とか無事か？……………よし、無事だ」

しかし、慶一の頭部から少し血がもれていたのが、ヘルメットの割

れはテープで止めたけど、額の傷はどうにも出来なかった。

ツヴァイの策的範囲内から離脱できたとは思ったないので、気を抜け切れないが、とりあえず一息ついた。

「さあて、どうする、GN粒子はこっちに来るまでのトランザムで使っちゃったし、ドラグーンは全機消失、月光蝶は使用不可能、クスフィアスもさっきの衝撃で吹き飛んでるし、ビームサーベル2本ともなくなってる。カリドウスは今ので使い物にならねえ、残ってるのはとソードビット、それにGNソード？にグリフォンか」

絶望的だった。

だがあきらめれない。

戦いが始まったところ、慶一と麗華2人が見た支流の未来と同じにしないためにも。

その時、レーダーに機影が映る。

「きやがったか、粒子量は……………いける！……！」

ザ・ワンはツヴァイの前に出た。

「これでお仕舞いにしようぜ、トランザム……！」

ザ・ワンが赤く染まる。

のこったGN粒子を最大限に使用してツヴァイに切りかかる。

ツヴァイもゼロシステムを最大稼働させて、ザ・ワンの攻撃を避けていく。

GNソードとビームソードがつけざり合いとなる。

もう、ソードビットを動かす余裕はない。

ただ、一振りの剣だけが頼りだ。

だが、無情にもトランザムが限界を迎える。

ツヴァイは好機と見て余力全てを使ってビームソードを振りかざす。

「負けられねええんだよおおおおお！……！！！」

ザ・ワンもGNソードを振るう。

2機の剣がお互いの胸を貫く。

「畜生、お前のことを、救えねえで終わるのかよ、明仁……」

2機を包む小規模な核爆発が起こる。

それを見ていたキャリー・ベースの麗華はザ・ワンとの通信が途切れて、体を小刻みに震わせていた。

「嘘でしょ？……ねえ、答えてよ！！慶！！！！！！！！」

通信は帰ってこなかった。

通信が気はしたが、それは違うところから通信だった。

その通信は慢心相違となったサードからであった。

「麗華、嘆くには早いぜ」

「え？」

通信モニターの向こうには笑っている洋と、サードの視線の先にいる、ボロボロになった機体の中に1人、誰かがいる。

「心配かけたな、麗華、俺は大丈夫だ」

その声の主は慶一だった。

「良かった、慶……………無事で」

麗華は涙を流して、その帰還に安堵した

何があったのか、それは数分前のこと。

ツヴァイのビームソードはギリギリコクピットをはずしており、両機が爆発する瞬間、サードは光の翼とフルサイコフレームの出す物理的エベルギーを使って光速に達するスピードでザ・ワンとツヴァイに接近。

しかし、ツヴァイには核融合炉が搭載されており、慶一を救出してからの離脱に、間に合うはずがなかったのだが洋はある特殊能力を持っていた。

無意識的に自身とその周囲に起こった事象を支流へと転送する能力、つまり、事象の変更。

だから今回はザ・ワンとサードを襲った爆発を支流へと転送、おそらく支流の自分は死んでいるだろうが本流の自分は生きているので問題はない。

この能力は確定を跳ね除ける。

故にジェネレーションシステムにとってもイレギュラーな能力なので、このような荒事が行えるのだ。

だがその代わり洋には数日間の極度の疲労が後に襲うことになるだろう。

しかし、慶一と洋は、自らの戦いに勝った。

ボロボロになった2機はキャリー・ベースに戻って来た。

そして慶一がコクピットから出たとき、麗華が涙を流しながら抱きついてきた。

「心配かけたな、まあ、ともかく、ただいま」

「うん！！お帰り！！」

麗華はもう一度強くでも痛くない程度に抱きしめた。

残る敵の将は14機。

第十九話「最終決戦くザ・ワンVSツヴァイ、サードVSレグナント」(後書

ああ、恋愛描写が難しい……………、コンなんていいのかよ、と
自虐しそうです。はあ、文章力が欲しい。

今回はいかがだったでしょうか。洋さんの能力については番外編の
パイロット説明その2に掲載していますので、そちらを見ていただ
くと他にも能力の使用例が有ります。

ちなみにAGEを揚げると言っていたのは「サナレイド」様です。

次回はカミーユVSシロッコです。

感想などお待ちしております。

機体説明 アクセル ガンダム パーフェクトジ・O（前書き）

今回は機体説明です。

少々ちんけな物になっていますがご了承ください。

機体説明 アクセル ガンダム パーフェクトジ・O

機体名 アクセル ガンダム 見た目はパツと見通常のZガンダム、
違いは新型ハイパーメガランチャーを二つ搭載している、背部ウィ
ングと左手のシールドにジェットファンネルを格納している。右肘
にビームシールド。ウェブライダーになれる。

格闘武装 腰部ビームサーベル*2 飛行形態時ビームガンになる。
シールドビームソード*5

射撃武装 腕部グレネードランチャー 左右2門 新型ビームライ
フル*2 新型ハイパーメガランチャー*2

シールドビームソード シールドのジェットファンネルをシールド
に搭載したままビームソードを展開。5本の爪のようになるほか、
1つに束ねてビームソード状に出来る。

特殊兵器 ジェットファンネル*13

新型ビームライフル モデルは初期の 装備型のライフルと同じだ
が全体的に小さくなっており取り回しが良い。ビームサーベルも出
せる。

新型ハイパーメガランチャー 2本を連結できるようになり、高出
力の砲撃が出来るようになった。ビームサーベルも出せる。ウェブ
ライダー時はウィングガンダムのように羽に連結するタイプとなっ
ている。

グレネードランチャーの弾頭には閃光弾、ビームコンフューズ弾、

通常弾、アンチビーム幕弾の4つ。

ジェットファンネルはシールドに5機、ウィングにそれぞれ4機ずつ、ウェブライダー時でもビームソードは展開できる。

全身の装甲の下にサイコフレームを搭載しているので、バイオセンサーより感度が高い。所謂フルサイコフレーム。

ミノフスキードライブ搭載、光の翼はできないが、爆発的な加速力を誇る。

加速力は今までよりかなり上昇している。直線距離では、全てのガンダムの中で最高速の加速力を発揮する。

機体名 パーフェクト・ジ・O 元ネタはSDガンダム武者番長風雲録に登場したキャラ。見た目は通常のジ・O、肩に装甲と一体化したファンネルラックを持つ、背中にパラス・アテネのミサイルを持つ。両手にビームシールド。

格闘武装 ビームソード*6 サブマニピュレーター*4

射撃武装 大型ビームライフル*1 胸部メガ粒子砲*2

特殊武装 ファンネル*20

ビームソード 腕の袖部分に一本ずつ収納されている、形状は通常版と同じ。

サブマニピュレーター ジ・Oの腰のアーマーから出るサブマニピュレーターを再度アーマーからも出るように改造された、腕一本ごとにビームソードが収納されている。

胸部メガ粒子砲 小説版ジ・Oが装備していたメガ粒子砲と同じものの。

ファンネル ジ・Oの企画内後継機のタイタニアと同じものを採用。ビームシールド V系のMSと同じビームシールド。

エフィールド装備、此方も装甲の下にサイコフレーム、所謂フルサイコフレーム。

ミノフスキードライブの採用で加速力も上昇した。

機体説明 アクセル ガンダム パーフェクトジ・O（後書き）

いかがでしたでしょうか。

の名前にアクセルがついているのは加速性の上昇と、攻撃方法にあるのですが、そちらがうまく書けるかどうか。

それでは次回はカミーユVSシロッコです。

第二十話「最終決戦＜カミーユVSシロッコ＞」（前書き）

遂に二十話に達しました……………たかが二十話で何喜んでんだか。

今回はカミーユVSシロッコの話です。

一話分使って丸ごと行こうと思うので短くなるかもしれません。

機体説明は先に書いておきますのでそちらを見てから此方を見てください。いろいろ分かりやすいと思います。。

それでは第二十話をどうぞ。

第二十話「最終決戦＜カミーユVSシロッコ＞」

此処はカミーユのいる異次元空間。

アクセル とシロッコの新たなMS、『パーフェクトジ・O』はそれぞれライフルを撃ち合いながら旋回をしていた。

「行けっ！！ファンネル！！！」

「くらえ！！ジェットファンネル！！！」

ジ・Oのファンネルと ジェットファンネルが、お互いを破壊しようと思差して行く。

ジェットファンネルは射撃が出来ない分、他のファンネルより速く、ビームサーベルを展開できるので、近接戦闘には長けている。

はビームライフルを腰の後ろにしまい、背中のハイパーメガランチャーを、脇の間から前に持つてくる。

そして、2門を同時に放つ。

ジ・Oはスラスターを吹かしてそれを避けると、お返しとばかりに胸部メガ粒子砲を放つ。

はウェブライダーに変形して回避して、ジ・Oに接近する。

そしてMS形態に戻ると、両手のビームライフルからビームサーベルを出現させ、切りかかる。

ジ・Oはビームライフルを後ろ腰にしまうと、両腕の袖口部分からビームソードを取り出し受け止める

「貴様のような奴がいるから！！！！！」

「世界は管理されてこそ平和にあるのだ、そしてそれは私が成す！！！！！」

「貴様の自己満足で世界を壊すつもりか！！！」

「破壊ではない、これは私の手による創造の第1歩だ！！！！！」

ジ・Oは を押し返すと の左側を横なぎで切り掛かる。

「貴様のエゴを認めるものか！！！！人の命を何だと思っているんだ！！！！！」

スラスターを全開にして回避する。

グレネードランチャーの閃光弾を発射する。

強烈な光でジ・Oの動きが一瞬止まる。

ハイパーメガランチャーを構え、2本をランチャーの上側を連結する。

放たれたビームは通常の射撃の4倍近くの大きさを持つ砲撃だった。

しかし、ジ・Oはフィールドを発動させて防ぐ。

ジ・Oはそれを回避しながら接近してくる。

そして間合いに入ってきたとき、はライフル1つをジ・Oに向けて投げつけ、ジ・Oはそれを切り裂いた。

そのせいで爆炎で一瞬前が見えなくなる。

そこを は、2本のハイパーメガランチャーをビームサーベルモードにして斬り付ける。

ジ・Oはサブマニピュレーターを使って受け止め、残った腕で切ろうとする。

はそれを空中を飛び交うジェットファンネルのうち、4つでビームソードを止めた。

しかし、逆にジ・Oはフェンネルで左のハイパーメガランチャーを破壊する。

すかさず はビームコンフューズ弾でファンネルを数機破壊する。

そして はジ・Oに回し蹴りを入れる。

体勢が崩れたがその中でも背中中のミサイルを発射、 の左足を破壊した。

負けじとハイパーメガランチャーを投げつけ、ジ・Oの左足に突き刺さり、左側のサブマニピュレーターごと破壊された。

ジ・Oが後退するとハイパーメガランチャーを拾い上げ、放つ。

エフィールドを展開して防ぐも、は接近してくる。

右手に持ったライフルを切られたが、すかさずメガ粒子砲を放つ。

はシールドで受け流すと、ジェットファンネルを向かわせる。

ジ・Oもファンネルを発進させ対象する。

ファンネルが飛び交う中、2機は剣を交える。

「貴様だけはこの世界に存在しちゃいけないんだ、人の命を弄び、心を蔑ろにする貴様のような奴は居ちゃいけないんだ！！！！」

「子供の理論だ、私の存在なくして世界は纏まらない、現に世界は何度も争いを繰り返した！！！！」

「それでも、貴様が世界をまとめる存在などとは思えない、たとえば何があるうと俺は人の心の光を信じる、それが俺が戦ってきた理由だから、俺は貴様を認めない！！」

ジ・Oをはじくと、グレネードランチャーの通常弾を放つが、ジ・Oの硬い装甲にはかなわない。

「人の心を大事にしない世界を造って、何が生まれると言うんだ！！！！！！」

「統一と言う名の平和が生まれるさ、その世界に一個人の意思など不要、ただ存在するだけで十分だ！！！！！！」

ジ・Oは に向けて突っ込んで行き、その巨体で吹き飛ばす、そしてさらにミサイルで追い討ちをかける。

それをライフルで打ち落とし、2機は一旦停止する。

「まだ分からんか、世界を動かすのはこの天才、パプテマス・シロッコだと言うことを！！」

「分かりたくない！……皆が教えてくれたんだ、命は、命は力だつて、空を支える力だつて、そんなに大きなものが、貴様なんか、踏みにじられるものか！！！！！！！！！！」

の全身が淡い青色に包まれた。

「ならばその力を跪かせるだけだ、この、私の力で……!!!」

ジ・Oの全身からはごつた白色のオーラが立ち上る。

「貴様はすでに死んでいるんだ、目の前の現実どこるか、過去まで見れなくなったか、シロツコ!!!!!!!!!!!!!!」

「理想ばかりで、賢いだけの子供が何を言う!!!!!!!!理想ばかりでは何も成せんのだ!!!!!!」

は巨大化したライフルのビームを、ジ・Oは胸部メガ粒子砲を放つと、2つの閃光はかち合い、衝撃波を生む。

2機は旋回しながらも敵を破壊するべく隙を探る。

ときたまの剣の交じり合いを加えながら、2機は対峙する。

「貴様はいつも傍観者で、人の命を弄んで、今度は別次元の命までも弄ぼうと言うのか！……！」

「私は世界を統べる資格がある、故に、命を左右する資格がある、それが私だ！……！」

はビームサーベルでジ・Oに切りかかる。

ジ・Oはビームソードで受け止めると腰のサブマニピュレータで切りかかる。

はバク転で避けると、顔面へ向けてグレネードランチャーの通常弾を発射する。

弾はジ・Oの鶏冠部分に当たり体勢を崩す。

「その傲慢がレコアさんやサラを家畜にした、ただの貴様の操り人形に仕立て上げてしまった！……！」

「やつらが望んだことだ。それが人の上に立つと言う事だ、分かったようなことを言うな！……！」

「分かりたくはない、そんなこと人間が人間に1番しちやいけない事だって、何で分からない！……！」

しかし、ジ・Oは瞬時に体勢を立て直し、腰のサブマニピュレータでのライフルを切り裂く。

「人の上に立つからこそ、割り切ったのだ、そんなこと、百も承知、

故に、世界を統べる上で、私がそうする事によって、世界を、人を、全てを手に入れるのだ！！！！」

もう1つのサブマニピュレータが 迫る。

だが、 はそれを素手で掴むと、へし折った。

「何！！このパワーはいつたい、まさか、サイコフレームのオーバーロード現象が！！！！」

その時、 の全身がさらに強い青い光に包まれる。

「俺の全てをかけて、皆、俺に力を貸してくれ！！！！！！！！」

「この力、やはりサイコフレームが……………ならば！！！！」

ジ・Oの体もさらに輝きを増す。

「貴様にだって分かったはずだ、この力が、この想いが何なのか！！！！」

「ふんっ、そんな力、私がねじ伏せる！！」

2機は剣を構えて対峙する。

そして2機は同時に動き出し、その剣を交える。

サブマニピュレータと本来の腕から繰り出される不規則な斬撃は、2本の腕でも対処しきれるものではない。

そして両腕をはじかれて、ハイパーメガランチャーも破壊され、完全に無防備となってしまふ。

「終わりだ、 ガンダム!!!!!!!!!!!!!!」

サブマニピュレータのビームソードが迫る。

カミーユは此处までかと、そう思った。

「カミーユ、負けないで、帰ってきて、私達の元に」

カミーユの中に何か強い思いが流れ込んできた、そのとき思った、まだだと。

「終われるかあああああああああああああああああああ！
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

さらに の輝きが増すと、ジ・Oが吹き飛ぶ。

「何だ、女の声、しかし、あの時間こえた声には居なかった、しかも強い生命力を感じる、何者だ、貴様は!!!!!!!!!!!!!!」

「貴様には分かるまい、この俺を後押ししてくれる力が!!!!!!!!!!
!!!!!!」

ジ・Oはまた切りかかってくが、再度あの腕にやられるわけには行かない。

ならばとばかりに、 はシールドのジェットファンネルからビームソードを伸ばし、残ったサブマニピュレータを左腕を回転させるこ

とによる横からの斬撃をもって切り落とす。

そして、回し蹴りを放ち、ジ・Oを吹き飛ばす。

「今度こそ、死者の元に、永遠に帰れ……！ シロツコオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

伸びて巨大になったがシールドビームソードがジ・Oの左腕を切り落とす。

しかし、ジ・Oも巨大化したビームソードで右腕を切り落とす。

はそのままジ・Oに突っ込み体当たりで吹き飛ばす。

ジ・〇は残った右腕のシールドをコクピットの前に構え、防御の体制に入る。

はウェブライダーに変形すると全てのジェットファンネルをビームソードモードにして突撃する。

ジ・Oはファンネルを使って止めようとするが、その機体を覆う青い『バイオ・フィールド』と呼ばれるオーラによって阻まれる。

[illegible]

ウェブライダーがビームシールドごとジ・Oを、シロッコを、切断した。

そして、ジ・OはMS形態に戻ったの後ろで、爆発、完全に、消

え去った。

「やったのか、ようやく、終わった。今戻るよ、ユイリィ……………」

歪んだ時空とともにカミィユは元の次元に戻ってきた。

そして機体をラー・カイラムへと戻った。

残る敵の将は13機。

第二十話「最終決戦＜カミーユVSシロツコ＞」（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回でシロツコは終了、あっけない、ちんけだ、なんて思うかもしれませんが、これが最大です。スイマセン。

次回はジュードーVSグレミーです。

感想などお待ちしております。

機体説明、

ガンダム バイラヴァ・マンサ（前書き）

今回も機体説明を先に書きます。

はお分かりの通り、クイン・マンサはクシャトリヤの属するインド文化、その宗教ヒンドゥー教の破壊神、シヴァの別の呼び名である「バイラヴァ」の名を冠したクイン・マンサの強化版です。

機体説明、

ガンダム バイラヴァ・マンサ

機体名

(トリプルゼータ)ガンダム 外見 パツと見フル
アーマー (ダブルゼータ)ガンダム、変形はできない、

胸部と腕部との装甲がミサイルハッチではなく、それに所々の装甲もアーマードファンネルとなっている。

格闘武装 ハイパービームサーベル*2 ハイメガビームブレイド

*1 脚部ビームクロー*2

射撃武装 トリプルビームライフル*1 Ⅱ ハイ・メガ・バズーカ*

1 頭部ハイ・メガ・キャノン*1 腹部ハイ・メガ粒子・ Cannon

*1 ビームキャノン*2 背部21連装ミサイル・ランチャー*

2 肩部6連装スプレー・ミサイル・ランチャー*2 ダブルバル
カン*1

特殊武装 アーマードファンネル*13

両手の甲にビームシールド搭載 装甲の下にサイコフレーム搭載、
所謂フルサイコフレーム、ミノフスキードライブ搭載。

ハイメガビームブレイド ハイ・メガ・キャノンの砲口からロング
ビームサーベルを展開する、接近時の隠し玉、エネルギー出力の調
整でかなり巨大になる。

脚部ビームクロー つま先に装備されたビームクロー、牽制などに
用いる。

トリプルビームライフル ダブルビームライフルが上部にさらに1本砲身が増えたような形状、通常時は腕に接続してある、ハイ・メガ・バズーカモード時でも腕に接続したままでも撃てる。

ハイ・メガ・バズーカ トリプルビームライフルをガデッサのGNメガランチャーのような形にして、展開、腹部のハイ・メガ・カノンに接続することでハイパー・メガ・カノンを上回る出力を発揮する、頭部のハイ・メガ・キャノンと同時発射により、エネルギーを収束させれば、ツインバスターライフルを上回る出力を持つ。通称ダブルハイメガバースト腹部ハイ・メガ粒子・カノン F A・に装備されたものと同じ、TVでは未使用。

アーマードファンネル 胸部に3つ、左腕部に2つ、両肩部に2つずつ、両腰部に1つずつ、両脚部側面に1つずつ、計13機、性能はサードに装備されていたものと変わらない。

機体名 バイラヴァ・マンサ 外見クイン・マンサの両肩のバインダーをなくし、クシャトリヤと同じようなバインダーを搭載、右手にメガビームカノン、左手に大型ビームガトリングガン装備している。

格闘武装 腕部内臓ビームサーベル*2 バインダー収納サブマニピュレータ*4 サブマニピュレータ内臓ビームサーベル*8

射撃武装 腹部ハイパーメガ粒子砲*1 胸部メガ粒子砲*4 バインダー部メガ粒子砲*16 頭部3連装メガ粒子砲*1 腕部メガ粒子砲*1 背部メガ粒子砲*2 ビームカノン*1 ビームガトリングガン*1

特殊武装 ファンネル*60

エフィールドジェネレーター搭載 装甲の下にサイコフレーム搭載、
所謂フルサイコフレーム ミノフスキードライブ搭載

サブマニピュレータ クシャトリヤに搭載されていたものを巨大化、
バインダー1枚に2本、マニピュレータ1本につきビームサーベル
1本内蔵している。

腹部ハイパーメガ粒子砲 腹部に内蔵されている、通常はハッチが
閉じている、威力はネエル・アーガマのものと同等。

胸部メガ粒子砲 クシャトリヤと同じもの。

バインダー部メガ粒子砲 バインダー1枚につき4門、計16門の
メガ粒子砲。

頭部3連装メガ粒子砲 腕部メガ粒子砲 背部メガ粒子砲はクイン・
マンサに搭載されていたのと同じもの。

ビームカノン ビームマグナム並みの威力を持った兵器、カートリ
ッジ式で予備のカートリッジはバインダー裏にある。

ビームガトリングガン 10連射式のビームガトリングガン、毎分
約9000発のビーム弾を放てる、一発一発が通常のMS用ビーム
ガトリングより大きい。

ファンネル テールバインダーに32機、肩部バインダーにそれぞ
れ7機ずつ搭載、計60機。

機体説明、

ガンダム バイラヴァ・マンサ（後書き）

いかななものでしたか、今回は2機とも超重量級MSです。

それでは本編をどうぞ。

第二十一話「最終決戦くジュドーVSグレミー」(前書き)

今回はジュドーVSグレミーです。圧倒的な強さを見せ付けたクイン・マンサの強化版とFA・以上の高火力を有するの対決です。

2機とも圧倒的なまでの高火力機体ですので、射撃シーンが多くなると思いますが頑張ります。

それでは第二十一話をどうぞ。

第二十一話「最終決戦くジュードVSグレミー」

ジュードの居る次元。

の右腕に装備されているトリプルビームライフルが、バイラヴァ・マンサに向かって火を噴く。

三つの閃光が同時に放たれ、バイラヴァ・マンサに接近していく、がバイラヴァ・マンサは避けることがない。

否、避ける必要はない。

圧倒的なジェネレーター出力は、の3機分より、少し低いくらい、のジェネレーター出力を誇る、ので、エフィールドの常時展開などは簡単なことなのだ。

3つの閃光はバイラヴァ・マンサをそれ、3方に散らばる。

「何でだ、何でそんなにも血にこだわるんだよ……！」

「血が重要なのだ、世界は一握りの血統を持ったものが支配してきた、それが王国であり、帝国であり、ジオンなのだ……！」

バイラヴァ・マンサは右手に持ったビームカノンを放つ。

はそれを避けると肩のミサイルランチャーを全弾発射する。

バイラヴァ・マンサは左手のガトリングガンを放ち、全て撃ち落す。

「私こそが真なるジオンを再生する、そのためには、このギレン・ザビの血がいるのだ！！！！！！！！」

「ふざけるな！！！！！！、お前1人の自己満足のために、いくつ物次元を破壊して、何が嬉しいんだ！！！！！！！！」

「自己満足や嬉しさなどではない、これは大儀だ、私の血が、世界をすべるザビ家の血が、これは崇高なる使命だ！！！！！！！！」

バイラヴァ・マンサはバインダーを　　に向ける。

バインダー、胸部、腕部、頭部3連のメガ粒子砲を放つ。

「そんな使命、ただの自己満足の言い訳にしか過ぎない！！！！！！！！！！！！」

はアーマードファンネルを全て展開し、ビームシールドと共に迫り来るメガ粒子砲を全て防ぎきる。

は左手にハイパービームサーベルを抜いて切りかかる。

バイラヴァ・マンサはバインダーの前2つのサブマニピュレータを展開、計4本のビームサーベルが　　と対峙する。

「まだだ、行けファンネル！！！！！！！！！！」

「何！！お前にはそんなに大量のファンネルを操ることなんて出るはずがない！！」

しかしグレミーは鼻で笑い。

「ふつ、いつのことを言っている、私は復活したときより、サイコミュ兵器の訓練をつみ、さらにプルシリーズの脳細胞を基に作った生体コンピュータを使うことによって、私はこの60機のファンネルを使いこなす、死角等ない！！！！！！！！！！」

「生体コンピュータだと！！！！どこまで命を弄べば気が済むんだ、グレミー！！！！」

4本のサブマニピュレータを は左腕1本で立ち向かう。

迫り来るファンネルのビームをアーマードファンネルで弾き、トリプルビームライフルで攻撃する。

しかし、エフィールドは硬く、さらにサブマニピュレータをエフィールドの外側に出しているので、サブマニピュレータには当てられるだろうが、その中には当てられない。

背中 of 21連装ミサイルランチャーを2機とも開き、一斉発射する。

エフィールドも実弾は防げない。

だからこそそのアレだけの火力、ミサイルなんかはまったく持って寄せ付けない。

それは分かっている。

ならばそれを煙幕として利用するだけだ。

熱感知センサーもミサイルの爆発で作動しない、煙幕でカメラは使

い物にならない。

接近できれば巨体のバイラヴァ・マンサはサブマニピュレータで対処するしかない。

今までの動きを見ている限り、サブマニピュレータの動きは此方の動きより遅い。

さすがにグレミーの力ではプルシリーズの動きには到底及ばない。

だからそこに正気はある。

「もらったあああああああああああ！！！！！！！」

懐に入り込んだ　　はハイパービームサーベルでビームカノンとサブマニピュレータの1本を切り裂いた。

だが、やられて黙っているわけではない。

すぐさま別のサブマニピュレータがビームサーベルを構えてこちらを襲う。

はトリプルビームライフルの銃身を縮め、ハイパービームサーベルを右手にも持つ。

迫り来る3本を両手のハイパービームサーベルと、足のビームクロウで受け止める。

そしてバイラヴァ・マンサビームサーベルを右手に取った。

それに残った足のビームクロウで受け止める。

しかし、その体勢は、背中側が胸部メガ粒子砲の射線軸上にあり、このままでは吹き飛ばされる。

「消え去れ、ジュード・アーシタ！……！」

「やらせるかよ、こんなところで……！！……！！」

背中に残ったミサイルを全弾放つ。

狙いなんかない、ただハッチを開放して撃っただけだ。

しかし、この体勢は背中側がバイラヴァ・マンサに向いているので、発射すればまず確実に当たる。

その予測どおり、ミサイルは胸部メガ粒子砲に直撃、発射寸前だったので、結構派手な爆発が起きる。

とは言っても、装甲の硬いバイラヴァ・マンサが、この程度の爆発でやられる訳がない。

一旦距離を置いたが、いつメガ粒子砲の雨が来る分らないので、気が抜けない。

煙が去った後には、バイラヴァ・マンサは胸部に電気が走り、傷ついていた。

左手のビームガトリングガンも破壊されていた、これについては偶然だが。

それに、ジェネレーターが傷付いたのか、今まで常時展開していた、
エフィールドが消えていた。

「くっ、この私がミスを犯すとは、これ以上は邪魔だ、消え去るが
いい！！！」

60機のファンネルがまたしても迫る。

はアーマードファンネルを展開して、防御に移る。

ファンネルのような誘導兵器に関しては、ジュードのほうが一枚上
手だった。

元々、プルツーに依存してクイン・マンサを動かしていたので、訓
練を積んだと言っても、さすがにプルやプルツーのキュベレイに勝
ってきただけのことはあり、確実に数を減らしていた。

「貴様さえ居なければ、貴様さえ居なければ、私はハマーンを倒し、
この宇宙を私の手におさめていたのだ！！！！！」

バイラヴァ・マンサの全身のメガ粒子砲とファンネルが、
に
迫る。

「ふざけるな、貴様の身勝手な独善で、いったい何人の人が傷付い
たと思っているんだ！！！！！！！」

の全身から、黄色い粒子がジュードの怒りを表すかのように
吹き出た。

そして全てのビームを相殺した。

「この力は……まさか、これがニュータイプの成せる力だと、だが、そんなもの……！！！！」

バイラヴァ・マンサの全身からも、紫色の粒子が吹き出る。

「俺は貴様のように自分の自己満足で戦いはしない……皆が平和に暮らせるように、みんなの意思を背負っているんだ……！！」

「前にもそんなことを言っていたな、そんなの、貴様の思い込みに過ぎん……！思いを背負っているなど、弱者の戯言に過ぎん……！」

「……そーでもねえぜ（ないよ）（ないね）……！！」

その言葉とともにバイラヴァ・マンサに向けて3本の閃光が迫る。

とっさにバインダーでガードした。

その砲撃はるか上空で放たれた。

勿論、ジュドーが放ったものではない。

それに声の主は3人、それに当てはまりこの攻撃を繰り出すものは。

「よっ、苦戦しているみたいだなジュドー」

「助けに来たよ、遅くなっただけ」

「まっ、これから頑張るからさ、許してよ」

そこに並ぶのは、3機のEx-Sガンダム。

「ビーチャ、イーノ、モンド、どうやって此処に？」

3人は此処に来るまでの経緯を簡単に話した。

カウサデセが造った、異次元ゲートを開くグレネードを解析、数個だが、生産したのを渡してあり、もしものときは使うようにといわれていたのである。

「他のガンダム乗りたちのところにも、何人かそれぞれ向かったみたいだから、心配はないよ」

「さーて、チャッチャと片付けちゃおうか」

Ex-S3機はビームスマートガンを構える。

「雑魚がいくら集まろうと、結局我が血の定めからは逃れられん！
！貴様らはこの場で消滅させる！！！」

はトリプルビームライフルを展開、ハイメガバズーカモードにする。

「グレミー、何故分らない、全ての血は最初は地球から齎された、地球から生まれでた命に比べたら微々たる物じゃないか、なのになんでそんな物のために争うんだよ！？」

Ex-Sは一斉にスマートガンを発射、そしてリフレクターインコムとインコムを展開する。

スマートガンは後ろ側のバインダーで防ぐが、その影響でバインダーメガ粒子砲が破損する。

バイラヴァ・マンサはE x - Sに対してはファンネルを展開する。

「貴様ら子供に何が分かる！！血の重要さを、それが贐す物の価値を、愚劣な群衆が何を言う、その奢り、後悔させてやる！！！」

はハイメガバズーカを発射する。

それに対抗するかのように腹部のハイパーメガ粒子砲を展開する。

2つの閃光がぶつかるが徐々に、
が押されている。

「アンタの掲げるジオンの理想なんかクソくらえだ、地球が今1番大変なときに可笑しな事をしでかして」

ほんの少しだが、ハイメガバズーカの威力が向上した。

「アンタのその小さな考え方が世界を混乱させる、そのちっぽけな自己満足が世界の、人類の明日を食いつぶす、だから、アンタを止めなくちゃいけないんだよ！！！！！！！！」

から発せられる粒子が少しずつ濃くなっていく。

グレミーは少し怒りながら言葉を発する。

「大儀もない、ただ時代の流れに任せて戦っていた餓鬼が何を言う、私の血の宿命をちっぽけな自己満足だと、何も背負うことの無い者

が「そんなのだから、何も見えなくなるんだよ、何処にも行けなくなるんだよ！！！！！！」っ、分かったようなことを！！」

バイラヴァ・マンサの粒子も少しずつ濃くなる。

「ジウドーの言ってることは正しいぜ、アンタはただ自分の欲望を満たすために血を言い訳にしているだけだ！！！」

ビーチャのE x - Sがファンネルを10機ほど破壊した。

「貴方のその考えは、血の定めを背負ったことを宿命と言いながら、それを戦いの言い訳にしているんだ！！！」

イーノのE x - Sはビームサーベルで切りかかり、バイラヴァ・マンサの左後ろのバインダーから延びるサブマニピュレータを1本切る。

「俺らにだって意思がある、可能性だってある、それを潰させる訳には行かないんだよ！！！」

モンドのE x - Sがスマートガンでバイラヴァ・マンサの右前のバインダーに直撃、メガ粒子砲を潰した。

「ぐうう、私の、私の、私の血は！！！！！！！！血の宿命は、こんな事で終わりはしない！！！！！！！！」

「邪魔なんだよ、アンタは血に縛られて、宿命を言い訳にして、人の可能性を潰して、もうアンタはこの世界に居ちゃいけないんだよ！！！！！！」

両者の砲撃がやむと、すぐさま両者はビームサーベルを構える。

バイラヴァ・マンサは今までにない驚異的なスピードでファンネルを操ると、EX-S全てのインコムを落とし、さらにその腕をもぎ取る。

「みんな、アーマードファンネル、行ってくれ!!」

すぐさまアーマードファンネルを向かわせ、ビーチャたちを守る。

それでも自らはバイラヴァ・マンサに向かっていく。

振り上げたハイパービームサーベルは巨大化し、まさにシャイニンググフィンガーソードの様でもあった。

しかし、バイラヴァ・マンサのビームサーベルも同じくらいに巨大化していた。

2機のビームサーベルは大きな円を描くように振るわれ、ぶつかる度に強い衝撃波を発した。

それだけじゃない。

2機が発するサイコフレームの粒子が其々の剣をより強くしている。ぶつかる度の異常なまでに強い衝撃波はこの所為でも有るだろう。

は腹部ハイ・メガ粒子・カノンを発射、それをバインダーで受け流す。

バイラヴァ・マンサの腕部メガ粒子砲が迫ると、前転をする様に後ろに回りこむ。

振り向きざまに2機はビームサーベルをぶつける。

バイラヴァ・マンサは残ったサブマニピュレータを全て展開する。

しかし、はビームサーベルをサブマニピュレータが動きについてこれないほどの速度で振るう。

縦横に振るうので、動きの制約が強いサブマニピュレータは追って行けない。

1本、2本、3本と残ったサブマニピュレータ6本が、2本までに斬り減らされる。

頭部3連メガ粒子砲を発射しようとするが、それより速く、の頭部ハイメガキャノンがバイラヴァ・マンサの頭部を破壊する。

だが、バイラヴァ・マンサも右手に持ったビームサーベルで、の左足を切り落とす。

そしてはビームサーベルで右前のバインダーを切り落とす。

しかし、残っている30機近いファンネルが迫る。

そして、左手に持っていたハイパービームサーベルを撃ち落とされた。

だが、それをバイラヴァ・マンサの胴体に向けて投げつける。

そして爆発とともに、最大出力で背部に回る。

一瞬目がくらんだ、グレミーはそれに追いつけてない。

「これで……!!」

「させるか……!!」

今、此処でバインダーのサブマニピュレータを後ろに戻し、ビームサーベルで防ごうにも、バインダーで防ごうにも間に合わない。

ならばとでも言うように、背部メガ粒子砲が火を噴く。

今までこの戦闘で、一度も使わなかった故にその存在を軽視していた。

左手にあるビームシールドをとっさに展開するが完全に体勢が崩れる。

しかもビームサーベルを破壊もされる。

「止めた、宇宙の暗闇に堕ちろ、ガンダム……!!」

バイラヴァ・マンサのビームサーベルが迫る。

「終われないんだよ……!!」

顔だけ何とか向けると、そこからハイメガビームブレードを展開して、バイラヴァ・マンサの右手を貫く。

さらにトリプルビームライフルが左手も撃ち抜く。

しかし、バイラヴァ・マンサはその巨大な足で
を蹴り飛ばし
てくる。

「ならばこれで、ファンネル！！！！！！！！」

そこに追い討ちのようにファンネルを向かわせる。

その砲口が向けられたとき、さすがにだめだと確信した。

「此処で、終わるか……………」

しかし、いつまでたっても砲撃は来ない。

不思議だった、グレミーの性格上、確実に殺せるときは、殺しておく
と思ったのに。

勿論爆発音も聞こえていない。

誰かが身代わりに為った訳でもなければ、撃ち落された訳でもない。

そう、止まっていたのだ、ファンネルが、全て。

「なぜだ、何故ファンネルが動かない！！」

『ジュードーはやらせないよ』

『お兄ちゃんはお前が守る』

『私達を人として見てくれた人だから』

声が聞こえてきた、3人程度ではない、もっと多くの人の声が。

「この声、プルなのか？それともプルツーなのか？」

『皆居るよ』

『もう、私達の妹を戦わせないためにも』

「此処で彼を止めて」

「分かったよ、皆、俺は、個々の人がもつ悪意を、許しはしない。だから、グレミー、アンタを止める……!!」

から発せられた黄色の粒子がさらに濃く、大きく、激しくな

トリプルビームライフルをハイメガバズーカモードにして、右腕から取り外す。

それを左手で掴み、腹部ハイ・メガ粒子・カノンに接続する。

「こんな事で、私に迷いはない、この先に何があるとも……！！！！！！」

バイラヴァ・マンサの腹部ハイパー・メガ粒子砲も展開される。

2機を包んでいた粒子が、其々の砲口に収束されていく。

「や、やばいよこりや、このままじゃ押し負ける……………」
「大丈夫よ、ジュードは負けない」え？」

何処からか聞こえてくる、プルやプルツィ、その妹達の声。

『まだ終わらないよ、人の心の光が途絶えない限り』

『グレミーを血の宿命から助けてあげて』

『彼が居たから私達は生まれてきた、だから、彼も助けてあげてほしいの』

「もう、私達のような悲しみを繰り返さないために」

そして何人もの声が同時に響く。

「ジュード、お願い、グレミーを助けて!!!!!!!!!!!!!!」

そして新たに聞こえる、大切な妻、ルーの声。

『ジュード、必ず帰ってきて、私は月であなたを待っているから』

妹、
リイナの声。

『お兄ちゃん、ちゃんと帰ってきてよ、ルーさんを悲しませちゃ駄目なんだからね』

仲間達、ビーチヤ、エル、イーノ、モンドの声。

「ジュドー、一緒に月に行くんだろ、速く来いよ」

『アンタが居なきゃ締まらないんだから』

『僕らは信じているよ』

『ちゃんと勝って帰ってくるってわ』

ジュードーはゆっくりと目を閉じた。

「ああ、そうだな、見せてやろう、人の心の光が魅せる、可能性つて奴をさ……!」

目を見開くと、
出される。

から今までにないほど大量の黄色の粒子が放

「グレミー、これが俺達の、可能性の力だあああああああ
あああああああああ！！！！！！！！」

ダブルハイメガバーストの威力が格段に上昇した。

「ば、馬鹿な、こんなところで、私の宿命は……」

バイラヴァ・マンサのコクピット部を、ダブルハイメガバーストの閃光が包み込み、過ぎ去ったあとには何も残っていない。

のボディも、ダブルハイメガバーストを限界以上の出力で放ったため、機体各所が悲鳴を上げていた。

「さて、ピーチャ、イーノ、モンド、ルーとリイナとエルが待ってる。シャングリラに帰って引越しの準備だ」

「了解」

4機は、異次元空間から元の次元に戻っていった。

そして、ラー・カイラムへと進む。

残る敵の将は12機。

第二十一話「最終決戦くジュドーVSグレミー」(後書き)

如何でしたでしょうか？

射撃シーンが多く、難しかったです、その所為で見ごたえなど元から無いのに余計無いんじゃないかって心配です。

次回はバナージVSフロンタルです。

感想などお待ちしております。

機体説明 ユニコーンガンダムエルシャンス シナンジユグリフォン（前書き）

今回はユニコーンとシナンジユです。

エルはフランス語で翼、シャンスは輝くです。

シナンジユがグリフォンなのは、ユニコーンと相対する存在であるバンシイのライオンがあるので、ユニコーンと同じ馬で書かれているペガサスと相対する存在として、羽を持ち、ライオンに何か関係のある幻獣と言う事で下半身がライオンであるグリフォンと、頭がライオンのキマイラと、悩んだ結果、グリフォンになりました。

それでは機体説明をどうぞ。

機体説明 ユニコーンガンダムエルシャンス シナングジュグリフォン

機体名 ユニコーンガンダムエルシャンス 外見 通常のユニコーンガンダムからほとんど変わってない。バックパックにペガス・フィン・ファンネルが装備されているため、デストロイモード時は左右のジェットがない代わりに、ファンネルラック上のブースターがある。

格闘武装 ビームサーベル*6 サイコミュブレード

射撃武装 新型ビームマグナム*2 腕部装備ダブルビームガトリングガン*2

特殊武装 ペガスス・フィン・ファンネル*8

専用シールド*2 掌に小型ビームシールド フルサイコフレーム採用 改良型NT-D、NS-D搭載。ミノフスキードライブ搭載。ビームサーベル 背中と腕、さらに膝のサイコフレームの露出部分に一本ずつ収納、そのままビームサーベルを出すか、膝から取り出して手に待つか選べる。

サイコミュブレード 全身から出るサイコフレームの物理的エネルギーを固定し、ビームサーベルやファンネルにまわせ、ブレード化、巨大化、斬撃を飛ばす、など出来る、しかし斬撃を飛ばした際、大量に粒子を消費するため連発できない、さらに機動力も若干低下する、デストロイモードでしか使えない。

新型ビームマグナム カートリッジのエネルギーを数回に分けて放

てるようになった、逆に何発か収束して撃つ事も出来る、。

ペガサス・フィン・ファンネル 性能としてはサードのものと同
んど変わらない、8機に増えたことにより、より大量の物理的エネ
ルギーを制御できるようになった、さらにサイコフレームの発生さ
せる粒子を翼状に収束、より高速に動くことが出来る。

ファンネルラック Hi- のような形でバックパックの側面にあ
り通常時は下に向いており、ファンネルを飛ばせないが、デストロ
イモードは羽を広げるように上を向きファンネルを飛ばせる。

掌のビームシールドにサイコフレームのエネルギーを集中させるこ
とで、コロニーレーザーでも防ぐ、パルマフィオキーナのようにも
使える。

改良型NT-D パイロットからの脳波以外に、ボタンとレバー操
作も受け付ける、負担減少で長時間稼動できる。

他にもリミッターの掛かったシステムがある。

機体名 シナンジュグリフォン 外見 肩にミノフスキードライブ
のエネルギー放出システムがある。腕にローゼン・ズールの腕を小
さくしたような武器がついている。バックパックがフェザー・ファ
ンネル上になってファンネルラックがついている。角が少し大きく
なっている。

格闘武装 ビームサーベル*2 ビームソードアックス*2 腕部
ビーストクロウ*6 サイコミュブレード

射撃武装 ビームライフル*2 胸部メガ粒子砲*1

特殊武装 腕部ビーストクロー*2 グリフォン・ファンネル*8

ビームサーベル 袖にあるビームサーベル、抜かずに使える

ビームアックス 腰に装備されている。

腕部ビーストクロー ローゼン・ズールの腕を小さくしたようなもので、遠隔操作兵器として使える、中心からビームサーベル、その周りに3連装ビームガン、クローとしても使える、腕についたままでもビームサーベルを出せる、無線式。

サイコミュブレード ユニコーンと同じ。

胸部メガ粒子砲 ササビーに装備されていたものと同一。

ビーストクロー上部にビームシールド、手の甲にもビームシールド、装甲内にサイコフレーム採用、所謂フルサイコフレーム。

グリフォンファンネル フェザー・ファンネル状のファンネルで、ペガサス・フィン・ファンネルと同じ効果がある、突撃兵器としても使える、ファンング並の突貫力を持つ。

肩のミノフスキードライブのエネルギー放出システムによって、バツクパックではなく、ファニックスガンダム等と同様に、肩が主のスラスターとなっている。

他にも特殊機能あり。

機体説明 ユニコーンガンダムエルシャンス シナングユグリフォン（後書き）

ネタばれになるかと思いますがここには書いていないシステムが2機ともあります。

そちらは本編で書きます。

それでは次回の本編をどうぞ。

第二十三話「最終決戦くバナージVSフロンタル」(前書き)

今回はバナージVSフル・フロンタルです。

ここには書いてませんが、メガラニカはあのまま太陽系の外縁部に漂流、ユニコーンとバンシィはその中に封印されていると言った形で、ユニコーンエルシャンスとバンシィフルアーマーはそれを回収して製作されていると考えてください

少し遅れましたが、第二十三話をどうぞ。

第二十三話「最終決戦くバナージVSフロントアル」

ユニコーンはまだデストロイモードに為っていない。

それでも、ラプラスの箱をめぐる戦いで、かなりの技量を身につけ、1年近くリディやジンネマンの指導の下、訓練やトレーニングを重ねてきたので、技術で完全に劣っては居ない。

ユニコーンはライフルを背中に担ぎ、右腕のビームトンファアを途中まで展開。

グリップを取り外すと右手にとる。

シナンジュも袖口からビームサーベルを抜き放つ。

2機は弧を描くように旋回しつつ、お互いの距離を詰めて行く。

そして間合いに入ると、相手に向けて一気にビームサーベルを振るう。

まずは先端が触れる、そしてそこからさらに間合いを詰める。

鏑迫り合いになるとお互いが相手を突き飛ばそうと競り合う。

コクピットにバナージの叫びがこだます。

「なんで貴方はまだ戦うんですか!？」

フロントアルは口元を歪ませながら答える。

「私には器たる役目がある。たとえ私の存在が何であろうとも、存在しなければならぬのだよ」

2機は同時にお互いから離れると、ライフルを其々手に取る。

ユニコーンは右手に持っていたグリップを左手に移しておいたので、右手に持っている。

さらにビームマグナムの弾を数回に分けて使うように設定した。

通常のビームマグナムが通常のビームライフル4発分に相当するので、1つのカートリッジで4発まで撃てる。

カートリッジは5個繋げてあり、それが4つ、最大80発までなら撃つことが出来る。

2機はそのまま旋回しながら、撃ちあい、避けていく。

「貴方は、何でそこまでして器になろうとするんですか!!」

「それが私の存在意義だからだ、それ以外に理由は要らない、あつても不要だ」

シナンジュは肩のスラスターからミノフスキードライブの粒子を吹かして接近してくる。

左手の袖からビームサーベルを展開、そのまま近づいてくる。

「確かに貴方はシャア・アズナブルに似せて造られた強化人間だ、

「ただど1つの命には変わらないじゃないか!!」

「サイコフレームの導きによって、一度は人間を超えた者の言葉とは思えんな」

シナンジュは左手を右から左に振るう。

それをユニコーンはビームサーベルで受け止める。

「一度到達したから分かるんだ、人間の命は、その精神だけじゃダメなんだ、肉を持つからこそ、心がある、人を思うことが出来る、貴方だって生まれ方は普通じゃないのかもしれない、でも、1つの心^{いのち}を持った人間じゃないか!!」

「私は強化された、その時すでに私という個は失われた、だからこそ、器となる。だからこそ、彼らはフル・フロンタルと言う中身なき器に、シャア・アズナブルと同等の力と采配を持った、『赤い彗星の再来』と言う美酒を注いだのだ」

シナンジュはユニコーンを弾くと胸部のメガ粒子砲を開き、発射する。

「貴方の理屈は聞き飽きた!!!!!!!!!!」

ユニコーンが薄赤い粒子を発しながら変形していく。

迫り来るメガ粒子砲はユニコーンの周囲に展開されたフィールドによって弾かれる。

「器が何だ、似た力が有るからって何なんだよ。その人は世界に1

人しかいなくて、誰も変わりに成れなくて、生きているからこそその人間なんじゃないか！！！！！！」

ユニコーンはデストロイモードへと変形する。

「貴方には無いのか！！生きたいという思いは、可能性は無いのか！！！！」

「私には何も無い、ただの無さ。可能性は個をいずれ破壊する。ラプラスの箱が可能性足り得なかったからこそ、世界は安定していた、故に私に可能性など必要ない」

ユニコーンはビームマグナムをカートリッジ一個を使って放つ。

シナンジュはそれを上昇して避けると、其処にはすでにユニコーンが移動していた。

左手に持っていたグリップは右腕に戻しており、背中のビームサーベルのグリップ一つ無くなっている事から、右手にビームサーベルが光っていた。

それを振りかざし、一直線にシナンジュめがけて振るわれた。

ビーストクロウのビームシールドを展開して防ぐ。

「だが、一度死んだ私の中のシャア・アズナブルの呪詛は、何処かへと消えた。しかし、わたしは、今一度シャア・アズナブルと言う美酒を見つけた、カウサデセの造る世界に」

「いつまでも幻想に溺れて、何で光を見ようとしなない！！！！オード

リーは今、スペースノイドの自治独立と待遇改善のための交渉をずっと行っているんだぞ。箱を必要とせず、人間の光を信じて……」

再度振るったビームサーベルをシナンジュの右袖のビームサーベルが止める。

ユニコーンは追い討ちに膝のビームサーベルを展開、膝蹴りの要領でコクピットを狙う。

依然戦ったときは、腕を吹き飛ばし、足を吹き飛ばしても戦おうとしていた。

なら、今度はそんな事にならない様に直接潰す。

シナンジュはそれを後方に仰け反る事で避ける。

一旦距離を置くと、2機はその場に停止する。

「君のその力は危険すぎる。死なせるのは惜しいが、これも私達が歩む世界のためだ、死んでくれ、バナージ君………」

その時、シナンジュの全身から漆黒の粒子が噴出した。

シナンジュの頭部が真ん中から2つに分かれる。

それが首を伝って後ろに回る。

肩の装甲や、腕や胸、腰に膝に脛の装甲が開いていく。

そして、モノアイだった顔は、頭部にそびえる角が中心の芯を残し

て、両側に開かれる。

その顔は、まさにガンダムだった。

「さあ、見せて上げよう、私のシナンジュ、いや、グリフォンガンダム、真の性能を……！」

その姿はまるでユニコーンのデストロイモードを行っただかのようなのだ。

そして、その姿はバナージの精神に、何か得体の知れない不安感を宿らせた。

「ふ、ネオ・ジオンへの駆逐の象徴たるガンダムに私が乗るとは皮肉なことだ。しかし、私は君を殺す」

その機体は、すでにシナンジュではない。

ガンダムを破壊するために造られた存在。

赤い装甲と黒いサイコフレームのガンダム、『グリフォンガンダム』となっていた。

グリフォンの背中からグリフォンファンネルが飛び立つ。

それに対処するように、ユニコーンはペガサス・フィン・ファンネルを飛ばす。

2機の間を閃光が駆け抜ける中、その腕にあるビームサーベルはお互いを切り裂こうとぶつかり合う。

ユニコーンは牽制に両腕のビームガトリングガンを放つ。

何度も使っているし、個々にくるまでにガガの対処でかなりのメガ粒子弾をかなり消費しているので残弾数は少ない。

グリフォンは両腕のビームガンを連射してくる。

ビームガトリングガンはカートリッジ式だが、グリフォンのビームガンはジェネレーターに繋いであるので、ジェネレーターが故障でもしなければ止まらない。

残弾の少なさを危惧していたが、遂に右腕のガトリングに弾切れが起こる。

ガトリングをパージすると、それを蹴ってグリフォンへとぶつけようとする。

グリフォンは軽く腕で弾く、そしてビーストクロウのビームサーベルを展開、切りかかる。

右腕のシールドで受け止め、そのまま密着した状態で蹴りを入れる。

ユニコーンのパワーでも間接を砕くまでには至らなかった。

右腕のシールドをパージすると、それを物理エネルギーを使ってファンネルのように操作する。

ユニコーンはシールドの表面をグリフォンに向けて飛ばす。

背中ofビームマグナムを構え、シールドを相手に突きつけながら進む。

グリフォンはシールドを咄と見抜いていた。

シールドにグリフォンファンネルをぶつけて弾く。

ユニコーンはビームマグナムを構えていて、シールドが弾かれるとすぐさま発射する。

しかし、腕のビームシールドは粒子をまとって強固となり、ビームマグナムを弾いた。

グリフォンは腕のビーストクローをファンネルのように操る。

フロントルはバナージに呼びかけるように話出す。

「どうして分からない、私が正しいのだと言うことが、この世界を变革させるには、人は重力に魂を惹かれすぎた」

「だけど、それを断罪するのは貴方じゃない、人間一人一人の意思だ！――！」

ビーストクローのビームサーベルが上下から迫る。

それを右手のビームトンファアを展開し、左手はシールドで防ぐ。グリフォンは両袖からビームサーベルを出して切りかかる。

それを膝のビームサーベルで止める。

「人間は、人間の光は、貴方に滅ぼされるほど弱くは無い」

ユニコーンから放出されていた粒子が増加していく。

「マリィダさんが教えてくれた。殺すだけの意思は自分も、大切な人も傷つけるって、貴方には、大切な仲間も、愛する人も居ないから、ただ道具としか見ていないから、分かりはしない……！」

ビーストクロウを弾き、グリフォン自身も弾くと、左手のビームガトリングガンを連射する。

グリフォンはビームシールドを展開して防ぐ。

撃ち続けた結果、ガトリングの残弾数はゼロ、シールドごとパージするとグリフォンに向けて投げ飛ばす。

それを袖のビームサーベルで切り捨てると、両手のビームライフルを連射する。

ユニコーンは掌のビームシールドを展開して防ぐと、ビームマグナム1丁のカートリッジを全て開放する。

「ダグザさんとギルボアさんが教えてくれた、憎しみだけの心では、何も掴み取れないって、周りに支えてくれる人がいるから、強くなれるって。貴方に居るのか、自分が信じ、相手が信じ、支えてくれる人がいるのか……！！！！！！！！」

カートリッジ3発分の威力を持った砲撃が迫る。

グリフォンはすぐさま回避行動をとるが、左足を吹き飛ばされる。

ビームマグナムを背中に担ぐと、背中のビームサーベル2本を抜き、グリフォンに切りかかる。

その間にも2機の周りはファンネルが飛び交っている。

罅迫り合いとなる。

グリフォンは何とか弾くが、その時、ユニコーンの膝がグリフォンの右手のビームライフルを切り裂く。

ユニコーンはすぐさま左のグリップを背中に仕舞い、カートリッジが1個しかないビームマグナムを左手に構え、最後の1発を放つも、グリフォンはシールドで受け止める。

此処に来るまでに使ったのは、ガガやレギナに対応するために使ったカートリッジは7つ、さらに最初のほうで使った3つで、残りの予備カートリッジは無くなる。

通常出力で2個、チャージ出力で3個、つまり後はこのビームマグナムのカートリッジ5個しかない。

無駄弾は出せないのは分かっている、だが敵が敵だ。

単発式に変え、まず2発使う。

「ロニさんが教えてくれた、人の心が在るから、1人の人間として存在しているから、分かり合える、共感し合える。貴方には決して分からない、人の心の光を！！！！！！」

そしてその手に持ったビームマグナムの引き金に指を掛けた時、グリフォンはそれよりも速く、すでに腕を動かし、最後のカートリッジとともに、銃を吹き飛ばし、ビームライフルによって破壊した。

「私はスペースノイドの総意によって誕生した器だ。ちつぽけな人の光がいつか集まろうと、私に注がれた酒を蒸発させることなど出来はしない!!!!」

「アクシズが落ちたとき、繋がったからこそ守られた」

周りから響く声、ユニコーンの中に眠る、散っていった者達の魂ひかり

ユニコーンの全身から七色の光があふれる。

387

グリフォンからも赤黒い、さらに濃くなった光があふれ、ビーストクローを腕に戻す。

グリフォンは腰のビームソードアックスをビーストクローに接続、背中のファンネルラック周辺に、グリフォンファンネルを集中させる。

ユニコーンは、羽を広げるかのようにペガサス・フィン・ファンネルを広げる。

2機はまるで本物のグリフォンとペガサスに為ったかのようにサイコミュの光が包み込む。

2機が腕のビームサーベルを振るうと、その動きに合わせて粒子が斬撃状に飛ぶ。

2機は驚異的なスピードで近づき、ビームサーベルをぶつける。

ユニコーンは左膝のビームサーベルを展開し、切りつけるが、グリフォンは上方に前転して回避、そのまま左足を切り捨てた。

しかし、今度は右膝のビームサーベルでグリフォンの左目を貫く。

全体を切ることは出来なかったが、左半分を切り裂いた。

グリフォンはファンネルを集中させて左腕ビームソードを巨大化、ユニコーンもそれと同じようにファンネルを集結し、右腕のビームサーベルを巨大化させた。

2機は拳を打付けるかのような体勢で剣をぶつけた。

グリフォンはユニコーンを弾くと、体勢が崩れた所へ右腕のビームソードを突きつける。

ユニコーンは左掌のビームシールドで受け止める、がグリフォンフアンネルで強化されたビームソードを受けきれず、左腕を貫かれた。しかし、ユニコーンは下から上へとビームサーベルを振り上げ、グリフォンの左腕を切り裂く。

「可能性があるから、明日が見えなくても、人間は前にすすめるんだ！……………！」

ユニコーンの中央パネルに字が示される。

『Last system primed ready <PSY
イコ フェニックス
CHO PHOENIX>Maximum operating』

ユニコーンの全身を包んでいた粒子がさらに強く輝きながら、次第にその姿を気高い鳳凰へと変化させる。

そう、この力こそ、『サイコミューブレード』が成す、最終能力。

全てのサイコフレームの発する粒子を刃へと変え、敵全てを切り捨てる。

「オードリー、すぐに帰るからね」

ユニコーンが発したような言葉に共鳴するかのように、更なる輝き

を放つ。

それはまるで太陽の如し。

「ナンセンスだ……………だが!!!!!!!!!!!!」

グリフォンからも更なる輝きが放たれる。

2機はお互いに最後の一撃を入れようと近づいていく。

ユニコーンは右掌を開き、ビームシールド発生装置に全てのエネルギーを集中させていく。

グリフォンも、その鉤爪のごとき手に力を集中させていく。

虚空に2人の叫びが木霊す。

2機の右腕はお互いを破壊しようとぶつかり合う。

数秒間の競り合い、そして決着はついた。

ユニコーンの右腕がエネルギーに完全に包まれ、さながら小さな鳳凰のようになった。

そしてエネルギーが、腕から飛び立った鳥のようにグリフォンのコクピットを貫いた。

「これが、人の心の光か……………」

グリフォンは、宇宙の闇に溶け込むように消えていった。

ユニコーンはデストロイモードからユニコーンモードへと戻る。

「さあ、帰ろう、ユニコーン。俺達の帰るべき場所へ」

ユニコーンは、その腹の中にある最高の乗り手とともに、異空間から離脱、母艦へと向かって行った。

残る敵の将は12人

第二十三話「最終決戦くバーナージVSフロンタル」(後書き)

いかがでしたか。

若干小説最終巻のネタばれが含まれています、スイマセン。

次回はトビアVSドウガチです。

感想などお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6511v/>

Gジェネレーション The Creatures 本編

2011年11月23日14時52分発行